

自己点検・評価報告書

令和6（2024）年度

川崎医療短期大学

目 次

はじめに

| | |
|-----------------------------|----|
| I. 組織図 | 1 |
| II. 役職者一覧 | 2 |
| III. 委員会委員一覧 | 3 |
| IV. 点検・評価 | 5 |
| 1. 大学の基本方針 | 5 |
| 2. 教育課程 | 7 |
| (1) 教育課程の点検と改善 | 7 |
| (2) 各学科の教育効果の推進に向けての取組と学修成果 | 11 |
| 看護学科 | 11 |
| 医療介護福祉学科 | 15 |
| 3. 学生の受け入れ | 19 |
| (1) 素質のある学生確保 | 19 |
| (2) 入学選抜方法 | 19 |
| (3) 特色ある広報活動 | 20 |
| 4. 学生支援 | 22 |
| (1) 学生生活支援体制 | 22 |
| (2) 健康の維持・管理 | 23 |
| (3) 進路支援 | 25 |
| 5. 教員・教員組織 | 27 |
| (1) 教員組織 | 27 |
| (2) 研究活動の促進 | 27 |
| (3) 研究活動環境整備 | 28 |
| 6. 社会連携・社会貢献 | 29 |
| (1) 地域連携 | 29 |
| (2) 高等学校との連携 | 30 |
| (3) ボランティア活動 | 30 |
| (4) 国際交流 | 31 |
| 7. 内部質保証 | 33 |
| (1) 自己点検・評価活動 | 33 |
| (2) 教員活動評価の実施 | 34 |
| (3) IR室と点検評価委員会の連携 | 35 |
| (4) 学生による評価 | 36 |
| (5) 外部評価 | 38 |

| | |
|--------------------|----|
| 8. 管理運営 | 40 |
| (1) 事務組織の整備 | 40 |
| (2) 人事労務管理 | 40 |
| (3) 施設整備管理と防火・防災対策 | 41 |
| (4) 地球温暖化対策の実施 | 41 |
| (5) 図書館の運営・管理 | 42 |
| (6) 寮の運営・管理 | 43 |

[参考資料]

| | |
|---|----|
| 資料2-1 学修成果の達成状況等調査結果 | 44 |
| 資料2-2 授業科目分野別 GPCA | 53 |
| 資料2-3 学生による授業評価結果 | 53 |
| 資料2-4 国家試験結果 | 54 |
| 資料3-1 学生在籍状況 | 54 |
| 資料3-2 在籍者内訳 | 54 |
| 資料3-3 学科別入学試験結果概要 | 55 |
| 資料3-4 出身都道府県別在籍者数及び入学者数 | 56 |
| 資料3-5 オープンキャンパス等開催日 | 56 |
| 資料4-1 卒業生の進路状況 | 57 |
| 資料5-1 専任教員数 | 57 |
| 資料5-2 公的研究費（競争的資金等）の獲得件数 | 57 |
| 資料5-3 教員研究費及び学会旅費の執行状況 | 57 |
| 資料7-1 FD・SD 研修会実施結果 | 58 |
| 資料7-2 教員活動評価結果 | 59 |
| 資料7-3 学生生活満足度調査及び生活実態調査結果 | 60 |
| 資料7-4 「川崎医療短期大学の教育・学生生活に関するアンケート（卒業後アンケート）」調査結果 | 77 |
| 資料7-5 「就職支援に関するアンケート調査」結果概要 | 86 |
| 資料7-6 「卒業生採用に関するアンケート調査」結果概要 | 89 |
| 主要行事 | 97 |

あ と が き

はじめに

令和6（2024）年度、本学は岡山市北区に新校舎棟を設置して3年目を迎えました。川崎医科大学総合医療センター、同高齢者医療センターとで構成される川崎学園岡山キャンパスは、高度医療に対応できる看護師と医療に強い介護福祉士を養成する本学にとって充実した学修環境となっています。近年、医療福祉を取り巻く環境は大きく変わってきましたが、「人間（ひと）をつくる 体をつくる 医療福祉学をきわめる」という大学の理念を変えることなく、医療と福祉の融合を目指し、かつ超高齢社会のニーズに応える人材の育成という視点で、教育・研究活動を実践しています。18歳人口の減少により、短期大学のみならず大学教育全般を取り巻く環境は厳しさを増していますが、大学の理念のもと、引き続き社会の要請に応えうる医療福祉人材の育成に努めてまいりたいと考えています。

川崎学園では、例年10月に学園に所属する各施設が参画して、倉敷市の松島キャンパスで学園祭を実施していますが、岡山キャンパスでも社会に開かれたイベントを企画することになり、7月6日に「川崎学園岡山キャンパス 七夕健康まつり」を開催しました。健康に関する公開講座、医療従事者による病院のお仕事紹介や体験授業、フレイル予防・健康体操、健康チェック・相談コーナーなど、様々な企画を用意して地域の皆さまをお迎えしたほか、キッズコーナーやキッチンカーも配置し、多くの子どもたちにも楽しんでもらえました。今後も地域社会との繋がりを大切にし、本学ができる社会貢献を考え、実践していきたいと思えます。

本学は、令和2（2020）年度に一般財団法人大学・短期大学基準協会による第3期目の機関別認証評価を受審し、適格と認定されました。その際には、「自らの掲げる教育理念の実現及び教育目標の達成に向けて順調に進捗している」と高い評価を受けることができました。次期認証評価受審は、令和9（2027）年度の予定ですが、令和6（2024）年2月に改定された新たな第4期の短期大学評価基準にのっとり、自主的な改革・改善に取り組みながら、準備を進めているところです。教職員一人ひとりが日々の自己点検・評価活動を積み重ね、適切なフィードバックを通じて改善につなげるとともに、学生の声も聞きながら、組織としての内部質保証を図ってまいります。

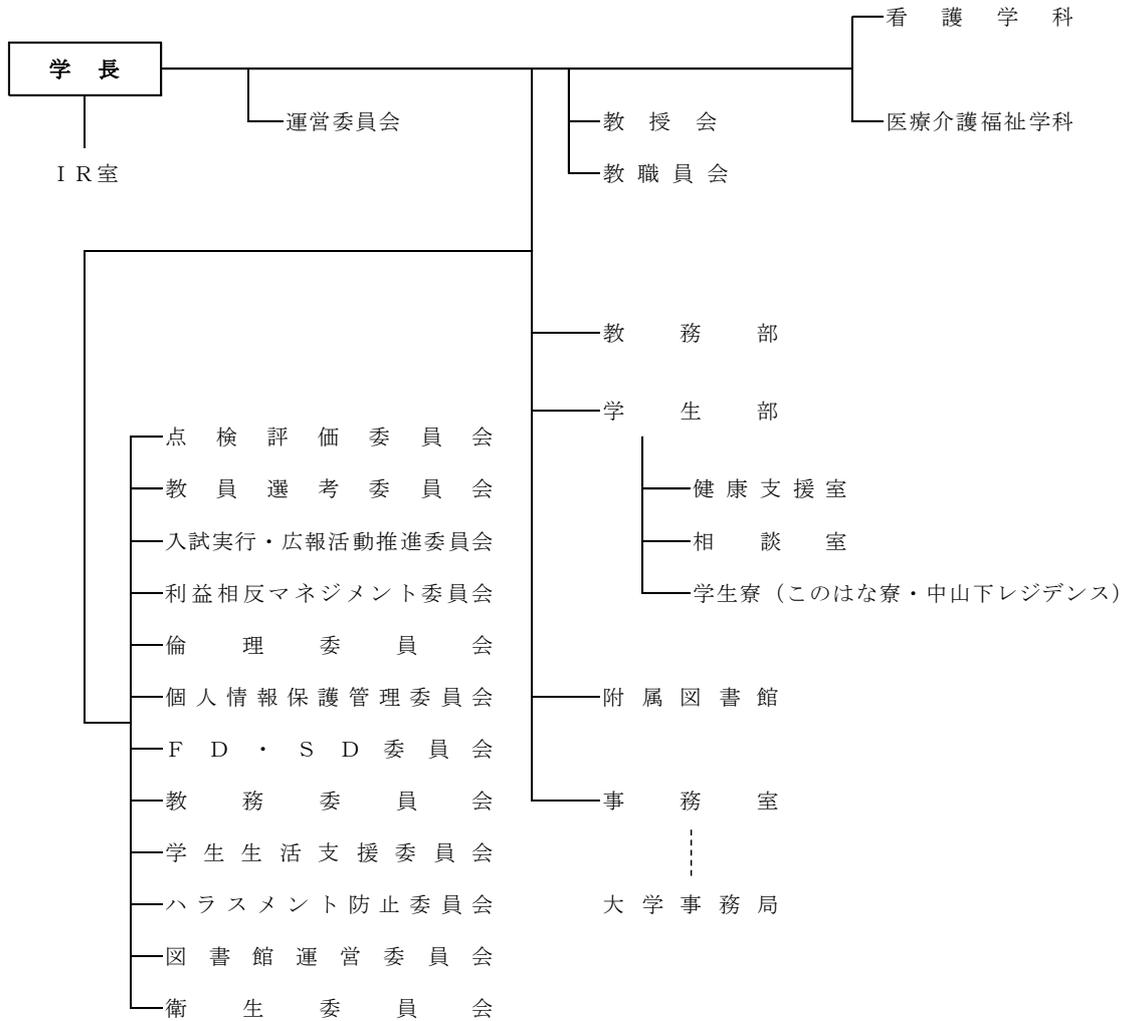
令和7（2025）年8月1日

川崎医療短期大学

学長 秋山 祐治

I. 組織図

川崎医療短期大学運営組織図（令和6（2024）年4月1日現在）



Ⅱ. 役職者一覧

令和6（2024）年4月1日現在

| 役職名 | 氏名 |
|--------------|-------|
| 学 長 | 秋山 祐治 |
| 副学長 | 新見 明子 |
| 教務部長 | 松本 明美 |
| 学生部長 | 新見 明子 |
| 教務部副部長 | 榊本 朋子 |
| 学生部副部長 | 黒田 裕子 |
| 看護学科学科長 | 岡田みどり |
| 医療介護福祉学科学科長 | 山田 順子 |
| 看護学科副学科長 | 林 千加子 |
| 医療介護福祉学科副学科長 | 熊谷佳余子 |
| 附属図書館長 | 松本 明美 |
| 事務長 | 田中 尚 |

Ⅲ. 委員会委員一覧

令和6（2024）年度各種委員会等委員一覧（令和6（2024）年4月1日現在）

| 2024.4.1付 | | 委員 | |
|----------------|-------------------|---|--|
| 委員会 | 委員長・副委員長 | 委員 | |
| 運営委員会 | 学長 | 副学長, 学長補佐, 副学長補佐, 教務部長, 学生部長, NS学科学科長[指], CW学科学科長[指], 事務長 | |
| 教員選考委員会 | 学長 | 副学長, 学長補佐, 副学長補佐, 選考教員の所属学科学科長, 教務部長, 学生部長 | |
| 点検評価委員会 | 学長 副学長[指] | 学長補佐, 副学長補佐, 教務部長, 学生部長, 各学科学科長, 学外有識者(岡山市), 事務長, 学生代表, (他学長認者) 教員活動評価:(副学長) 自己点検・評価:(副学長) 認証評価(2024年度まで): ALO(新見), A委員(秋山), C委員(榎本) | |
| 入試実行・広報活動推進委員会 | 学長 教務部長[指] | 副学長, 学長補佐, 副学長補佐, 学科学科長, 学科学科長, 学科学科長, NS学科学科長, CW学科学科長, 事務長, 事務推薦委員(池田), (他学長認者) | |
| 利益相反マネジメント委員会 | 学長 副学長[指] | 学長補佐, 副学長補佐, 教務部長, 学生部長, 各学科学科長, 事務長, 学外有識者(医福大研究担当副学長) | |
| 倫理委員会 | 副学長[指] | 学長補佐, 副学長補佐, 教務部長, 学生部長, 各学科学科長, 事務長, 学識経験者(医福大研究担当副学長) | |
| 個人情報保護管理委員会 | 学長[指] 副学長[指] | 学長補佐, 副学長補佐, 教務部長, 学生部長, 事務長, 学内情報ネットワーク運用責任者 | |
| FD・SD委員会 | 教務部長[指] 榎本 [指] | 学生部長[指], 重田[指], 三宅[指], 山田[指], 事務長[指] | |
| 教務委員会 | 教務部長 教務部副部長 | 学科学科長, 重田[指], 山田[指], 事務長, 事務推薦委員(池田・松若) | |
| 学生生活支援委員会 | 学生部長 学生部副部長 | 学科学科長, 重田[指], 山田[指], 事務長, 事務推薦委員(池田) | |
| ハラスメント防止委員会 | 学生部長[指] 小淵[指] | 学科学科長, 重田[指], 山田[指], 事務長, 事務推薦委員(池田) | |
| 図書館運営委員会 | 図書館長 | 学科学科長, 重田[指], 山田[指], 事務長, 事務推薦委員(池田) | |
| 衛生委員会 | 黒田 [指] 太田 [指] | 学科学科長, 重田[指], 山田[指], 事務長, 事務推薦委員(池田) | |

2024年度 各種委員会ワーキンググループ一覽

| ワーキンググループ(WG) | 責任者 | 構成員 |
|--|--|--|
| 入試実行・広報活動推進委員会 入試実施WG 広報活動推進WG <small>(オープンキャンパス・公開講座・ホームペー)</small> | 副学長 阿部[指] | 副学長補佐、教務部長、学生部長、各学科学科長、事務長、アドミッション・オフィサー、事務室職員(池田・大戸) 各学科担当者、事務室職員 各学科担当者(オープンキャンパス):NS福武, CW岸本, 事務室職員(池上) (公開講座):NS伊藤, CW岸本, 事務室職員(小池) (ホームペーシ):NS山本, CW岸本, 事務室職員(松若) CW時弘, 見尾[指], 事務室職員(小池) |
| 広報誌等作成WG 教務委員会 学修支援WG 学習管理システムWG カリキュラム検討WG 学内情報ネットワーク管理運用WG | 熊野 [指] 教務部副部長 [指] 重田 [指] 教務部長 [指] 重田 [指] | 学科推薦 (NS林・沖田・見尾, CW居村) 学科推薦 (NS熊野・沖田・河畑, CW居村), 事務推薦職員(松若) 学科推薦 (NS見尾, NS重田, CW山田), 事務推薦職員(松若) 学科推薦 (NS熊野) |
| 学生生活支援委員会 障害学生支援WG 就職支援WG 健康管理WG 衛生委員会 地球温暖化対策WG | 学生部長[指] 見尾 [指] 養護職員 [指] 太田 [指] (衛生委員会副委員長兼務) | 学科選出 (NS福武, CW常国), 学生部副部長, 養護職員[指], 事務長, 事務選出職員(池田) 学科推薦 (NS小淵, CW熊谷), 学生部副部長, 事務推薦職員(池田) 学科推薦 (NS掛屋, CW常国), 学生部副部長, 事務推薦職員(足立), (必要時校医・衛生管理者) 黒田[指], 衛生委員会学科推薦委員 (NS糸島, CW時弘), 事務長, 図書館職員(高畑) |

任期: 2023年4月1日から2025年3月31日まで

2024年度 ハラスメント相談室、IR室一覽

| 室 | 室長 | 室員 |
|-----------|------------------------------|--|
| ハラスメント相談室 | 相談室長(ハラスメント防止委員会副委員長兼務)小淵[指] | 学科推薦委員 (NS山本, CW横田), 事務推薦職員(足立), 養護職員[指] 任期: 2023年4月1日から2025年3月31日まで |
| IR 室 | 室長: 副学長 | 黒田[指], 榎本[指], 熊野[指], 重田[指], 池田[指], 大戸[指] |

IV. 点検・評価

1. 大学の基本方針

【現状】

昭和 48（1973）年に倉敷市松島で開学した本学は、令和 4（2022）年に岡山市北区中山下に校舎棟を新築移転し、現在は川崎医科大学総合医療センター、同高齢者医療センターと共に川崎学園岡山キャンパスを構成している。開学当初は第一看護科、第二看護科、臨床検査科の 3 学科であったが、その後時代の要請に合わせて 10 学科 1 通信教育部を設置し、多岐に亘る医療福祉専門職を育成してきた。平成 3（1991）年に川崎医療福祉大学が開学したことを機に一部の学科が改組移行を行い、現在は看護学科、医療介護福祉学科の 2 学科で医療福祉人の養成を行っている。「人間（ひと）をつくる 体をつくる 医療福祉学をきわめる」という大学の理念のもとに、開学より一貫して社会に貢献できる専門的な医療福祉人を育成することを教育理念とし、目的及び教育目標を定め、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに基づいて、教育研究活動を実践している。

これら大学の理念を始めとする各種方針は、新入生に対して必修科目である「保健医療福祉概論」での講義や入学時合同研修での紹介のほか、上級生に対しても継灯式（看護学科）や実習開始式（医療介護福祉学科）など機会あるごとに説明し、意識付けを行った。また、大学ホームページやキャンパスガイド等を用いて、広く社会へも周知している。

本学は、自己点検・評価活動の一環として、学校教育法に基づき一般財団法人大学・短期大学基準協会による認証評価を受審しているが、平成 18（2006）年度、平成 25（2013）年度、令和 2（2020）年度のいずれも適格の認定を受けている。次回令和 9（2027）年度の第 4 期認証評価受審に向けて、近年は学修成果の可視化を進め、学修成果の評価方針（アセスメント・ポリシー）により学修成果の点検等を実施している。さらに現在では内部質保証の充実を図るべく、可視化したデータを活用して、例えば、入試区分別の募集人員の変更、教育課程編成の改善、成績評価の平準化など全学的な教育体制の改善につなげる取組を進めている。

本年度は、昨年度の医療介護福祉学科に続き、看護学科で新カリキュラムの完成年度を迎えた。旧課程から新課程へのスムーズな実施に努めるとともに、教育内容の重複や齟齬、進度の見直し等カリキュラム編成の点検を開始している。医療介護福祉学科は病院実習の充実を図り、医療的ケアができる介護福祉士の養成に努めている。

岡山キャンパスへの校舎移転し 3 年目を迎えたが、引き続き学生満足度調査などから学生の意見を取り入れつつ、教室やラウンジのカフェの利用などについて課題解決に向けた整備を進めてきている。学友会活動が低迷しているが、ボランティア活動の充実など地域社会との連携を強める活動を支援している。また、岡山キャンパスの 3 施設が協力して、七夕健康まつりを開催した。地域に開かれた短期大学として、本学の強みを活かした社会連携活動を実践するとともに、将来の医療福祉を担う児童生徒に看護、介護の魅力を伝える取組を行っている。

近年の私立短期大学を取り巻く環境には厳しいものがあり、学生確保の課題は解決に至

っていない。広報活動に更に力を入れるとともに、抜本的な組織改革にも着手したところである。

【課題】

適正な学生確保に基づく大学の安定経営が課題である。国家試験合格率や就職率は高い数値を維持できており、教育課程の実施は適切に行われていることから、入試広報活動に更に注力する必要がある。可視化されたデータの教育の改善・向上に向けた活用については、両学科共に引き続き検討が必要である。岡山キャンパス移転における課題は、徐々に解消しつつあるが、学友会活動や部活動等学生の自主活動の低迷が継続している。また岡山キャンパス内3施設の連携強化も重要課題である。

【改善への方策】

入試広報活動の一環として実施している「放課後キャンパスツアー」は、参加者の出願や実際の入学に直接つながっており、引き続き回数の増加など充実を図りたい。なお、ツアーの中で病院見学を実施するなど、総合医療センターや高齢者医療センターとの連携も強化しているところである。教育の改善・向上に向けてデータの解析と効果的な活用については、IR室と点検評価委員会・両学科が連携を図り、成果につなげていきたい。岡山キャンパスでの学生の自主活動は引き続き学生部が中心となって支援を行い、地域連携活動が継続した活動となるよう大学全体で取り組んでいく。

2. 教育課程

(1) 教育課程の点検と改善

本学は令和4（2022）年4月から岡山キャンパス（岡山市北区中山下）に新築移転し、新キャンパスではじめての入学式をむかえた学生が、本年度ここから巣立っていった。

看護学科は令和4（2022）年度入学生から「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」の改正による新カリキュラムでの教育を開始し、本年度は新カリキュラムでの教育の完成年度を迎えた。医療介護福祉学科は令和3（2021）年度に「社会福祉士介護福祉士養成施設指定規則」の改正及び2年課程から3年課程へと移行し、完成年度の翌年となり教育課程の点検・評価を実施した。また、令和4（2022）年10月の短期大学設置基準の改正に伴う基幹教員制度の規定に対応するため、本年度から全ての主要授業科目に基幹教員を配置し、教育のさらなる充実に努めた。

1) 教育課程の点検

【現状】

本年度も全学年を対象に学修成果の達成状況等の調査を実施した。卒業予定の3年次生を対象にした学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を構成する5つの方針別の結果では、5項目全て95%以上の学生が「達成したと思う」「おおむね達成したと思う」と答え、本学の学位授与の方針に基づいた教育効果が上がっている（資料2-1a）。特に97%以上の高い評価割合を示した項目は、「修得した知識・技能により、新たな課題を発見し解決できる力がついた」「他者の在り方を尊重し、支援、連携、協働できる力がついた」「誠実で礼儀正しく、社会の規範を遵守できる倫理観が育まれた」の3項目であった。

学年別にみた各学科のカリキュラム及び教育体制・支援に関する調査では、2学科とも学年が上がるにつれ教育体制やカリキュラムへの満足度は増していた。教育課程に関する質問の一つとして、各科目の順序性や開講時期の構成に関する質問は、1年次生にはその判断が難しかったようで肯定的評価の割合は少なかった。しかし、2年次生は86～88%、3年次生は89～92%が理解しやすい構成であったと回答しており、カリキュラム運用における否定的評価はほとんど認められなかった（資料2-1d）。

本年度は、医療介護福祉学科がPDCAサイクルにおけるCheck段階の検証年度に該当し、教員によるカリキュラム評価を行った。ディプロマ・ポリシーと科目の整合性や科目間の関連性の観点から検証したところ、教員側からも授業科目の順序性は適正と評価したものの、専門分野における科目間の連動性と学習時期が課題となった。より学修効果を高めるために、一部（3科目）の必修科目の開講時期を変更する改善案が提示された（詳細は学科別の頁で後述）。また、医療介護福祉学科では、昨年度の課題としてあげられていた数理・データサイエンスに関する基礎力の養成のため、基礎分野に「統計学」を必修科目として加えた。この科目は履修者全員が単位を修得することができた。

カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、ナンバリングを用いた教育課程の編成は各学科と教務委員会及び点検評価委員会で検証した。看護学科はカリキュラムの完成年度途中であり現時点での早急な変更は提案されなかったが、完成年度終了後である令和7（2025）年度中に教育課程の点検・評価を実施していく。医療介護福祉学科は、前述の開講時期の適

性化と「介護実習 I-1」について実習効果をより高めるため、実習期間の変更を計画した（詳細は学科別の頁で後述）。

学修成果を測る一つの指標である授業科目別 GPA (Grade Point Class Average) を用いて授業科目間の成績評価基準の平準化に向け、各科目の GP 分布に偏りが無い点検した。GPA が低かった看護学科専門分野の GPA が 2.13 に上昇し、成績評価の平準化が徐々に進んでいる。しかし、分野間及び学科間の GPA の差は依然存在する（資料 2-2）。

【課題】

両学科共に新カリキュラムの完成年度を終了し、点検・評価が大きな課題である。特に看護学科では新たに統合科目を新設したため、他の教科目との接合性の是非も含め点検していく。本学では学生参画の教育活動を実施しているため、点検・評価においても学生の意見や調査結果を生かし教育の向上を目指すことも課題の一つと考える。また、本学の GPA (特に看護学科) は必ずしも高いとはいえない。就職・進学等の選抜で GPA が採用される機会が増えてきている。他学との角逐を視野に入れる必要がある。

【改善への方策】

本年度看護学科は、新カリキュラム完成年度であった。次年度は教育課程の点検・評価を詳密に実施していく。医療介護福祉学科においても開講時期や実習期間の変更に伴い点検・評価を継続する。これには学生参画の FD・SD 活動も活用し、双方向的な視点も大切にしていく。授業科目間の成績評価基準の平準化についても引き続き課題として取り組んでいく。とくに非常勤講師担当科目については、基幹教員が中心となって教育内容や評価方法について調整を進めていく。あわせて GPA 制度の基盤となる GP (Grade Point) の適性を図り、就職・進学等における競争力を高めていく。

2) 教育方法の改善

【現状】

教育方法の工夫として、授業科目の 9 割以上が継続してアクティブラーニングを取り入れられている。学生による授業評価結果は、昨年度と同様に 5 段階評価で平均が 4.5 と高かった（資料 2-3）。例年、授業評価結果が高くなる質問項目が多いことを受け、FD・SD 委員会を中心に授業評価項目と内容の妥当性を継続して検討した。「学生による授業評価」の項目は、授業評価項目の設問の表現や一部内容を修正し、次年度からの運用を決定した。学生参画の FD・SD 委員会の意見から、自主学習を進めるために、小テストなどの導入に伴う事前学習の推進や学修しやすい授業資料の形態を教員に周知して改善が図られた。

本学では、ICT 教育の一貫として WebClass を活用した e ラーニング教育の充実を図っているが、学生満足度は低い傾向にあった。学生へのシラバス活用の推進については、授業開始時に学生にアクセスさせ、内容を教員と共に確認する機会を設けるなど工夫しているが、変わらず学生の利用率は低い傾向にあった（資料 2-1 d）。

【課題】

令和 7 (2025) 年度も両学科共に、学生が主体的に学修していけるよう継続できる工夫が必要である。また、授業評価結果が高い質問項目が多いため、授業方法の改善に生かせる新たな内容を検討していく。看護学科は電子テキストが導入されることから、その評価も必要となる。WebClass の活用に伴い生じている学生への授業資料提供方法等の問題に関しては、

授業資料掲載のルールの徹底を教員に周知する必要がある。また、シラバスの活用についても継続して取り組む。

【改善への方策】

学生は授業を構成する一方の当事者であり、授業改善に学生の意見を求める意義は大きい。学生アンケートで全体的な傾向や問題状況を把握しつつ、学生参画のFD・SD活動を通じて具体的な意見を直接聴いて改善に生かしていく。シラバスの活用方法の検討や授業資料の改善、学修に効果的な事前学習・課題内容の検討を行う。授業資料に関しては、全教員に学生が困難としている具体的な状況を伝える。学生による授業評価の項目を時宜に応じて改善し、電子テキスト導入に関しても調査していく。

3) 学修に関する支援体制

【現状】

本学では入学前学習、キャンパスカミングデイ、新入生オリエンテーションなどの入学前や入学時の指導に加えて、社会人基礎力の養成、個別指導の強化、教材のWeb化などに全学を上げて取り組んでいる。さらに各学科においては、基礎学力支援、成績不振者への指導、国家試験対策等の各種学修支援を行っている。

特に全学的な取組については、令和3（2021）年度から開始した本学、医療福祉大学、リハビリテーション学院との3施設合同入学前教育プログラム（Kラーニング）を実施している。加えて本学では令和6（2024）年度入学生から早期の入試区分である専願入試合格者を対象に、入学前学習の計画と実施状況を在籍高等学校の教員にチェックしてもらう「入学前学習チェックシート」を導入した。対象者全員から「入学前学習チェックシート」の提出があり早期入試合格者の学習の継続や学習意欲の維持が確認できた。また本学独自の入学前学習（Dラーニング）として漢字ドリルや新聞コラム要約ノート、各学科の課題を入学予定者に課している。学科別課題のひとつである教科別ポイント（学習の視点）は、高等学校学習指導要領と齟齬がないよう本年度も高大連携協力校である総社高等学校に確認を依頼し、提示する課題図書に関しても意見をいただき、改善して実施した。

本年度のキャンパスカミングデイでは、入学前学習やキャンパスカミングデイの目的をしっかりと説明し、3年間の教育を俯瞰した入学前学習の必要性を伝えた。入学前支援と位置付けているキャンパスカミングデイは、制服採寸日と日程をあわせることで1回目98.4%、2回目89.5%（専願参加率98.4%）と過去最高の参加率となった。入学前学習の進め方（1回目）や入学前学習を補完する強化授業（2回目）を実施し、自宅での自己学習を補強した。強化授業は実施後のアンケート調査でも、[役に立った]86.1%、[少し役に立った]13.9%をあわせると参加者全員が役に立ったと答えていた。昨年度からキャンパスカミングデイに在籍学生をサポートとして起用し、参加者から寄せられた質問に答えたり、自らの体験を伝えたりしている。参加者から好評を博し、今後も継続していく。一方、令和6（2024）年度入学生を対象にした1年次終了時における教育体制・支援に関する調査では、入学前学習資料集は[とても役立った][おおむね役立った]が48.2%と低かった（資料2-1e）。

初年次基礎科目の学習レベルについては「自然科学入門・化学・生物」は35%の学生が[レベルが高い][レベルがやや高い]と感じている。これらの科目では学生の理解度の差が大きく、看護学科の「自然科学入門」では、授業内の演習において指導教員を増員して3

人体制で指導に当たった。あわせて WebClass 上にドリル的な問題を掲載し、学生の自己学習を促す環境を提供した。この科目の GPCA は 3.05 と過去最高値となり、基礎分野の平均である 3.07 をわずかに下回ったものの全員が単位を修得できた。この科目は、本来、高等学校で理数系科目の修得が十分とはいえない学生に選択させたい意向に沿ったもので、その点においては指導が功を奏したかたちとなった。履修登録の段階で「数学」「化学」「物理」という教科内容に反応し、苦手だからという理由で履修を回避した学生が散見された。

本学は社会人基礎力も含め初年次教育として、幅広い知識や多角的な考えを学ぶ基礎的態度を養うことに注力しており、本年度は、入学者選抜から始まり、入学前学習そして初年次教育へと続く 2 学科共通の総合教育プログラムを整備することができた。これらの教育は、正課だけでなく正課外においても実践した。全体を①医療福祉基礎教育プログラム、②リベラルアーツ教育プログラム、③数理・データサイエンス教育プログラムとして配置し、正課外の講座はリベラルアーツ教育を中心に教務部と学生部共同で指導体制を敷き、10 講座設けた。1 年次生を対象にした各種講座の理解度は高く、ほとんどの講座について 9 割前後の学生が「理解できた」「おおむね理解できた」と答えた。本学が初年次教育で力を入れている「健やかな心と体をもつ」「多様な人々を理解し共感する心を育む」「医療福祉人としての高い倫理観と責任感をもつ」という教育目標の基礎づくりについては、1 年次終了時では 3 項目全てで 9 割以上の学生が身についたと答えていた（資料 2-1 f）。

3 年次生対象の社会人基礎力に関する 12 項目の調査では、「一般的な教養」「分析力や問題解決能力」「他の人と協働して物事を行う能力」「人間関係を構築する能力」「コミュニケーションの能力」「時間を効果的に利用する力」の 6 項目で 95%以上の学生が入学時より「大きく増えた」「増えた」と答えた。「グローバルな問題の理解」「コンピューターの操作能力」については「大きく増えた」「増えた」と答えた学生は昨年度 60~70%であったが本年度は 80%を超えた（資料 2-1 g）。

国家試験に対する学修支援として看護学科では本年度より、正課内に「総合看護演習」を新規開講した。あわせて WebClass を活用した補講も実施している。また成績不振者に対しては、少人数での強化授業を行うことで学力の底上げに努めている。あわせてチューター制を導入し、学習計画から模擬試験の振り返り、心理面でのサポートも継続している。医療介護福祉学科では、国家試験対策支援の必要な学生には、マンツーマンでの指導で対応している。卒業予定者に対する教育体制への満足度において、「専門職の知識・技術・倫理観の学修に関する教育体制」「学外実習（臨床・臨地実習など）の教育体制」に対して「とても満足している」「おおむね満足している」と答えた学生が 95%を超え、専門職教育については高い評価を得ることができた（資料 2-1 h）。

本年度から教育支援に活用するため、学習意欲の向上、または阻害要因を調査した（資料 2-1 i）。学生の意欲向上の要因は、「成績の向上」と「仲間との協同」の 2 つに集約された。それ以外では「資格取得」の要因が大きかった。「魅力的な講義」は選択肢の中では最も低い要因となり、「魅力的な」の捉え方に差異が生じたことも考えられる。教員としては判断に迷う結果となった。学習阻害要因では、大きな要因として「SNS などのスマートフォン」があがった。「遊びや趣味」「アルバイト」等と比べ、多くの学生が学習の妨げとなることを自覚していた。現代の学生にとって「SNS などのスマートフォン」の誘惑に打ち勝つ自制心を育むことが急務であると感じた。

【課題】

本学は入試合格者に対して入学前から学習支援として、入学前学習・キャンパスカミングデイを行っている。1年次終了時にこれらの役立ち度を振り返ってみると、入学前学習資料集は約5割、キャンパスカミングデイは約6割の学生が役立ったと感じていた。入学前学習は入試区分によって学習期間や内容に差があるため、入試区分別の調査を行うなどして、役立ち度について精度を上げた検証をしたい。「自然科学入門」に関しては、高等学校で理数系科目の修得が十分とはいえない学生に選択させるなど、履修登録の時点で指導が必要である。本年度から整備した総合教育プログラムである初年次教育は、10講座もの正課外講座を実施し、幅広い素養に関わる分野の理解が深まった。一方で、過密なカリキュラムの中での講座となったため、リベラルアーツ教育プログラムの有効性や内容の過不足を再点検し、学生の負担を軽減していくことが次年度の課題のひとつとなる。

令和7(2025)年度入学生から入試枠を変更させた。従来、調査書や面接(口頭試問含む)等のみで学力の3要素を多面的・総合的に判断していた入試枠は「有資格」と「指定校」だけであったが、本年度は「大学体験型」枠が新設され、多くの受験者がこの入試枠を選択した。その結果、次年度は基礎学力確認テストや学力テストを受けていない入学生が、半数以上を占めることとなった。この入試枠で入学する学生の入学後の学修成果を注視し、適切な支援を行うことが課題となる。

また、学生の学習意欲を妨げる要因を排除し、学習意欲を育むことが支援の側面として重要であると認識できた。

【改善への方策】

入試区分(あるいは入試枠)別に入学前学習の効果やキャンパスカミングデイの有効性を分析し、対象者にあわせた支援を実施する。特に看護学科における「自然科学入門」の履修指導に当たっては、対象者の既存の知識を評価する事前テストを実施し、高等学校での理数系科目の修得が十分とはいえない学生に選択を強く勧めていく。リベラルアーツ教育プログラムにおける正課外各種講座の内容や過不足を点検・評価し改善に努める。

また、学生の意欲を高める要素である「成績の向上」と「仲間との協同」を目指しFD活動をすすめていく。「資格支援」も学習意欲向上の重要な要素となる。資格取得に向けても支援していく。

(2) 各学科の教育効果の推進に向けての取組と学修成果

看護学科

1) 教育方法の改善

【現状】

①指定規則改正3年目のカリキュラム運用

令和6(2024)年度は、3年次科目が新カリキュラムの適用になり、新規科目として「総合看護演習」「看護研究」「看護倫理学」「災害看護学」を開講した。「総合看護演習」は、従来補講で実施していた看護師国家試験対策の内容を更に精選し、2単位(60時間)の必修科目とした。学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)に掲げる「看護師国家試験に合格しうる能力の修得」を目的とし、知識獲得状況を試験で段階的に評価した。基準に達しない学生には個別指導を行い、「総合看護演習」の履修者全員が単位を修得した。また、従来選択

科目であった「看護研究」を必修化し、研究の基礎的知識と方法論を学び、グループで研究課題に取り組む演習を実施した。

新カリキュラムの完成年度を迎え、令和7（2025）年度に教育の点検・評価を行う。本年度は、新カリキュラムの適用を初めて受けた3年次生を対象に、卒業前に授業・カリキュラムに関する意見聴取やアンケート調査を実施した。さらに、教員による学科内カリキュラム会議を開催し、カリキュラム運用の課題改善に向け検討を開始した。

②教育のIT化に向けた準備

看護基礎教育におけるICT活用を推進するため、次年度の新入生から教科書を主として電子テキストに変更することを決定した。本年度は準備期間として、入学予定者対象のキャンパスカミングデイ時に入学前説明を実施した。教員用タブレット端末などのデジタル環境の整備、電子テキストの選定、専任教員対象のデジタル教材活用研修会も開催した。

③基礎学力向上に向けての取組

大学での学修に必要な基礎学力の強化を目的に、正課外の時間を活用して学生が不得意とする内容を厳選し、低学年を対象に基礎学力支援を実施した。特に1年次生には、看護における基礎計算力、「人体の構造」の知識・理解度の確認後に試験を実施し、全体解説講座も行った。加えて、成績不振者には担任・アドバイザー教員による個別指導を徹底し、大学での学修に必要なレベルへ導いた。

【課題】

次年度に新カリキュラム点検・評価を控えており、学生・教員の意見や調査結果をふまえ、カリキュラム運用の適切性や教育成果・効果について、科目レベルから教育課程レベルまで総合的に検証する必要がある。また、次年度導入する電子テキストの効果的活用に向け、学生支援及び授業展開の工夫が各教員に求められる。

【改善への方策】

策定したカリキュラムツリー、カリキュラムマップに基づき、PDCAサイクルを活用して教育課程の点検・評価を行う。「学生による授業評価」を活用して授業の効果を検証し、新カリキュラムに関する調査結果を集計・分析する。科目レベルでは、看護師国家試験の出題基準や厚生労働省の看護師教育の技術項目と卒業時の到達度の基準を満たしているかを、目標達成度や成績（GPA）、単位修得状況をもとに評価する。科目間では開講時期、授業内容の重複や不足、授業時間数、時間割の過密さなどの問題を明らかにし、カリキュラムの見直しと調整を行う。

また、次年度入学生への電子テキスト導入を円滑に進めるため、スケジュールを作成し段階的に実施する。各教員の教育ITスキル向上を図るため、研修会を計画し研鑽を積む。

2) 学外実習への取組

【現状】

新型コロナウイルス感染症の5類移行後、実習施設の受入れ体制は、他校との重複を避けながらも通常の実習形態に戻った。感染予防策として、人数制限やマスク着用は継続した。

本年度より、老年看護学及び地域・在宅看護論領域において、隣接する高齢者医療センターでの実習を開始した。3年次生の領域別実習ではカリキュラム改正に伴い、大幅な変更を行ったのは、2領域であった。まず、老年看護学実習の単位数減少に伴い3週間の実習へと

短縮した。施設実習を1週間短くし、受持ち実習から項目実習に変更した結果、ケア技術の経験が増し、実践力向上につながった。看護の統合と実践実習は、実習時期を後半に集中させた。看護師長・リーダーナース・臨床指導者による直接指導の機会を増やし看護マネジメント実習を追加した。学生は、就職後に直面する看護業務の多重課題への対処やチーム連携の理解が深まり、充実した学びを得ることができた。また、従来の過密スケジュールが学生のストレス増加や疲労蓄積の要因となっていたが、夏休み以外の4月～9月に実習を行わない期間（1週間×2回）を設定することで改善を図った。実習グループによって該当時期は異なるものの、この期間を領域実習の予習・復習、国家試験対策の学習時間として活用し、次の実習に余裕をもって臨むことが可能になった。

基礎看護学実習Ⅰは、例年より2か月早い11月に実施したが、関係部署の協力のもと問題なく実施できた。基礎看護学実習Ⅱは、昨年度同様に実習期間の制限があったため、学内で個人・グループワークを充実させ、学生は看護の振り返りや他者の経験共有を通じて、知見を広げる機会を得ることができた。

【課題】

本学科の学生数が年々減少傾向にあり、従来と同じ実習部署での実施では、1グループあたりの学生数が減少することになる。学生個々への指導が手厚くなるメリットはあるものの、グループダイナミクスの維持が課題となる。また、2週間領域と3週間領域の実習科目において、実習グループの編成数や人数構成の統一が困難であり、全領域で効果的な学習を継続するための調整が求められる。

基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱでは、他校との関係で実習期間や担当部署が毎年一定しないため、臨床側と他校との調整が必要となる。

【改善への方策】

実習期間や実習部署の重複については臨地実習調整会議で他校との調整を図る。領域実習において、現行の20グループから15グループへ削減する、あるいは実習部署を減らすなど、学生数減少に対応した実習ローテーションのシミュレーションを行う。グループ編成や実習部署の選定について、具体的な調整を進め、最適な解決策を検討する。

3) 学修成果

【現状】

①令和6（2024）年度卒業生（50期生）の学修成果

（ア）学修成果及び学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の達成度調査とディプロマ・サプリメント

学修成果の達成状況等調査により学生による自己評価を実施した。学修成果5項目、ディプロマ・ポリシー6項目、全て9割以上の学生が〔身につけることができた〕あるいは〔達成できた〕と肯定的評価であった（資料2-1b）。「看護師に求められる看護実践能力と卒業時の到達目標」73項目の達成度を、項目別に〔80%以上できる〕～〔60%未満（できない）〕の4段階で自己評価した結果、〔80%以上できる〕と評価した項目数は、昨年度とほぼ同数であった。コロナ禍（令和3（2021）年度）との比較では、令和3（2021）年度の学生は、80%以上できると回答した割合は少なく、自信度が低い学生が多かったが、本年度は自信をもち「できる」と回答した項目が58項目あり、臨地実習での経験値が看護実践の自信

につながっていた。

本学科では、卒業時における学修成果の到達度をディプロマ・サプリメントとして発行している。これまで、3年間の学びの総括的評価として、8領域の臨地実習評価結果をもとにデータ集計してきた。本年度より、学修成果のコンピテンシー（能力）4項目の一つ「看護を探究する力」を測るツールに「看護研究」の成績を加え、より客観性を増す到達度評価とした。学修成果の4段階評価（目標を十分達成し、きわめて優秀な成績；A～目標達成が不十分；D）を昨年度と比較すると、4項目とも目標到達度の高い者の割合が本年度の方が多かった。自己評価で各能力の獲得に自信をもつ学生が増加しただけでなく、他者評価でも修得度の向上が示唆された。

（イ）看護師国家試験合格状況と卒業状況・進路

新カリキュラムの学生（50期生）が看護師国家試験を受験した。旧カリキュラムの学生（46～49期生）にも「総合看護演習」聴講生として試験対策を支援した。国家試験担当教員や学年担任に加え、グループ・個別指導を行うチューター教員との連携を強化し、指導体制を充実させた。第114回看護師国家試験の全国合格率は90.1%で、新卒95.9%、既卒44.9%であった。本学科の新卒合格率は97.4%、既卒は90.0%といずれも全国平均を大きく上回った（資料2-4）。なお、新卒不合格は3人のみであったが、在学期間が4年以上かかった留年生割合が高い。不合格者の多くが留年生という傾向は数年続いている。卒業生の進路状況は就職率100%で、進学者はいなかった（資料4-1）。

②在学生の学修支援、GP分布

低学年には、前述した基礎学力支援に加え、看護師国家試験の低学年模試や、国家試験問題を授業に組み込むことで早期から学習への意識付けを行った。

本学科では留年率の高さが課題であり、担任やアドバイザーによる個別面談を実施し、学生の学習意欲や悩み、学習方法の課題を把握したうえで、適切な指導・助言を行った。令和6（2024）年度卒業生（50期生）の留年率（休学者含む）は7.9%で、昨年度（49期生）の11.7%から低減、退学率も昨年度（49期生）21.7%から14.0%と大幅に低減した。

学修支援の体制として、科目担当者によるオフィス・アワーを活用した補習的学習も実施したが、この取組について学生への認知度は十分浸透していない。一方で、WebClassやeポートフォリオなどのWebツールを活用した質問対応が徐々に増えてきている。専門科目における成績低迷の改善を目的に、授業内容の工夫や評価方法の見直しを行った。また、過去3年間の専門基礎分野、専門分野のGPCA平均得点は、専門基礎分野は過去3年間で2番目に高い2.52点で、専門分野は本年度が最も高い2.13点であった（資料2-2）。一方、令和6（2024）年度の専門基礎分野、専門分野における科目別GPCA分布をみると、2分野合わせてGPCA3.0以上の科目は13科目（16%）、2.0～3.0未満36科目（45%）、2.0未満31科目（39%）であった。専門分野のGPCA平均得点が以前に比べると上昇傾向にあっても、各科目の分布では、4割弱の科目が2.0未満であった。GPCA2.0未満の科目の内訳をみると、専門基礎分野の該当科目は8科目あり、病態治療学系が半分を占めていた。残り23科目は専門分野で、基礎看護技術及び8領域全ての看護学各論であった。その中でも特にGPCAが1.5未満は4科目あり、成人看護学3科目、小児看護学1科目であった。2分野とも1.5未満の科目のGPCA分布の特徴は、「不可」と「可」の成績、すなわちGP得点が0点と1点の割合が、履修生全体の50%を超えていた。

【課題】

看護師国家試験合格は、本学科の最終目標であり、本年度も高い合格率を維持できた。総合看護演習の新設が、学習意欲や学習力向上に寄与したと考えられるが、これまでの学修の積み重ねと手厚い指導・支援が好結果につながった。しかし、国家試験合格率 100%には達しておらず、少数ではあるが不合格者の多くが留年生という傾向が続いていることは、本学科の教育上の課題である。また、留年率・退学率が昨年度より低減したものの、3年次の領域実習の履修要件を満たせず卒業延期となる学生が複数存在している。入学前の学習支援や低学年からの基礎学力向上対策、国家試験対策などの取組を行っているが、入学生の学力低下が懸念される現状では、2年次履修の専門科目においてますます学習理解の低下が予測される。こうした課題に対応するため、学習面に課題を抱える学生への支援に加え、国家試験を視野に入れた低学年からの学習習慣の定着や学習強化が必要となる。また、留年者が出る要因の一つとして、以前より本学科の成績評価の厳しさが指摘されている。各学生の GPA は成績と連動しており学習状況を数値的に把握できるため、学内においては学習理解度の把握、履修指導、奨学金貸与の基準、ディプロマ・サプリメント等に活用している。GPA は、就職試験時の施設側の判断材料にもなる。GPCA 得点の低い科目は「可」の評価割合が大きい科目であり、評価方法・評価基準・評価内容が適切かどうか見直していく必要がある。

【改善への方策】

学習面に課題をもつ学生への支援として、担任とアドバイザーが連携し、個々の学習状況を把握したうえで適切な指導を実施する。学生の主体的な学習意欲を促すため、Web を活用した質問受付やオフィス・アワーの周知を強化し、科目担当者による補習的な授業外学習の支援を拡充する。精神面や適性への悩みを抱える学生には、看護に対する意欲の確認や適切な進路変更の支援を行う。

さらに、GPCA など成績分布、成績評価の方法・内容、評価基準の見直しを学科全体の課題として扱い、各科目担当者単独でなく全学的に議論し、実習履修要件を含めた学修達成度の評価の適正化、ならびに成績評価の平準化を進める。単に学習難易度を下げ成績評価を甘くしたのでは、真に学力がついたとは言い難い。臨地実習の履修要件を含め、学習到達状況の把握のために何をどこまで評価すべきかを明らかにする。知識重視型の成績評価が多い傾向にあるため、定期試験以外の学習到達度を測定する指標や評価方法を再考し、成績評価の適正化に努めていく。

医療介護福祉学科

1) 教育方法の改善

【現状】

3年次の医療系分野（医療福祉系科目群、実習科目群、マネジメント系科目群）を加えたカリキュラムに沿って実施した。

3年制完成年度を終えて PDCA サイクルを展開し、3年制教育の評価を行なった。そこで、認知症の科目「認知症の理解Ⅰ」「認知症の理解Ⅱ」「認知症のある人への生活支援・連携」3科目の連動性を意識したカリキュラム改正が必要であることが明らかとなった。

初年度の病院実習において導入から見えてきた喀痰吸引等実地研修課題を解決するため、令和7（2025）年3月に病院実習指導者連絡会を開催した。喀痰吸引等実地研修の実施にあ

たっては、看護学科教員との連携のもとに実施できた。

WebClass の活用により、授業資料をオンラインでアップする形態も定着して、授業資料をパソコン内にデータとして保存して授業を受ける学生が増えてきた。

【課題】

3年次の医療系分野では、5週間の病院実習を実施した。初年度の実習では、担当患者の選定方法や喀痰吸引等実地研修の対象患者の退院などの対応に追われることもあった。しかし、本年度は病棟と連携を取りながら研修を終了できた。昨年度の実習指導者連絡会において、指導者より喀痰吸引等実地研修指導看護師、実習指導の介護福祉士に分かれて意見交換の場を持ちたいとの要望が挙げられた。本年度は、実習指導者連絡会の内容を検討して、喀痰吸引等実地研修指導看護師、実習指導の介護福祉士に分かれた話し合いを実施した。各病院の介護福祉士の実習は、本学科学生の受入れのみであり、他の病院がどのように実習受入れ体制を整え、実施しているか意見交換をしたいと要望があった。

認知症関連の3科目について、科目の履修期間が空くことによって学習の継続性が損なわれている。そこで、空白期間がなくなるよう履修計画の見直しにより、3年間で段階的に学べるよう、1年次～3年次に連続的に科目を配置する連動性を意識したカリキュラム改正を行い、今後その効果を検証していく。

【改善への方策】

令和7（2025）年度の実習に向けて、実習指導者連絡会を開催した。川崎学園内3病院を含む9病院から19人の参加があった。昨年度の実習指導者連絡会後の要望を反映して、介護福祉士実習指導者と喀痰吸引等実地研修指導看護師に分かれて意見交換をした。介護福祉士実習指導者からは、学生にどこまで介護技術を実施するか、レクリエーションの実施について、喀痰吸引等実地研修指導看護師からは、学生の実地研修の評価について意見交換がされた。他病院の取組について知ることができる機会となり、次年度の実習に向け、各病院の実習指導方法など参考になったとの意見が多くあがった。今後も各病院看護部と連携を取りながら、実習内容の充実を図る。

令和7（2025）年度より「認知症の理解Ⅰ」を1年後期から2年前期、「認知症の理解Ⅱ」を2年前期から2年後期に変更した新カリキュラムに沿って、時間割を作成、科目を開講する。

2) 学外実習への取組

【現状】

本学科では、1年次に介護実習Ⅰ-1、介護実習Ⅰ-2、2年次に介護実習Ⅰ-3、介護実習Ⅱ、3年次に病院実習、地域介護実践実習を開講している。これらの実習を通して、ディプロマ・ポリシーに掲げた能力の修得を目指している。

昨年度より、1年次の介護実習Ⅰ-1の実習日数を10日間から12日間に変更した。そのため実習期間は週2日、6週間としたが週当たりの実習日数が2日間と少なく、学生の緊張が解けた頃に、その週の実習が終了してしまう状況が繰り返され、想定していた実習効果が上がっていない状況である。

3年次の実習として、病院実習と地域介護実践実習を導入している。3年間を通して在宅生活、施設、病院で実習を行うことになり、地域包括ケアシステムにおける介護福祉士の役

割について総合的に学ぶことができた。

【課題】

昨年度より、介護実習 I-1 の実習日数を週 2 日、6 週間として実習日数を増加したが、効果的な実習ができていない現状がある。より効果的に実習目的を達成するためには、週の実習日数、週数の検討が必要であり、次年度より実習日程について検討する。それに伴う時間割の検討、実習受け入れ先との調整ができるよう、次年度の実習指導者連絡会にて調整を行う必要がある。

介護実習 I-3 の実習については、対象者が要介護 3 以上の重度化した対象へと変わる。学生は、コミュニケーションの取り方など工夫が必要となり、実習目的の達成までに時間を要している。1 年次から 2 年次の実習のつながり、対象者のイメージができるよう、介護総合演習 I-3 の授業内容の検討や実習先と連携が必要である。

【改善への方策】

介護実習 I-1 の実習日数を次年度より週 3 日、4 週に変更する。次年度の介護実習指導者連絡会において、介護実習 I-1 の実習週数、週の実習日数の変更について、実習指導者へ説明する予定である。1 年次の実習の目標をより効果的に達成できるようにする。あわせて、介護実習 I-3 の実習が円滑に進むように、介護総合演習 I-3 に施設（介護老人保健施設、介護老人福祉施設）見学を取り入れ、学生が介護度の高い対象者の介護を展開するイメージができるよう実習前指導方法等を検討していく。

3) 学修成果

【現状】

学修成果及び学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）達成度調査（資料 2-1b）による自己評価では、ディプロマ・ポリシーの達成度は、構成する 4 つの方針に関して〔そう思う〕〔おおむねそう思う〕と答えた学生は、8 割を超えており例年と変わらず高い結果となった。本年度は、「生活支援が必要な人への介護実践能力を身につけることができた」や「医療介護福祉の意義を理解し、人権擁護意識と職業倫理観を身につけることができた」について、半数以上が〔そう思う〕と答えた。学修成果の 5 つの能力の獲得状況をディプロマ・サプリメントとして発行した。実習指導者連絡会においてディプロマ・サプリメントを学生に発行していることを伝え、実習先に卒業時の学生の個々の課題の把握を依頼している。

本学科は、国家資格取得を目指す学科であり、資格取得率、就職率も学修成果の検討材料である。本年度は 3 年制移行後初めての卒業生を送り出した。国家試験の合格率は 100%、全国平均 78.3% を大きく上回る結果であった（資料 2-4）。

学科の支援としては、1 年次から基礎学力支援及び模擬試験を実施した。2 年次では、医療介護福祉総合演習 I・II において、小グループでの国家試験受験対策を行っている。学生個々の学力差があり、学習方法をそれぞれの学生に合わせて選択して、苦手とする科目を克服できるよう指導している。特に、「こころとからだのしくみ」「発達と老化の理解」「障害の理解」の 3 科目に焦点を当てた対策を実施した。個々の学生がノートに人体の構造について臓器の絵を描き、しくみについて理解した上で、疾患や障害の特徴や症状、生活する上で気をつけることを調べている。その知識を生かしたアセスメントができるように対策を強化した。

【課題】

ディプロマ・ポリシーの達成度では「生活支援が必要な人への介護実践能力を身につけることができた」に「そう思わない」と7%の学生が答えており、3年次での病院などでの専門的な実習での経験が影響していると推察される。

2年次には、介護福祉士国家試験模擬試験を受験させている。介護福祉士指定科目を全て履修済みで模擬試験を受験するが、合格ラインに達していない学生が毎年数人いる。各年次で実施するプレースメントテスト（国語）の結果が低迷している学生は模擬試験結果や成績評価とも関連している傾向があり、文章読解力をあげていく必要がある。

【改善への方策】

3年次の病院実習、地域介護実践実習では、チームの一員として介護福祉士が果たすべき役割について学ぶ。しかし、学生その他職種と協働する上で必要となる知識・技術が不足していることが影響して、「生活支援が必要な人への介護実践能力を身につけることができた」に「そう思わない」と答えたと推察されるため、実習前・中・後に、個々の学生の状況に合わせた指導を継続して行う。

2年次になると国家試験対策として、学力別の教育を行っており、今後とも特に成績不振学生には個別の学習方法を指導していく。特に、3年次の「医療介護福祉総合演習Ⅲ」において、小グループで勉強の仕方を確認しながら、実力が付くような対策を進めていく。担任や各科目担当教員が早めに学習進度を的確にチェックし、その都度意識付けを行うなどの取組を全教員で実施する。

3. 学生の受け入れ

(1) 素質のある学生確保

【現状】

本学では素質ある学生の確保に向け、平成 28 (2016) 年度発足の川崎学園アドミッションセンターのもと、戦略的に入試広報活動及び学生募集を行っている。しかし、令和 6 (2024) 年度も両学科とも入学定員を充足することができなかった (資料 3-1、3-2)。この傾向は令和 4 (2022) 年度から続いている。この状況を改善するため素質ある学生の確保にむけ全教職員をあげて学生募集に努めた。看護学科では令和 5 (2023) 年度入試から指定校の拡大を図りそれ以降指定校枠での入学生が増加した。しかし本年度実施した指定校枠入学者選抜の看護学科志願者は 13 人と昨年度より減少した。一方「いってみよ！放課後キャンパスツアー」では、昨年度より更に回数を増やして実施したところ、高校 3 年生だけでみると 6 割の参加者が本学を受験した。本年度開催した学園祭時のキャンパスショーケースでは、高校生への働きかけだけでなく、将来の素質ある学生確保にむけ、小・中学生を含む若い世代に医療福祉職に関心をもってもらえる体験を実施した。

本年度のガイダンス等の実施実績は高等学校へ出向いたガイダンスが県外 16 校、県内 28 校、県内進学相談会 10 回、高校訪問は看護学科 155 校、医療介護福祉学科 163 校であった。また、両学科とも社会人が受験しやすくなるよう有資格条件に、「4 年制大学、短期大学、高等専門学校の既卒者及び 2025 年 3 月卒業見込の者」を新たに加え、提出書類と面接 (口頭試問を含む) に基づく入学者選抜を課すことで素質ある学生の確保の拡充を図った。

【課題】

本学志願者は昨年度 211 人で本年度は 186 人と減少し、両学科とも入学者数が募集人員を下回った。本学への志願者を増加させることが核心的な課題である。入学予定者も昨年度の 97 人から 84 人と減少し、近年で最小人数となっている。表には示せていないが県外からの志願者が減少したことが一因となっている (資料 3-3、3-4)。

【改善への方策】

入学者数の減少は 18 歳人口減少等の影響が小さいとはいえ、素質ある学生の確保のためにも募集人員の変更を検討していく。「いってみよ！放課後キャンパスツアー」では、丁寧に個別相談に対応し、オープンキャンパス等で病院見学ができなかった高校生も想定し、隣接する総合医療センター・高齢者医療センターの病院見学を盛り込んでいく。また、高校生に直接アプローチできる高等学校ガイダンスにおいても、今後は積極的に県外の高等学校を訪問し、特色ある本学の教育や充実した学修環境を広報していく。在校生にも長期休暇時に母校を訪問し、本学での充実した教育や大学生活について報告してもらうシステムを構築し、ピア (仲間) として素質ある学生の確保に力を貸してもらう。指定校の選定では全日制の高等学校を中心に指定校を選定してきたが、通信制コースをもつ高等学校が増加傾向にあるため、通信制への指定校選定を検討していく。

(2) 入学選抜方法

【現状】

川崎学園アドミッションセンター主導のもと、本学・医療福祉大学・リハビリテーション

学院の3施設で文部科学省の改革に沿って入学者選抜を計画し実施している。これにより「学力の3要素」を多面的・総合的に評価し、適切な入学者選抜を行っている。令和6(2024)年度も高大連携協力校である総社高等学校進路指導部と連携して、本学の入学者選抜の妥当性についてIRデータを用いて検証を行った。本学入学後の学修状況を、入試区分ごとでみた場合、3年間の教育終了時に入試区分での有意差がないことから、入学区分を意識した教育の必要性については当面必要としないという評価を得た。

令和4(2022)年度高等学校入学生から「新学習指導要領」での教育が開始されているため、令和7(2025)年度入試に向け、高等学校新教育課程に準拠した入学者選抜へと変更した。必修科目として新設された「総合的な探究の時間」の学習を利用した「探究学習利用型」での入試枠を総合型選抜内に設けた。一般選抜前期における学力テストでは、高等学校社会科の教科目構成の変更に伴い「日本史」をやめ、新たに必修科目になった「公共」を選択科目に加えた。また、医療介護福祉学科で実施していた「オープンキャンパスで所定の課題を行い、有資格認定証の交付を受けた者」を学校推薦型選抜前期「有資格」枠で受験できる選抜方法を取りやめ、「オープンキャンパスや学科独自の大学体験型イベントで所定の課題を行い、出願資格証明書を受けた者」を総合型選抜及び学校推薦型選抜前期の「大学体験型」枠で選抜する方法へと変更し実施した。この「大学体験型」は看護学科及び医療介護福祉学科の総合型選抜と学校推薦型選抜前期に取り入れ、志願者確保に努めた。また、両学科とも学科ごとの有資格出願条件に「4年制大学、短期大学、高等専門学校の既卒者及び2025年3月卒業見込の者」を新たに加え、看護や介護に関心を持つ社会人等が受験しやすい入学選抜とした。これらの変更に伴い入試区分ごとの募集定員の見直しを行い、看護学科では志願者が減少傾向である「一般選抜前期」の募集人員を減らし、「総合型選抜」における募集人員を増加させた。また、新設した入試枠に対する評価方法を検討し、公正・公平な評価を実施した。令和7(2025)年度入試結果では、専願入試区分(総合型選抜・学校推薦型選抜前期)である「大学体験型」での志願者が2学科併せて39人であったが、専願入試区分の「公募」での志願者は昨年度より減少した(資料3-3)。新たな有資格条件での志願者及び「探究学習利用型」での志願者はいなかった。

【課題】

令和7(2025)年度入試から、多彩な入試枠をもつ入学選抜を実施した。志願者のいない入試枠も生じており、それぞれの入試枠の特徴や利点についての広報が十分できていない。専願入試(総合型選抜・学校推薦型選抜前期)区分においては、「公募」以外には試験当日の筆記試験(基礎学力確認テスト)を課していない。調査書や面接(口頭試問を含む)等で学力の3要素を多面的・総合的に判断しており、今後それぞれの入学選抜の妥当性について検証が必要である。

【改善への方策】

引き続き毎月定例の川崎学園アドミッションセンター運営会議で、入学選抜方法について検討を重ねていく。また、入学後の学修成果等を調査し入学選抜の妥当性について、校内教職員だけでなく、高大連携校の外部有識者の知見も加味して検討を重ねていく。

(3) 特色ある広報活動

【現状】

川崎学園アドミッションセンター県外スタッフとの連携に向けた情報交換会では、本学の教育体制や両学科それぞれの特徴や強みについて説明し、交通アクセスを含め近隣県への広報活動の周知を図った。また、医療介護福祉学科においては独自のリーフレットを作成し、学科に特化した教育内容や病院奨学金制度についてわかりやすく掲載したものを高校ガイダンスや進路説明会で配布し多くの受験生に知ってもらうよう積極的に働きかけた。オープンキャンパスでは、教員による学科の教育内容の説明や模擬授業、ミニ体験、在学生とのフリートークに加え、在学生が各学年の特徴を踏まえ大学生活の様子を発表するなど複数のコンテンツを用意した。特に大学で学ぶ内容や学生生活の実際の様子を高校生が実感できるようプログラムの内容を工夫して実施した（資料3-5）。また、オープンキャンパスの様子が他の受験生や保護者にも届くようにインスタグラムなどの SNS を通じて、情報を発信した。3年目を迎える放課後キャンパスツアーでは、昨年度よりも実施回数を増やし、在学生の講義中の様子や技術演習の見学をしてもらうなど工夫を凝らし、より多くの受験生確保につながるようアピールした。情報発信内容を充実させるため、大学イベントの様子を幅広い年齢層に発信し、本年度はリールの投稿数を増やした。その結果、フォロワー数が昨年度より 2.5 倍に増加した。

【課題】

本学が岡山キャンパスに移転後 3 年が経過し、徐々に県内の高校に周知されてきているものの、なかなか受験者増につながっていない現状がある。そのため、受験につながるオープンキャンパスでは、マンネリ化しないよう参加された高校生やその保護者に少しでも記憶に残るようなイベントを企画し更なる工夫をしていく必要がある。また、広報媒体であるキャンパスガイドのブラッシュアップを図るとともに、必要に応じて新たなコンテンツの制作を始めホームページの充実や効果的な SNS 運用の検討が必要である。

【改善への方策】

SNS を活用して高校生やその保護者に向けての情報をタイムリーに発信し、見ている高校生が入学後イメージしやすく本学への興味が高まるよう充実させていく。また、岡山キャンパスにある 3 施設の魅力を PR するイベントを企画し、直接、教育環境や充実した実習施設を感じてもらうことでキャンパスの魅力を重点的にアピールしていく。そのためにも各施設との協力体制を整えていくことに努める。さらに、広報媒体として活用している従来のキャンパスガイドとは別に、本学の魅力が明るく楽しいイメージで受験生や高校側に伝わるようオリジナルの大学案内リーフレットを作成し広報活動を強化する。

4. 学生支援

(1) 学生生活支援体制

【現状】

本学では学生生活支援委員会を設け、安全で有意義な学生生活を送ることができるよう、全般的な学生生活の支援・調整を行っている。それに加え「障害学生支援ワーキンググループ」「就職支援ワーキンググループ」「健康管理ワーキンググループ」を設置し、大学・学科が指名した教職員を配置している。また別組織として「ハラスメント相談室」を設置している。さらに健康支援室を設置して看護師免許を有する養護職員を配置し、学生の心身の不調に対応するとともに、相談室を設け学生相談員を配置し、週1回の個別相談や長期休暇中のオンライン相談で心的不調や心配事に関する相談に応じている。それぞれの支援に特化した組織が学生の所属する学科と連携することで、きめ細やかな支援を行っている。また各学科・学年ではこれまでと同様に担任制度、アドバイザー制度を設けており、担任は学生に最も近い支援者として各方面と連携して指導・支援している。

本学の学生生活支援は入学年度の4月に入るとすぐに開始しており、本年度は4月3日の入学式を挟んで、4月1日から4月6日までの間に集中的にオリエンテーションを行った。学生の生活様式に変化が大きいこの時期に、キャンパスライフに関する説明や担任教員によるホームルーム、アドバイザー教員からの日常生活指導、上級生との交流会、部活動紹介、健康診断、履修登録、教科書販売などを行い、新入生としての生活がスムーズに滑り出すように支援した。

また、本年度から始まったリベラルアーツ教育プログラムにおいて、社会性・人間性・創造性・発信力などを身につけるために、それぞれ専門家を招いて正課外の各種講座を実施した。学生部が担当したものは「消費者被害防止」「SNSと上手につきあうために」「海外研修オリエンテーション」「大学生が巻き込まれやすいトラブル防止・交通事故防止」「社会人基礎力を高めるコミュニケーション講座」「多様性への理解」などであった。

学友会活動はコロナ禍の低迷期を徐々に脱しており、本年度は教職員の指導を得ながらであるが、学生主体の活動がやや軌道に乗ってきた。学友会が主催した行事として、スポーツ大会（5月18日）、イルミネーション（11月30日から1月25日）、クリスマス会（12月21日）などが開催され、参加学生は増加傾向である。また教員が自治体・事業所等と連携をとり、岡山県や岡山県警察、近隣の百貨店・商店会などに協力した活動も行っており、学友会執行部が役割として参加する活動は、上級生が下級生を指導しながら年間を通して参加できるようになるなど、定着してきた。しかし、学友会以外の部活動で継続して活発に活動できている団体は少ない。部活動は献血ボランティア部、被害者支援ボランティア部、軽音楽部、ダンス部、ハピネスリボン部の5団体あるが、教員の手厚いサポートを得て活動しているハピネスリボン部と献血ボランティア部は次年度も活動を継続できる見通しだが、ダンス部と被害者支援ボランティア部は令和6（2024）年度に新たな部員の獲得が困難であったため、年度末で廃部となる。軽音楽部については、十分とはいえないが何とか活動が可能であり、次年度も新入部員を募集して引き続き活動を行う見通しである。一方、ボランティア団体「おとなりボランティア」が同好会として発足し、令和7（2025）年度から隣接の高齢者医療センターの入院患者の余暇活動支援を主な活動として開始することになった。

学生の福利厚生について、本年度は飲食に関する改善を行った。本学の4階ラウンジにはランチや軽食、パン・お菓子等を提供するカフェがあり、昼休み前後には利用が可能である。その他に給湯設備・流し台・電子レンジを設置して学生の飲食を支えている。しかしカフェの営業時間が昼休み前後の短時間であることなどから、学生から営業時間延長の声があがっていた。調整を図ったが、業者都合により時間延長は困難であったため、その代替として軽食・菓子等の自動販売機を導入し、いつでも購入できるようにした。さらに学生の要望を受けて電子レンジの増設を行った。増設後から後期授業終了頃まで4階ラウンジの状況を確認し、次年度に向け昼食持参の学生の食事場所を各階に分散させることを狙って2階・3階ラウンジへ分散設置した。また今後、4階ラウンジには更に1台の電子レンジを増設する予定である。

【課題】

本学では放課後の時間が短く、学生が主体的に課外活動を行う状況が得られにくい。また3年制のため、活動の主となる2年次生が1年次生の学生をリーダーに育てる余裕がなく、活動が継続しにくい現状がある。そのため自治体などと連携するボランティアなどは教職員が調整を図っており、なかなか学生が独立した活動をすることができていない。また、学生が参加できる大学行事を催しているが、自発的に参加する学生が少ない傾向にある。

【改善への方策】

サークル活動・部活動などにおいては、初期の連絡・調整は必要に応じて教員が行うが、その後は学生に指導しながら共に行い、学生が主体となって活動できる部分を増やしていきけるように指導する。また担任教員等も活動の継続に協力し、メンバー確保の呼びかけなどがクラス・学年内でも行えるように場の提供や助言をする。さらに学友会行事や大学行事には教職員も関心をもって参加し、学生が学内行事に興味をもつような声掛け・行動を教職員が行うことで、学生の行事への参加を増やすよう努める。

(2) 健康の維持・管理

【現状】

健康支援室では学生が自ら健康管理を意識し、心身の健康を保持できるよう支援を行うことや健康な学生生活が送れるような環境作り、悩みを抱えた学生の良き相談相手となり、問題解決のためにアドバイスやフォローを行っていくことなどについて、各学科教員と連携を取りながら支援を行っている。

健康管理ワーキンググループは、年間3回の会議を開催し、日常の健康観察はもとより、学生の健康診断実施に基づく計画により、在校生健康診断及び新入生健康診断、四種抗体検査及びB型肝炎抗体検査、その後のワクチン接種などに取り組んでいる。特に、ワクチン接種については学生の学外実習が開始される前までに抗体値が基準を満たすように計画的に取り組んでいる。年間を通して学校保健管理や環境衛生管理に関する最新情報をもとに「健康支援だより」の作成を行って、学生や教職員に提供を行っている。また、学生生活に慣れた頃にはUPI健康調査（学生の心の問題をチェックする心理テスト）を実施し、個々の学生の状況を把握したうえで注意すべき情報を各学科と共有している。

令和6（2024）年度は健康支援室の年間利用が371人で、利用率は昨年度より30%減少している。訪室して来る学生の中には、少人数ではあるが友人関係の悩みや心身不調による

相談がある。他大半は休息を求めて訪室し、会話をすることでストレス解消をして、その後教室へ戻るなどの学生である。結果として、様々な学生が利用できている。

相談内容によっては病院受診を勧める例もあるが、学生相談員に繋げた上で、担任と連携して対応することもあった。相談室は年間 74 件の利用があった。少しずつではあるが相談室利用について学生へ周知ができ、利用の増加に繋がっている。

障がい学生支援では、障がいのある学生の学生生活に対して合理的配慮の提供に努め、全学的な支援を行う体制をとっている。本年度は支援申請に対する配慮内容の決定や支援状況の確認のため障害学生支援ワーキンググループの会議を 5 回開催した。4 月時点で 4 人の申請があり、前期試験時に 1 人の追加申請があった。このうち 2 人は継続申請で通年支援を実施した。新たな 3 人は、前期科目の受講配慮及び前期試験期間中の支援要請であり、適切な支援が実施され、前期終了とともに支援を終了した。通年支援の学生は 3 年次生でその内 1 人は学外実習時から就職をふまえた支援体制を組み、実習先の理解や配慮によって、就職が内定した。昨年の事例に続き本年度の事例においても、障がいを持つ学生の就職に対しては、就職先との密な連携が重要であることが示された。新任教員に対しては障がい学生支援の基礎知識の獲得の必要から、独立行政法人日本学生支援機構の「障害者差別解消法に関する理解・啓発セミナー（基礎編）」の視聴を課し、障がい学生支援の理解を深めた。

ハラスメント防止委員会については、年 3 回会議を行った。本年度も学生に対してハラスメントにおける認識と学生間や教育上のハラスメントの実態に関するアンケートを前期・後期の 2 回実施した。アンケート結果では、ハラスメント行為の認知度について前期・後期で大きく変化があった項目は、実習指導者と学生間におけるハラスメント行為の「実習生の能力の低さを必要以上に指摘する」が前期は 52.9%、後期は 70.4%であった。教員や学生からハラスメント行為を受けたことがあると認識している学生は、減少しているが実習指導者からハラスメント行為を受けたことがあると認識している学生はやや増加している。自由記述では、学生指導において「理不尽な叱責があった」「高圧的な態度や無視をされた」などの記述があり、両学科会議で結果報告と共に学生指導の仕方について振り返りを促した。相談窓口には、メールで 1 件相談があり、当該学科と連携を取りながら早期に状況の把握と悪化防止に努めた。

【課題】

健康管理ワーキンググループで日程調整をする健康診断は、検査の一部を担う総合医療センターと協議して日時を決定する。早くから総合医療センターと連携を取り、授業日程との調整を行っていく必要がある。

相談室利用に関しては、学生への周知と気軽に訪室してもらう方法として掲示のみでなくアピール方法の検討が必要となっている。

ハラスメントの実態に関するアンケートの結果やメール相談では、教員・実習指導者・学生にハラスメント行為を受けたと感じている学生が、主に相談する対象のほとんどが友人や家族であり、数人の学生は「誰にも言わない」と記述していることから、安心して教員や相談員に相談できる環境と体制づくりが必要である。また、実習指導者にアンケート結果をフィードバックし改善を求める必要があると考える。

【改善への方策】

健康診断については、関係部署との連絡調整を取り、年間予定を早期に検討する。相談室

の利用率を上げていくために学生が理解しやすい掲示や広報手段を検討する。

ハラスメントの相談体制の改善と環境づくりについては、毎年全学生にハラスメント防止制度があることを広報し、窓口相談とアンケートの訴えに対し教員や健康支援室、学生相談員、両学科と連携し早期対応をする。また全教職員にハラスメントをテーマにした研修を実施し、意識啓発とハラスメント防止の強化をする。実習指導者に対しては、実習中もしくはアンケート調査後に適切なタイミングで教員からハラスメント場面について提示し検討を依頼する。

(3) 進路支援

【現状】

本学における進路支援のうち、就職支援は学生生活支援委員会内の就職支援ワーキンググループ、進学・編入学支援は教務委員会が行うほか、それぞれの学生に対する個別対応は学科が担当している。

就職支援は、就活支援企業に依頼して「コミュニケーションワークショップ」「身だしなみ（化粧・髪型）講座」「就活準備&自己分析講座」「履歴書の書き方講座」「面接対策講座」「社会人基礎力・マナー講座」を1年次から3年次にかけて順次開催している。これらの講座は、学科の就職活動の開始時期や特徴に即して、両学科合同開催の講座と単独開催の講座に分け、支援を強化している。個別支援として、看護学科では、本年度から就職試験対策小論文指導を学科教員全員で指導する体制を構築した。小論文の指導法については、専門の教員による学科教員への研修を実施した。学生から提出された小論文をルーブリック評価表に基づいて評価・添削し、その上で個別指導を行った。医療介護福祉学科では、マンツーマンの支援が充実している。本年度就職希望者の就職率は100%であった（資料4-1）。

進学・編入学支援としては、「進学（編入学）ガイダンス」を6月と1月に実施しており、6月には、進学（編入学）実績、取得資格別の進学経路、受験対策等を説明している。1月にはスチューデント・アシスタントによる合格体験談・質問コーナー・個別懇談等を行っている。先輩学生のアドバイスは、臨地実習・国家試験勉強と進学先の受験対策との両立等がわかるため好評である。本年度は、6月のガイダンス参加者は1年次生9人であった。本年度は複数の進学希望者がいたが、合格者がなく、1月のガイダンスは不開催となった。そのほか、小論文の個別指導は年間を通じて随時実施した。英語は、主な進学先の過去問題・訳と正解集をWebClassに掲載した。また、進学・編入学に関する相談窓口を設置し相談を開始したが、本年度はこの窓口に具体的相談はみられなかった

【課題】

就職支援では、看護学科が本年度から始めた小論文指導の開始時期が3月末とやや遅く、4月に小論文の就職試験がある学生に対して十分な指導ができなかった。進学・編入学支援では、進学希望者が合格できなかったため1月の「進学（編入学）ガイダンス」が実施できなかった。進学・編入学支援に対する学生の満足度は78%と、昨年の37%より倍以上に増えたが、学外実習の教育体制や国家試験対策の満足度と比較すると高いとはいえない（資料2-1h）。また、進学相談窓口への認知度や活用度も低いことが課題である。

【改善への方策】

看護学科の小論文指導は、開始時期を1か月早めるとともに、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱの終

了後にも看護観に関する小論文を課すこととする。評価用ルーブリックの見直しを行い、体裁・表現の不備が可視化できるようにする。進学・編入学支援では、例年助産師や養護教諭等の課程への進学を希望する学生が複数いる。「進学（編入学）ガイダンス」実施直後は役立った（よかった）と答えているが、受験までの道のりが長いいため継続した支援が必要である。相談窓口の周知に努め、進学（編入学）を希望する学生の支援を強化していく。あわせてチューデント・アシスタントによるガイダンスを継続していく。

5. 教員・教員組織

(1) 教員組織

【現状】

令和6（2024）年5月1日現在における専任教員総数（助教を含む）は42人で、うち基幹教員は41人であった（資料5-1）。短期大学設置基準で定める基幹教員数26人を上回っている。基幹教員41人に対し、学生は341人であり、「教員1人当たりの学生数」は大学全体で見れば8.3人である。学科別で見れば、看護学科は10.0人、医療介護福祉学科は3.1人となっており、いずれの学科も定員を満たしていない状況（資料3-1）にあるが、逆に学生一人ひとりへのきめ細やかな指導が実践できている。

本学の専任教員の採用及び昇任の選考は、教員選考規程に基づいて実施している。令和6（2024）年4月には人事交流を行っている附属病院看護師2人を含む計5人を看護学科教員として採用したが、看護学科母性看護学担当が充足できていない。採用後は年間を通じて新任教員研修を実施し、若手の人材育成に取り組んだ。専任教員の専門性を補う内容及び基礎分野の一部教育においては、必要に応じて川崎学園の豊富な人的資源から非常勤講師を任用して教育の質を高めている。

【課題】

両学科とも専門性が求められることや近年の人員不足の社会情勢により、教員確保が難しい状況は継続している。

【改善への方策】

本学にふさわしい教員の確保については川崎学園の人的資源の開拓や大学教育を通して若手の人材育成に計画的に取り組んでいく必要がある。

(2) 研究活動の促進

【現状】

公的研究費（競争的資金等）を適正に運営・管理するため、最高管理責任者（学長）を中心とした管理運営体制を組織し、「公的研究費の不正防止に関する基本方針」のもと、適正な研究活動の促進に取り組んでいる。研究者等への公的研究費の運営・管理に関わる研修に関しては川崎医科大学・医療福祉大学との共催等により、全ての構成員を対象としてコンプライアンス等研修会、研究倫理教育研修会、科研費獲得に関する研修会等を開催している。その他、外部教材として、研究倫理eラーニングコース「eL CoRE」も活用している。

本年度は公的研究費獲得に向けての新規申請を研究代表者として2件行ったが、不採択となった。研究分担者としては6件の研究が継続して行われている（資料5-2）。

研究費獲得後の監査体制としては、学内外の人員で構成された監査組織を設けており、特に総評を依頼する本学園の監事との連携を強化している。11月には公的研究費を獲得している教員に対してモニタリングを実施した。12月には内部監査を実施して監査対象教員の科学研究費の執行状況や研究の進捗状況についてヒアリングするとともに、経理部長及び購買部長による評価・助言を受けた。また、あわせて公的研究費の管理運営体制の整備状況に関する監査を実施した。これらの監査結果を監事に報告して今後の体制整備に関する意見や総評を得た。また、モニタリングや内部監査結果については、教職員会を通じて全教職

員に周知し、研究活動の活性化に向けた啓発活動に繋げている。

【課題】

FD・SD 研修等の増加、受験生確保のための広報活動、入学する学生の多様化に伴う生活指導や補充的学修支援などの各種対策の増加によって、教員が研究活動にあてる時間を十分確保できない状況が見受けられる。

【改善への方策】

各種研修会や研究倫理審査等については、医科大学・医療福祉大学との協力体制を継続することで、教員の負担軽減を図る。また、多様化した学生対応に要する時間の縮減については、全教員による組織的な生活指導や授業改善等を行い、学生の生活、学修両面において資質能力の向上を図り、自立した学生の育成に努めることで教員の研究時間確保の解決を目指す。12月の内部監査の際、研究費による物品購入等において研究内容との整合性を判断できる教員を監査に加える必要があることが指摘された。次年度改善していく。

(3) 研究活動環境整備

【現状】

本学の教員研究費については、川崎学園大学事務局から総基準額として予算立が行われ、教員数（職階別の在職者数）、学生数、経年的実績等を勘案して学科別に積算し、割り当てられている。本年度の執行状況は、別表のとおりである（資料5-3）。

研究活動に関しては、本学の教員同士による共同研究、学外者との間で行われる共同研究を含め、講義・実習等による学生教育やその他の学務に差支えない範囲であれば、自由に行うことが可能になっている。また、医科大学の研究センターや学内の教育用実習室を利用することが可能な状態にある。

【課題】

専任教員の教員研究室がワンフロアに配置されているため、専任教員が研究または実験に使用する特別な研究室や実験室などは設けられていない。よって、研究場所や施設設備の確保が課題となっている。

【改善への方策】

各教員の努力はもとより、大学としても学園内他大学との連携による研究施設の利用や共同研究に対して時間的な配慮を行うなど対策を進めたい。また、研究テーマの発掘、若手教員への指導、科学研究費獲得者による研修会等の開催、外部研究助成金の募集などの周知によって、スムーズに研究活動が開始できるよう支援を行う。

6. 社会連携・社会貢献

(1) 地域連携

【現状】

本年度も地域連携の一環として公開講座を開催した。7月は医療介護福祉学科による「あらためて知りたい！認知症の方との関わり方ー地域での暮らしを支えるために、今あなたにできることー」、10月は看護学科による「運動の秋！生活習慣病の予防に運動を上手に取り入れよう～脂肪燃焼の秘訣～」をテーマに、いずれも本学の専任教員や専門家が講師を務め、地域住民のニーズに沿った内容で公開講座を実施した。テーマが認知症や生活習慣病に関わるものであったことから、参加者は岡山市内のシニア層の方が中心となった。受講後のアンケート結果は、各回とも好評であった。さらに、本年度は初の試みとして岡山キャンパスにある3施設合同による「七夕健康まつり」を開催した。小中学生から一般の方まで楽しめる内容で、健康チェックや健康相談、フレイル予防、病院探検ツアー、看護師・医療介護福祉士・救急救命士・健康運動指導士・作業療法士・視能訓練士・管理栄養士・医療福祉デザインの体験授業、キッズコーナーなどのイベントを実施した。600人を超える来場者があり、アンケート結果も好評を得た。これらの取組を通して、将来を担う世代に対する医療福祉への興味関心の醸成とともに、大学が生み出す知識、技術等を社会に還元し、広く周知して地域の活性化に向け一定の貢献をすることができたと考えている。

認知症に関する岡山市地域包括支援センターとの連携活動では、本学教員も認知症に関する指導資格を取得するなどの準備を行い、認知症サポーター養成講座・交流会（7月）、ステップアップ講座（9月）、ステップアップ交流会（10月）を共同で開催した。この認知症サポーター養成講座への参加勧誘をきっかけに、周辺商業施設から認知症理解のための研修依頼が岡山市地域包括支援センターにあり、本学教員も講師として参加することで地域に根ざす活動を一步進めることができた。また上記の活動と共に、高齢者医療センターとも協力して、認知症患者の活動支援や当事者・家族の交流を支援する認知症カフェ（こもれびカフェ）を7月、10月、12月、2月の年4回実施した。9月よりワーキングチームを立ち上げ、高齢者医療センターを中心とする実施体制に移行させた。この認知症カフェは、本学の両学科学生や教職員がボランティアとして参加し、学生主体の企画も担当するなどして本学と地域の方との交流の場となっている。次年度については年6回計画し、地域に根ざした活動を目指す。これらの取組を通して地域の方々への認知症理解を深める活動に貢献できたと考えている。

この他にも医療介護福祉学科独自の活動として、岡山県福祉・介護人材参入促進事業を活用した小学生～高校生に向けた「チャレンジセミナー」の開催、キャリア形成訪問指導事業を活用した福祉施設職員対象の「ノーリフティングケア研修」を実施して介護人材の育成に寄与・貢献している。また、倉敷市社会福祉協議会の依頼を受け「介護技術講座」を倉敷市民に実施している。

【課題】

本学で開催される公開講座は、本学の知的人的資源を活用した講座を開講することとし、専任教員が講師を務めており、また受講生の年齢も毎回60歳以上が約70%以上を占め、リピーターが多いのが特徴である。そのため、テーマ設定や学内外から幅広い分野の講師の選

定を検討し、広い年齢層で興味を引くテーマ設定を検討していく必要がある。

認知症に関する活動は、まだ開始したばかりで試行錯誤で進めている。これを今後いかに定着させていくことができるかが課題である。

【改善への方策】

キャンパスを岡山へ移転して3年が経過し、本学の特色や川崎学園岡山キャンパスの3施設を生かした地域貢献活動が少し進み始めたところである。岡山市や岡山県における医療福祉ニーズを捉えながら、本学の特色を生かした貢献ができるよう努力を継続する。まずは、令和6（2024）年度から開始した「七夕健康まつり」と認知症に関する連携活動を次年度は改善を加えて継続し、地域に定着できるよう推進していく。

(2) 高等学校との連携

【現状】

本年度は、岡山県立岡山御津高等学校、岡山学芸館高等学校及び岡山県立和気閑谷高等学校（2年生・3年生それぞれ別日）から生徒訪問を受入れた。看護学科・医療介護福祉学科両学科がそれぞれ協力しながら「模擬授業」「学内実習」「学内見学」等を実施した。一方、本学教員が高等学校に出向き進学ガイダンスを含む模擬授業を行ったのは、岡山県内28校、岡山県外17校であった。実績として、昨年度より県内は5校減少し、県外は9校増加した。本学と協力関係にある岡山県立総社高等学校とは、本学教員と高等学校教諭による合同研修を実施し、入学後の教育に活用している。本年度の研修は「国語」と「美術」の教科横断型授業を参観し、意見交換等を行った。同校とは、本学独自の入学前学習（Dラーニング）について意見交換も行った。入学者選抜の妥当性の検証においても、外部有識者の知見を得るため総社高等学校の教諭と意見交換を実施した。また、早期入試合格者（専願入試）全員を対象として学力と学習意欲の維持・向上のため、在籍高等学校の教員に学習経過と課題の実施状況を確認してもらい「入学前学習チェックシート」を導入した。本年度入学した専願入試の現役合格者全員が在籍高等学校の教員の確認を受け、入学前学習の確実な取り組みに繋げることができた。昨年度の課題となっていた、高等学校のガイダンスで本学の説明や広報を担当できる要員を増加させるという課題については、未経験者が経験者と同様の内容や方法を修得していくことで対応した。

【課題】

18歳人口の減少に加えて、医療介護福祉に対する高校生の興味・関心の低下も懸念されており、将来の医療福祉人材確保の観点からも、県内だけでなく県外の高等学校とも連携し模擬授業やガイダンスに参加するなどして生徒はもとより高等学校の教員と意見交換を積極的に進め、興味・関心の醸成に努めていく必要がある。

【改善への方策】

本年度は採用間もない教員のガイダンスの対応への育成に努めた。次年度は全教員あげて県内・県外のガイダンスに参加していく。本学への高等学校の受入れも積極的に実施していく等、県内高等学校との強力な連携体制の構築も継続していく。

(3) ボランティア活動

【現状】

本年度、学生が参加した一般のボランティア活動は、近隣の商店・町内会との合同清掃ボランティアに5回（学生22人、教員5人）、岡山県や岡山県警察に協力する街頭防犯活動などに3回（学生8人、教員3人）であった（いずれも延べ人数）。また同好会や部活動の関係でのボランティアでは、ハピネスリボン部が岡山市の認知症に関する事業に協力して学内外で活動し、献血ボランティア部が学内や街頭で献血の呼びかけ活動をするなどした。また、高齢者医療センターから患者の花見サポートの要請に18人の学生が参加した。さらに学外からの公募によるボランティアでは、11月に開催された「おかやまマラソン2024」に看護学科の専門性を生かして7人がAED班として、12人が救護班として市民ランナーのサポートを行った。

【課題】

本学の学生は時間割が過密な時期が多く、平日の活動が比較的難しい現状がある。公的機関からのボランティアの要請に学生の希望があっても日程調整がつかない場合が多く、活動の機会が限られるのが現状である。

【改善への方策】

公的機関を通じて要請があるボランティアなどは学生の都合に合わせて日程変更することは難しいが、本学の学生が主体で実施するボランティアの場合は、時間割などに合わせて活動日時を決定することが可能と考える。次年度発足するボランティア同好会では、活動日時の調整方法についても指導を行い、学生が無理なく活動できるように指導する。

(4) 国際交流

【現状】

昨年度の課題であった国際交流への意識向上に対する取組として、本年度は1年次生のリベラルアーツ教育に海外研修の説明会を含めて実施した。その結果、上海研修及びデンマーク医療福祉研修それぞれに参加希望があった。

昨年度のデンマーク医療福祉研修は、参加希望者が少なく最少催行人数に達せず中止となった。本年度は、渡航費の価格高騰が継続しており、参加者の減少も懸念されたため、希望者に対し興味を喚起する内容のオリエンテーションを実施した。その結果、上海研修及びデンマーク医療福祉研修あわせて9人の参加者があった。

上海研修は8月27日から31日に実施し、6人が参加した。医科大学、医療福祉大学の学生と共に、上海健康医学院及び上海中医薬大学での研修やそれぞれの大学生との交流を行った。デンマーク医療福祉研修は9月7日から15日に実施し、3人が参加した。医療福祉大学の学生と共にオーデンセ大学総合病院や地域の施設、高齢者在宅への訪問等での研修を行い、デンマークの充実した医療福祉について学ぶとともに、現地の学生等との交流を深めた。

【課題】

大学が奨励している研修であることを踏まえ、現地の社会情勢などを事前に調査し、滞在中の学生に危機管理への意識付けをしていく必要がある。

学生への国際交流への意識向上と、年々増加する渡航費の高騰は継続して課題である。

【改善への方策】

海外滞在時の危機管理への意識付けを、オリエンテーション時から更に学生に徹底する。

学生への国際交流の意識向上については、リベラルアーツ教育の一環に含めて内容を充実させて取り組む。

円安や物価高での渡航費の高騰については、継続して医科大学や医療福祉大学と十分に検討し、参加しやすい環境を整える。

7. 内部質保証

(1) 自己点検・評価活動

【現状】

教学マネジメント体制の下にある点検評価委員会を令和6(2024)年度は10回開催した。本学のアセスメント・ポリシーに基づいて学修成果の点検評価を昨年と同様に実施した。年次別の収容定員数の充足状況、学生在籍状況、就職率、国家試験合格率等により大学レベルの教育効果を評価した結果、就職率や国家試験合格率は教育効果が上がっているものの、収容定員数の未充足は継続し、看護学科においては留年率や退学率が昨年より改善が図られているが依然一定の割合を占めている。教育課程レベルでは、学修成果達成度調査、ディプロマ・サプリメント評価、単位取得状況、GPA、GP分布、分野別GPCAの推移、カリキュラムマップ・カリキュラムツリー・ナンバリング等から教育課程の編成及びその適切性を検討した。特に、看護学科は、新カリキュラムの完成年度であり、教育課程の編成についてその適切性の検討が進んでいる。授業科目レベルでは、授業科目評価としてのGPCAと学生の授業評価を実施して個々の授業効果を評価すると共に科目間の平準化を検討し、少しずつ平準化が進んでいることも確認できた。また、入学者選抜の妥当性については、入試区分別のプレースメントテスト結果分析、GPA、中退率、国家試験合格状況や入学後の学習状況及び基礎学力確認テスト実施者の入学後の学修状況からも検討し、募集人員の調整の参考となった。教育・学修環境の整備については、学生生活満足度調査や学生参画FD・SD委員会、学生参画点検評価委員会での意見や要望を踏まえて改善を図った。これらの主な結果については本自己点検・評価報告書やホームページ上の大学データ令和6(2024)年度で公開している。

学修成果の評価を進めるにあたって、アセスメント・ポリシーの制定から6年が経過し、学生参画FD・SDや学生参画点検評価など、学生視点での点検評価の重要性が高まってきたことやディプロマ・サプリメントなど学生の学修成果の達成状況を評価する指標の開発、成績評価の平準化の取組など可視化したデータを用いた分析が多岐に亘ってきたことなどにより、本年度アセスメント・ポリシーを修正し、また評価指標の見直しと検証方法の改正を行い、令和7(2025)年4月より施行することとした。

また、本学で定めているガバナンス・コードの遵守状況を点検(点検基準日:令和6(2024)年10月1日)し達成状況を確認した。加えて、川崎学園中期目標・中期計画で示されている指標について、本学の達成状況を評価し、今後の改善につなげるとともに次期中期目標・中期計画に短期大学案を反映させた。

さらに、私立大学等経常費補助金「教育の質に係る客観的指標調査」を基にした点検と私立大学等改革総合支援事業タイプ1の各条件による点検を進めることによって、充足していない部分の明確化と共に改善に向けて取り組むことができた。

本年度の自己点検・評価報告書には、次期認証評価の指標を踏まえて、教育環境の充実を明確にする一端として図書館の運営・管理を追加した。

教職員の質向上のために本学単独のFD・SD研修会を4回(他新任教員向け研修会8回)、医療福祉大学との合同研修会3回、医療福祉大学との共催授業研究カンファレンスを1回実施した(資料7-1)。また、学生参画のFD・SD委員会も1回実施し、授業資料提示に関

する要望など具体的な意見が出され教員への周知を図り改善を行った。学生の指摘した授業評価に対しては、改善点等を WebClass 上の各科目のコース上に掲載して、学生へのフィードバックを図った。しかしながら学生の閲覧数は少ないのが現状である。

【課題】

これまで内部質保証の充実のためにアセスメント・ポリシーに基づいて可視化したデータを用いて、学修成果の水準の保証や教育課程の改善、入学者選抜の妥当性の検討、学習・教育環境などの整備、教員の能力の向上に重きを置いてきた。多くは改善に向けての方策がとられ効果も出てきているが、昨年度の課題でも取り上げたように、受験生確保が難しくここ数年、両学科共に収容定員数の充足に至っていない。このことは、入学者選抜の妥当性を検討するにあたって大きな課題であり、ひいては入学者の学修成果の水準を保証していく上でも影響を及ぼすと考える。

また、内部質保証の充実のためにアセスメント・ポリシーの改正と評価指標の見直しを行ったためその有用性の検証が必要となる。

教員の能力の向上においては、電子テキストの導入など学修環境の多様性と共に、医療福祉施設においても ICT 活用が重視され、教員のデジタルスキル格差が教育の質に影響を及ぼすことが懸念される。そのため、ICT 分野の能力向上は、喫緊の課題として、必要に迫られている。

【改善のための方策】

本学のアドミッション・ポリシーに適合した入学生を確保するために、さらなる広報活動の強化を図る。その土台として学生の学修成果の向上と大学生活の満足度を高めるために、主に本報告書の 2. 教育課程、4. 学生支援、6. 社会連携・社会貢献で述べた方策を実践すると共に学生評価・外部評価の意見を取り入れ、魅力ある大学づくりを行う。さらに、教育の質向上のために、FD・SD 研修においては時代に即した研修テーマ選別を行い、早急にデジタルリテラシーの向上のための対策を検討していく。

また、点検評価委員会と IR 室、各種委員会との連携を強化し、大学の意志決定に有効利用できるデータ分析を行って改善につなげ、内部質保証の充実を図ると共に新たなアセスメント・ポリシーによる大学評価を行う。

加えて、学生評価に対する改善の取組を学生にフィードバックできる体制を検討していく。

(2) 教員活動評価の実施

【現状】

教員活動評価は、令和 6（2024）年度の評価を次年度に評価するために評価結果の公表は 1 年遅れとなる。令和 5（2023）年度教員活動評価を川崎医療短期大学教員活動評価規程及び同実施要領に基づき実施した。被評価者は特任教員及び長期休暇教員等を除いた専任の教授、准教授、講師、助教とした。

教員活動評価は、4 領域（教育活動、研究活動、大学運営活動、社会貢献活動）を「行動評価（教員活動評価票 1）」と「目標管理評価（教員活動評価票 2）」の観点で評価する。年度末に各教員が 1 年間の業務遂行状況を自己評価したのち、一次評価として学科長が面談を行いそれぞれの評価と職位に応じた総合な評価を行った。その後、学長により、一次評価

における不均衡の有無の確認と共に、新任教員及び2年目教員への個人面談などの二次評価を実施した。令和5（2023）年度教員活動評価結果は資料7-2に示すようにS1人、A17人、B15人、C0人、D0人であった。これらの結果については各教員へ返却し、活動実績についての振り返りとさらなる研鑽を促した。

令和5（2023）年度は、総合評価において「S極めて高い活動状況である」と評価された教員が1人、「A評価」が17人と半数を超え、全体的には高い評価となった。行動評価においては、各教員の委員会委員の担当数や担任など担当する役割や経験が大きく反映しており、職位による評価が難しい側面がみえる。目的管理評価においては、点数化による達成度評価の均等化ができる状況は整備されつつあるが、本年度も自己評価が低い教員が多く存在し、本人評価よりも学科長が高く評価している状況が窺えた。これらの行動評価、目的管理評価、総合評価の結果は、令和7（2025）年度の委員会委員への抜擢や昇任人事等処遇の参考として用いられた。

【課題】

目標管理評価においては、点数化を実施し各目標の達成度が客観化されたが、各教員評価に比べて学科長評価が高い傾向は継続し、教員の各目標設定時の学科長と各教員の到達レベルの共通理解が必要と考える。

行動評価は各教員の職種や委員会等の役割によって比較検討が難しく、評価基準が統一できない状況は継続し、職位に応じた役割配当もやや偏りを生じている。

【改善への方策】

目標管理評価の数値化の適切性を確保するために、学科長の総合評価を行う際の個人面談時に昨年度の評価と共に当該年度の目標設定について相互で確認することを継続する。行動評価については、職位に応じた役割を調整する。

(3) IR室と点検評価委員会の連携

【現状】

本年度は、IR室会議を5回開催した。点検評価委員会との連携が重要となる内部質保証の根拠データの分析においては、学科や委員会からの授業評価や実態調査などのデータ収集及び分析依頼が14件あり、分析結果などを依頼者に提供した。その内、入学者選抜の妥当性の検討及び教育課程の編成及びその適切性の検討に、GPA・GPCAや授業評価、学修成果、プレースメントテスト等の分析が生かされた。

一方、大学運営に必要となる学内情報の一元化と漏洩防止の目的から、大学データ管理運用体制の構築を進め規程等をおおむね整えてきた。その後医療福祉大学との調整に入ったが規模の差などから、運用制度の共有等調整の難しいものも多く本年度は検討に留まった。但し、初歩的なデータ管理のずさんさによるデータ漏洩を防止するために「データ管理の基本」としてFD・SD研修を開催し、情報セキュリティ意識の向上に努めた。

IR機能の向上・充実に向けて、2人の室員が大学評価・IR担当者会議（2024）に出席し、IR実務担当者間の交流により他大学の取組や情報の活用の重要性を学んだ。さらに、医科大学・医療福祉大学・本学の3大学共催にてIRセミナーを実施し、学修行動調査や入学者選抜の妥当性の検証、本学は入学者の妥当性の検討を紹介し、大学の内部質保証の充実に向けてIR室の有用性を確認した。

大学の現状を見える化し紹介するために、ファクトブック Vol. 6（2023 年度版）を作成して、ホームページ上で公開した。

【課題】

18 歳人口の減少から本学も受験生が減少しており、入学者選抜の妥当性として、入試区分別募集定員のさらなる検討など綿密な分析が必要となる。教育の質保証に繋がる新たな分析方法について検討は重ねてきたが実際の提案までに至っていない。昨年度から実施している学修成果達成度調査は、他の教育効果指標との比較検討が進んでいない状況であり、今後検討していく必要がある。

【改善への方策】

学生対象の各種調査等の分析について、学修や学生生活に関わる項目のクロス集計などを活用して学修に対する阻害要因の特定や改善の方策等に取り組むなど、IR 室から大学への新たな視点での分析方法を提案していく。

教学マネジメントに生かせる大学データ管理体制の構築に向けて、情報管理規程の整備や学内データ MAP 管理、運用体制の整備を引き続き行い、学園他機関等の調整を進める。また、機密情報管理においては、学園セキュリティインシデント対応チームの方針に準じて対応する。引き続き教育マネジメント体制の強化のために、点検評価委員会や学園内 IR 組織との連携を継続する。

(4) 学生による評価

1) 教育体制・支援に関する学生評価

【現状】

学生参画の FD・SD 委員会等で教育体制・支援や授業改善に関する意見を聴取した。学生からは、授業の進め方として事前課題や小テストなどがあれば、予習や復習ができるので良いこと、WebClass 掲載用資料に関しては、掲載が講義直前になる科目があることや掲載資料の枚数が多い時は印刷に苦勞すること、さらに掲載資料にタイトルがついていないと保存に困ることなどが意見として挙げられた。加えて、非常勤講師や他学科教員と連絡が取りにくいことについて改善希望があった。

令和 7（2025）年度から、看護学科では電子テキストを導入する予定であるため、これに関する意見としては、紙の教科書でないと学習ができないなど、電子テキスト使用への不安の声が聞かれた。

委員会後に両学科教員に「WebClass への授業資料掲載については、最低でも 2 日前くらいを目指し、添付資料は PDF で掲載した方が見やすいこと」を周知して改善を行った。それにより、後期からの講義では改善された。

【課題】

学生の意見からオフィス・アワーの周知と活用ができていないことや非常勤講師や他学科教員との連絡が WebClass で可能であることを周知することが課題である。また、看護学科においては、電子テキスト導入に関する事前説明の重要性が示唆された。

【改善への方策】

オフィス・アワーの周知と活用については、全学生にポータルサイトで全教員の設定された時間を配信すると共に、各教員については、授業導入時に各自が改めて説明を行うことと

する。非常勤講師と連絡が取りやすいように WebClass での連絡方法について周知を行う。

看護学科では、電子テキスト使用に向けて入学時オリエンテーション時に電子テキストのダウンロードや使い方の支援を、特に丁寧に時間を取って行う。また、次年度も入学前のキャンパスカミングデイ時に電子テキストやタブレット、パソコン等に関するオリエンテーションを実施する。

2) 学生満足度調査

【現状】

学生による大学生活の評価として、全学生を対象に1月～2月に学生生活満足度調査を実施した(資料7-3)。回答率は96.6%であった。

学科支援に対する評価では、担任の支援に対して〔とても満足している〕〔おおむね満足している〕と回答した学生が88%、学科教員の支援に対して同様の評価をした学生が84%と概ね高い評価が得られた。さらに所属学科に〔とても満足している〕〔おおむね満足している〕と回答したのは83%であった。全般的に多くの学生が学科や教員など教育のソフト面に対して満足していた。

その他の学生生活支援部署に対する満足度が低いものは、特に無かった。

昨年度、[満足していない]が25%あったロッカー設備については、同一学年のロッカーを分散させるなどの配置変更をしたが、依然として同率程度(26%)が満足していなかった。

また学生の要望によって導入した軽食の自動販売機は全体の51%が利用しており、キッチンカーは45%が利用していた。また11%が飲食設備を利用しておらず、これは昨年度と変化がなかった。

【課題】

生活付帯設備に満足していない学生の割合が26%と依然として高い。

【改善への方策】

次年度は看護学科1年次生に電子テキストが導入されるため、ロッカーの使用頻度や収納品が少なくなることが推測できる。〔とても満足している〕〔おおむね満足している〕と回答した学生が全体の60%と過半数を占めており、総合的には使用方法等の工夫などで不満の改善に努めていきたい。また、継続して満足度を調査することで、学生生活における不満の原因を検証し、できるかぎり対応していきたい。

3) 卒業後アンケート

【現状】

卒業生による大学評価として平成30(2018)年度及び令和5(2023)年度の卒業生を対象として、Google フォームを用いたオンラインアンケート(卒業後アンケート)を8月に実施した。回収率は平成30(2018)年度卒業生が31.1%、令和5(2023)年度卒業生が48.1%であった。

今回調査対象となった卒業生は、平成30(2018)年度卒業生では83%、令和5(2023)年度卒業生では95%が「本学で学んでよかった」と回答していた。本学での学びの有用性を実感し、卒業後の就職や進学にも満足しているものと推察される。また「専門的知識・技術」の修得はもとより「他者との協働」「人間関係の構築」「コミュニケーション」「倫理観」

に関する教育に対する評価が特に高いことから、本学の教育は医療福祉の専門職者としての能力の涵養にも役立っていることが窺える。また昨年度実施した令和4（2022）年度卒業生の調査結果と比較して令和5（2023）年度卒業生の学生生活に対する評価が若干低かったが、コロナ禍と在学中のキャンパス移転という環境の変化に起因するものと考えられる（資料7-4）。

【課題】

「批判的思考」「異文化理解」「リーダーシップ」「グローバルな問題の理解」などは本学での学びの有用性の評価が低い。

【改善への方策】

今回課題となっている部分の教育は、本年度から開始した「リベラルアーツ教育」で取り組んでおり、今後これらの評価が改善していくことを期待している。

4) 就職支援アンケート

【現状】

本学の就職支援に生かすことを目的に、本年度の卒業予定者を対象に、学科の個別支援と就活支援企業の就職活動支援講座について卒業前にアンケート調査（就職支援に関するアンケート調査）を行った。看護学科では昨年度に比べて面接練習と小論文の添削指導の役立ち度の評価が低い状況であった。医療介護福祉学科では全般的に高い評価となった（資料7-5 a）。各講座の役立ち度は、看護学科が平均7.5～7.7、医療介護福祉学科が平均6.2～7.7と昨年度に比べて低い状況となった（資料7-5 b）。就活支援企業提供のキャリアデザインツールの適性診断を生かせなかった学生も少なからずいた。

【課題】

看護学科では、川崎学園以外の病院を受験する学生への面接練習と小論文指導を強化する必要がある。両学科共に、昨年度は、就活支援企業が提供するキャリアデザインツールの適性診断を受検し、その結果に基づく自己分析、自己PR・志望動機・履歴書の作成、面接・小論文練習という積み上げ方式の対策が成果を上げた。一方、本年度は、客観性の高い適性検査の診断結果よりも自らの主観を優先して志望動機や履歴書を書くなど、キャリアデザインツールを生かすことができていない学生が増加した。

【改善への方策】

キャリアデザインツールの活用については各学科内で共有し、履歴書作成などの個別指導に役立てる。看護学科では学生のニーズに即した支援を行う。医療介護福祉学科では、医療機関に就職する学生が増えていることから、医療に強い介護福祉士育成の教育を拡充するとともに、新たな就職先となる医療機関の開拓を進める。

(5) 外部評価

1) 卒業生就職先アンケート

【現状】

本学の教育改善を目的として、令和5（2023）年度看護学科・医療介護福祉学科卒業生の就職先にアンケート調査（卒業生採用に関するアンケート調査）を実施した。本年度は質問内容を見直し、ディプロマ・ポリシーの達成度など対人援助職者に求められる資質・能力を

中心に評価していただいた。回収率・総合的満足度の平均値は、看護学科の回収率 66%・満足度 4.2、医療介護福祉学科の回収率 100%・満足度 4.1 で、医療介護福祉学科の満足度がやや低下した。いずれの学科も、誠実性と責任感の評価が高かった（資料 7-6）。

【課題】

評価の高かった「誠実性」や「責任感」が強いという特長を伸ばすとともに、「対人関係構築力」や「情報伝達力」などのコミュニケーション力、「主体性」や「探究心」などの問題解決力の涵養を目指した能動的学修の充実を求める必要があることが示唆された。また、一部ではあるが、本人の適性に合った就職先の選択ができなかった卒業生がいることが明らかになった。

【改善への方策】

両学科共通の科目「保健医療福祉概論」、並びに「コミュニケーションワークショップ」において、コミュニケーションの基本に関する指導を強化する。看護学科では、令和 4（2022）年度に組み入れた「看護フィールドワーク論」「看護研究」において社会で通用する問題解決力の向上を図る。医療介護福祉学科では、病院実習において総合的な介護が実践できる力を涵養する。また、学生の性格・適性に合った病院・施設選びができるよう個別支援を強化する。

2) 岡山市の評価

昨年度に引き続き岡山市政策局政策部政策企画課に依頼して、令和 5（2023）年度の自己点検・評価報告書を基に本学の教育活動全般について評価して頂いた。本学の教育については、「創立 50 年の歴史を踏まえ、充実した教育環境を最大限に生かすと共に、教育課程のさらなる充実に努め、患者本位の臨床に強い医療福祉人を育成すること」「大学の管理運営について、様々な角度から客観的な検証を行い、それに基づく分析によって改善に努めること」「学生の受け入れについては、若年人口の減少による大学進学の様相が変化している中、3 年制の介護福祉士養成等特色ある取組や実習環境として大学附属の病院を 3 施設も持つ優位性を生かしてニーズのある学生にリーチするため、県内外を問わず積極的に PR し、目的意識を持った学生確保に努めること」などについて評価や助言いただいた。

また、地域連携活動では、学生ボランティアの地域清掃活動や防犯活動への感謝と共に、岡山市が推進している認知症サポーター活動促進事業についての協力関係の維持や学生の地域定着への期待も寄せられた。

8. 管理運営

(1) 事務組織の整備

【現状】

事務室は施設設備の維持管理や物品購入、学生事務対応、入試、各種行事などの他に委員会の運営などに関わっている。特に委員会への資料の提供や委員会で出た意見を集約しての教育活動や教育課程への反映など、大学運営体制の基盤を支える役割を担っている。あわせて、教員研究のコンプライアンスに関わるサポート、文部科学省等の調査や私立大学等経常費補助金の申請、奨学金対応、教育課程改定のための基本資料作成など、専門的な知識を要する業務も担っている。限られた人数でこれらに対応するため、個々の専門性を維持・育成しながら、危機管理上、協働との両立を図った1年間であった。

【課題】

本年度は人事異動により、教育研究、補助金、奨学金等に関わる業務を新たな担当で遂行した。特に補助金申請等においては要領や基準を解説し、過去の資料等を参考に要件を確認し、必要に応じて教育内容・方法等の改善を提案できた。一方で、全体として、事務業務が現状維持の状況で推移した感が否めない。事務処理の項目数は大学の規模によらず一定量あり、これに限られた人員で対応するとき、人事異動により業務遂行に影響を受けることは避けられない状況であった。

【改善への方策】

業務内容のスクラップ・アンド・ビルドの推進、複数担当制の一層の推進、担当者の処理能力の向上を図るとともに、役職者による業務遂行状況の確認やきめ細やかなサポートに取り組む。

(2) 人事労務管理

【現状】

労務について、教員は裁量労働制による勤務を行っているが、休日出勤などに対応するため36協定を締結している。退出時刻等を確認するなかでは、通常勤務を大きく逸脱するケースや深夜労働等も少ない状況にある。教育活動や研究活動等については、教員活動評価票により学科長と確認しながら目標設定を行い、学科として共通の方向性を維持しながら取り組んでいる。

事務職員については学園の人事考課にのっとり、提出された人事考課表を基に、年間の目標設定や実施方法などについて当初面談を通して確認や修正を行い、事務室業務の統一性と実効性を重視して取り組んでいる。評価者が年間の取組の進捗状況を観察し、適宜指導・助言を加えながら最終的に達成度について評価を行っている。これらにより、主担当業務の責任ある遂行がなされている。

教職員いずれも労務管理については学園のWeb人事システムにより日次・月次の勤務状況の確認を行い、勤務時間や休暇の取得等について上長より適宜指導・助言を行っている。

【課題】

教員については、学科長により、大学運営に関わる委員会委員や担任を指名されるが、その担当役割により業務量に大きな差ができることが継続している。また、広報活動や大学行

事等で土日の勤務が増加してきており、平日も学外実習の指導の必要から平日にも休暇が取りにくい現状がある。岡山キャンパス移転に伴う実習指導のための遠距離移動は継続しているが各人が工夫し、負担軽減に努めている。

事務職員については庶務的業務、教務的業務の両面において、年度替りや学期末に多くの業務が同時展開となり、主担当者の業務過多が改善できていない状況が継続している。

【改善への方策】

教員の業務量の偏りについては、次年度の業務担当者を事前に学科会議にかけて、不具合を調整し、偏重を避ける対策を継続的に講じる。また、業務量が多い年度が継続しないように、学科長が調整を行う。実習指導のために遠距離移動に対する負担については、松島キャンパスの教員控室の環境調整を継続する。

事務職員については、次年度退職予定者の業務移行を見越して、年間を通して相互にサポートできる業務を拡大し、協働体制を推進している。個々の ICT 対応能力・技術の向上とスクラップ・アンド・ビルドを推進していく。

(3) 施設整備管理と防火・防災対策

【現状】

岡山キャンパス新校舎棟の運用開始後 2 年が経過したので、7 月に施行業者による 2 年点検を行った。点検後、屋上庭園のコンクリートや壁面の隙間の補修等を行った。また、各室の室名表示のフィルムが剥離したため、別な材質で表示板を作り替えた。

学生の学習環境の改善のため、予約制としていた自修室を 16 時から 18 時 45 分の間、学生が自由に利用できるようにした。

松島キャンパス体育館で行う体育実技の授業日には付随する講義室を利用して、そのまま他の授業が受講できるようにした。また、この講義室は看護学科の学外実習の症例検討のミーティング等でも使用し、有効に活用している。

危機管理・防災指導體制の整備に関しては、防災マニュアルに基づき、9 月 20 日に防災訓練を実施した。地震後の火災を想定した訓練を実施し、全教職員・学生を対象に教室内で命を守るポーズの実践の後、避難誘導や安否確認を実施した。令和 6（2024）年度は、消防署及び消防団の協力を得て、VR による防火学習や校舎棟の防災設備の確認も行った。訓練日は 9 月の猛暑日であり、熱中症等の心配も生じたが悪条件での避難に必要な事柄を考える機会にもなった。

【課題】

施設面では昼食時に 4 階学生ラウンジに利用者が集中し混雑する状況があり、その混雑を緩和するための対策が必要となっている。防災面では災害時の一時避難場所として、飲料水や食料品、防災用品などの備蓄品を準備しておくことが必要となる。

【改善への方策】

施設・設備面で調整が必要な部分については、運用の見直しも含めて、今後も学園の企画部や施設部をはじめとする関係部署と緊密な連携を図り、適切に対応していく。

防災対策として、災害時のための防災用備蓄品を確保しておく。

(4) 地球温暖化対策の実施

【現状】

本年度の地球温暖化対策ワーキンググループは、事務長、図書館職員を含む7人で構成されている。取組として7月と12月の年2回、学生も交えて省エネパトロールを実施し、省エネ活動の実態調査を行った。本年度はより多くの学生に地球温暖化対策に対する意識付けをするよう学生数を増やした。こまめな消灯や効率的な冷暖房の運転、少人数で大きな部屋を使用しないように適宜呼びかけを行い、月別エネルギー消費量を毎月ポータルサイトに掲載するなど省エネの啓発に努めた。またお盆期間中は冷房運転を停止した。その結果、電気使用量については月ごとに多少の増減はあるものの昨年度と大差はなかった。昨年度エレベーター使用について「2UP3DOWN」のポスターを掲示板やエレベーター内に掲示をしたところ、多少の効果が見られたため本年度も引き続き掲示をした。ガス使用量は昨年度と比較して大幅に増えている月があった。

【課題】

電気使用量を抑えるためにできることは引き続き実施する必要がある。エレベーター使用ではポスターを掲示しているがあまり効果が感じられなくなっている。不要なガス使用は控える必要がある。

【改善への方策】

省エネパトロールの実施や広報・啓発活動を行い、教職員及び学生の協力を得て省エネに対する学内の取組を継続する。具体的には、人数に見合った講義室等の使用や各室のエアコンの適切な設定温度について引き続き授業担当教員に要請し、学生への声掛けも行う。エレベーターの使用についてはポスター掲示を継続しながら適宜声掛けも行い、省エネ意識を喚起する。ガス使用については使用する1時間前にスイッチを入れるよう教職員に要請する。

(5) 図書館の運営・管理

【現状】

図書館は学生・教職員の学修・教育・研究活動を支援するため、図書館利用支援、資料の利用促進、学園内外図書館と連携したサービスの提供、蔵書管理を行っている。

本年度は看護学科の2年次生と3年次生を対象に、教員と連携して電子ブックの利用説明会を実施し、学生は各自リモートアクセス登録を行った。また、図書館運営委員会の下、利用状況を踏まえた購読対象雑誌の大幅な見直しを行い、予算の効率的な運用を進めるとともに、雑誌の保存年限の方針を定めて限られたスペースでの蔵書管理の体制を整えた。

【課題】

電子ブックの年間閲覧回数は昨年度の約6.8倍に伸びたものの、まだ利用増加の余地がある。

【改善への方策】

電子テキスト導入等による学生のデジタルでの学びの効果や利便性等の動向を注視しながら、電子ブックの利用促進と利用指導を継続して行い、蔵書構築にも反映させる。また、電子ブックへのアクセスを容易にするため、二次元コード付きの見出しの書架への配置を継続することに加え、図書館ウェブサイトの電子ブックのページの配置を改善する。

(6) 寮の運営・管理

【現状】

令和5（2023）年4月より男女とも入寮可能な川崎学園学生寮「中山下レジデンス」を開寮した。令和6（2024）年4月1日時点での在寮者数は、1人用居室Aタイプ：48人、2人用居室Bタイプ：1人であった。

令和7（2025）年度入寮者の募集にあたり、1人用居室Aタイプの空き室予定数が6室であり、入寮希望数が空き室数を上回ったため、抽選で入寮者を決定した。

また、松島キャンパスにある女子学生寮「このはな寮」の入寮者数は、令和6（2024）年4月1日現在で、432人であり、昨年と約同数であった。

【課題】

中山下レジデンスは開寮時に同学年が多く入寮したため、学年による入寮者の偏在が生じている。令和8（2026）年度は1人用居室Aタイプの空き室数が22室となる見込みで、満室にならない可能性がある。

このはな寮への入寮者数は減少し、令和7（2025）年3月31日現在で短期大学生の在寮者数は4人である。これは、本学が岡山市に移転した影響が大きい。

【改善への方策】

オープンキャンパス等で中山下レジデンスの利便性などを積極的にアピールしていく。

中山下レジデンスの抽選に落選した希望者に対してはこのはな寮を紹介する等、2つの寮で連携を強化する。

資料 2 - 1 令和 6（2024）年度学修成果の達成状況等調査結果

表中の略称について
NS：看護学科
CW：医療介護福祉学科

I. 調査時期、対象者数

1. 調査時期：令和 7 年 1 月下旬～2 月上旬
2. 対象者：令和 6 年度在学学生（休学者を除く令和 7 年 2 月時点での在籍者）

対象者及び回答数

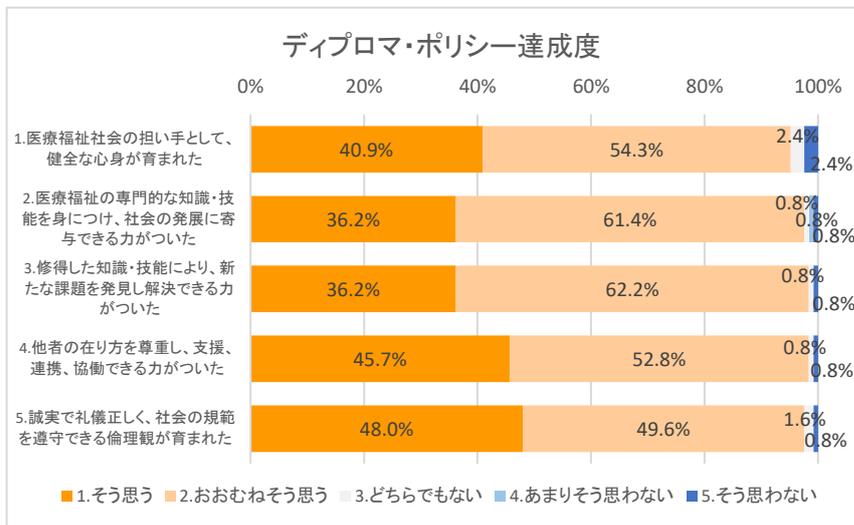
| | 看護学科 | | | | 医療介護福祉学科 | | | | 合計 (内卒業予定者) |
|------------|-------|-------|-------------------|-----|----------|-------|-------------------|-----|----------------|
| | 1 年次生 | 2 年次生 | 3 年次生 (内卒業予定者) | 学科計 | 1 年次生 | 2 年次生 | 3 年次生 (内卒業予定者) | 学科計 | |
| 対象者数： 人 | 88 | 85 | 124 (117) | 297 | 7 | 9 | 14 (13) | 30 | 327 (130) |
| 回答者数： 人 | 81 | 81 | 113 (111) | 275 | 6 | 9 | 14 (13) | 29 | 304 (124) |
| 回答率： % | 92 | 95 | 91 (95) | 93 | 86 | 100 | 100 | 97 | 93 (95) |

II. アンケート結果及び分析

1. 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）及び学修成果の達成度

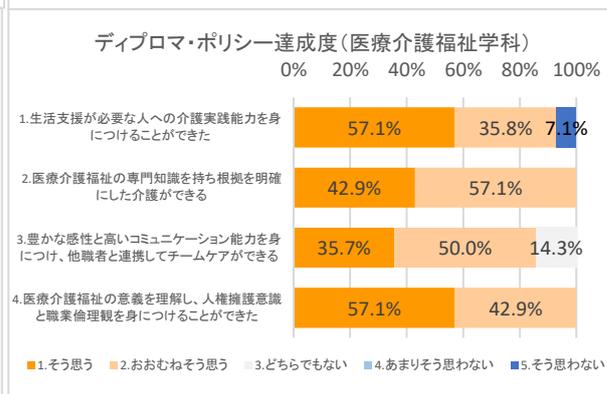
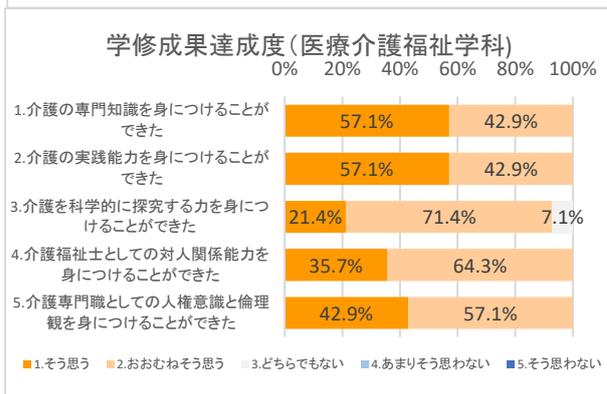
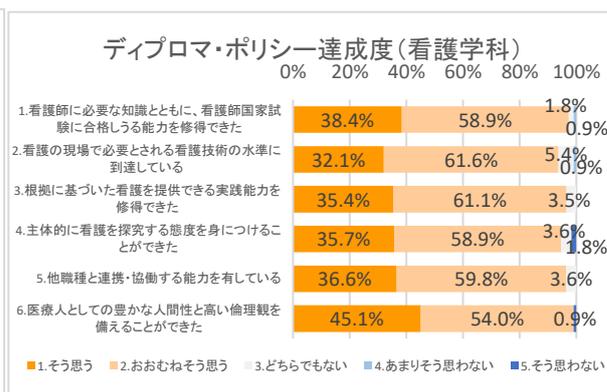
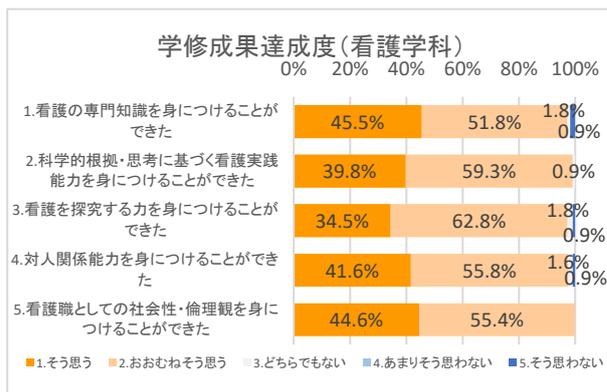
1) 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）（3 年次生のみ）（資料 2 - 1 a）

令和 6（2024）年度は、看護学科が新カリキュラム完成年度を迎えた。ディプロマ・ポリシーの達成度は、構成する 5 つの方針に関して「[そう思う]」「[おおむねそう思う]」と答えた学生は 95%を超えており例年と変わらず高い結果となった。



2) 学科の学修成果及び学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）（3 年次生のみ）（資料 2 - 1 b）

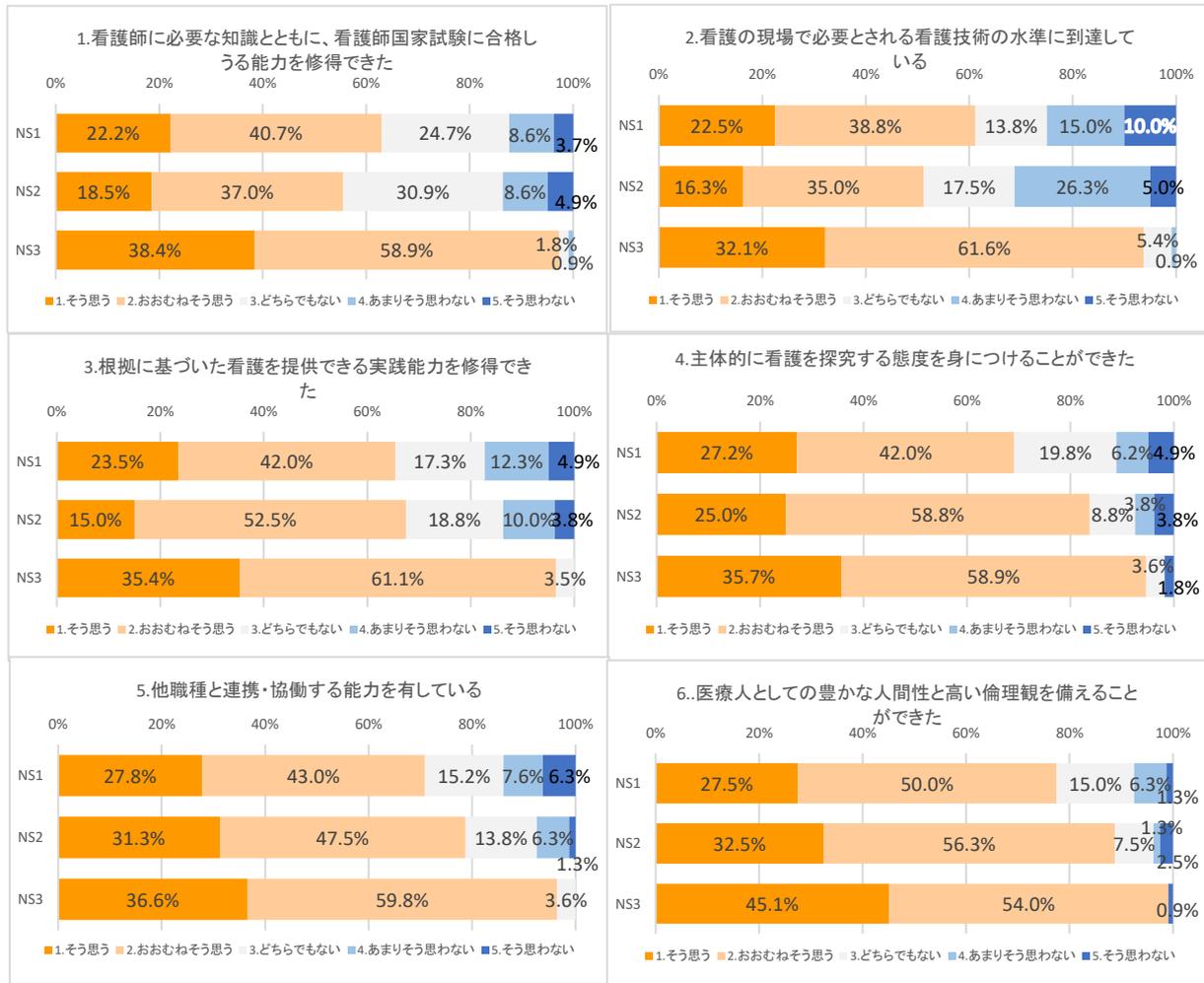
各学科の学修成果及びディプロマ・ポリシー達成度ともに、「[そう思う]」「[おおむねそう思う]」と答えた学生が多く、看護学科も医療介護福祉学科も 85%を超えていた。



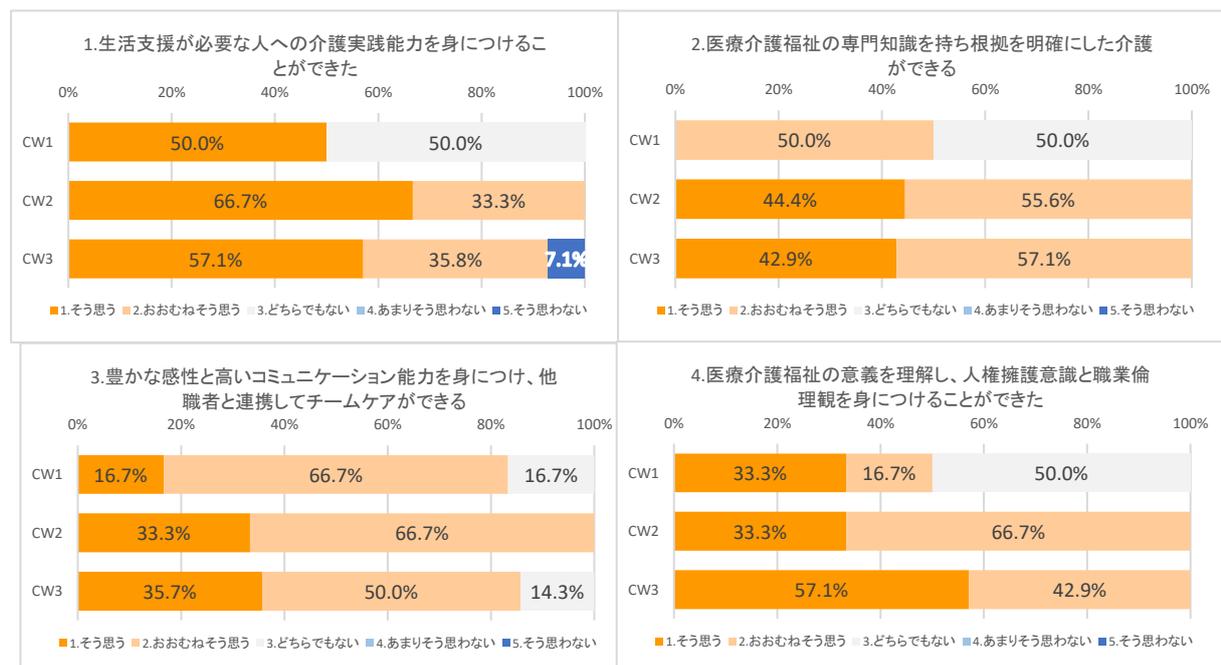
3) 各学年の学科学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)(資料2-1c)

各学科のディプロマ・ポリシー達成度を、学年を追うごとにどのように変化するか調査しているが、1年次、2年次、3年次と学年を上がるごとに、おおむね達成度は上昇する傾向にあった。しかし、看護学科では「1. 看護師に必要な知識とともに、看護師国家試験に合格しうる能力を修得できた」「2. 看護の現場で必要とされる看護技術の水準に到達している」では、2年次生で「[そう思う][おおむねそう思う]と答えた学生の割合が減っており、2年次での講義や演習での難易度を増している現状がうかがえた。医療介護福祉学科3年次生では、「1. 生活支援が必要な人への介護実践能力を身につけることができた」に「[そう思わない]と7%の学生が答えており、3年次での病院などでの専門的な実習での経験が影響していると推察された。

(1) 看護学科



(2) 医療介護福祉学科

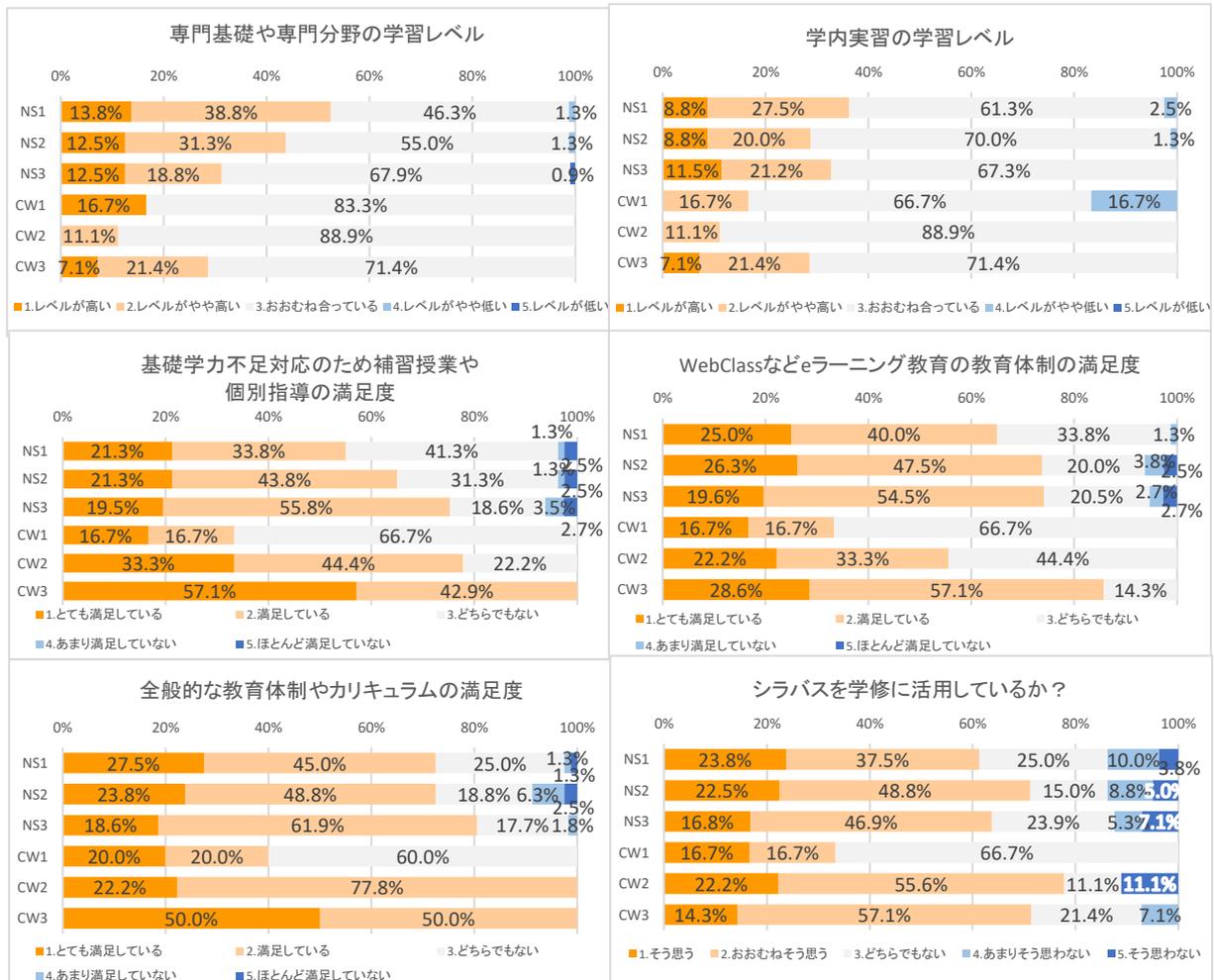


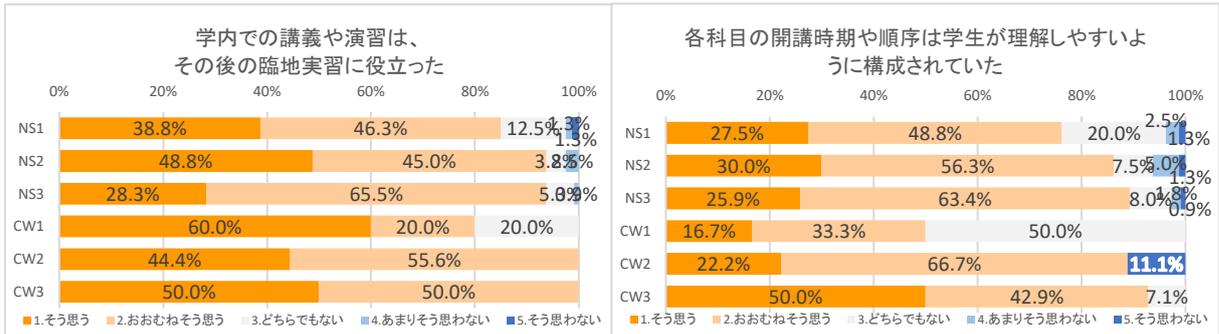
2. 学年別にみた各学科のカリキュラム及び教育体制・支援

1) 学科・学年別の評価 (資料2-1d)

全学年共通項目での教育体制に関しては、「基礎学力不足対応のための補習授業や個別指導の満足度」が、3年次生で高い傾向にあった。「WebClassなどのeラーニング教材の満足度」も「満足している」[おおむね満足している]と答えた学生は看護学科が6～7割、医療介護福祉学科が3～8割と、学科により差があった。シラバスについても、看護学科は6～7割の学生が活用していると答えたが、医療介護福祉学科1年次生は約3割と低かった。学内での講義や演習は8割以上の学生がその後の臨地実習で役立ったと答えた。

教育課程に関する調査項目の一つとして尋ねた「各科目の開講時期や順序は学生が理解しやすいように構成されているか」の質問では、2年次生86～88%、3年次生89%～92%が、理解しやすい構成であると回答していた。1年次生では3年間の初期段階であるため順序性や開講時期の判断が難しいようで、両学科とも開講時期や順序が理解しやすい構成だと思いと答えた割合が最も低かった。



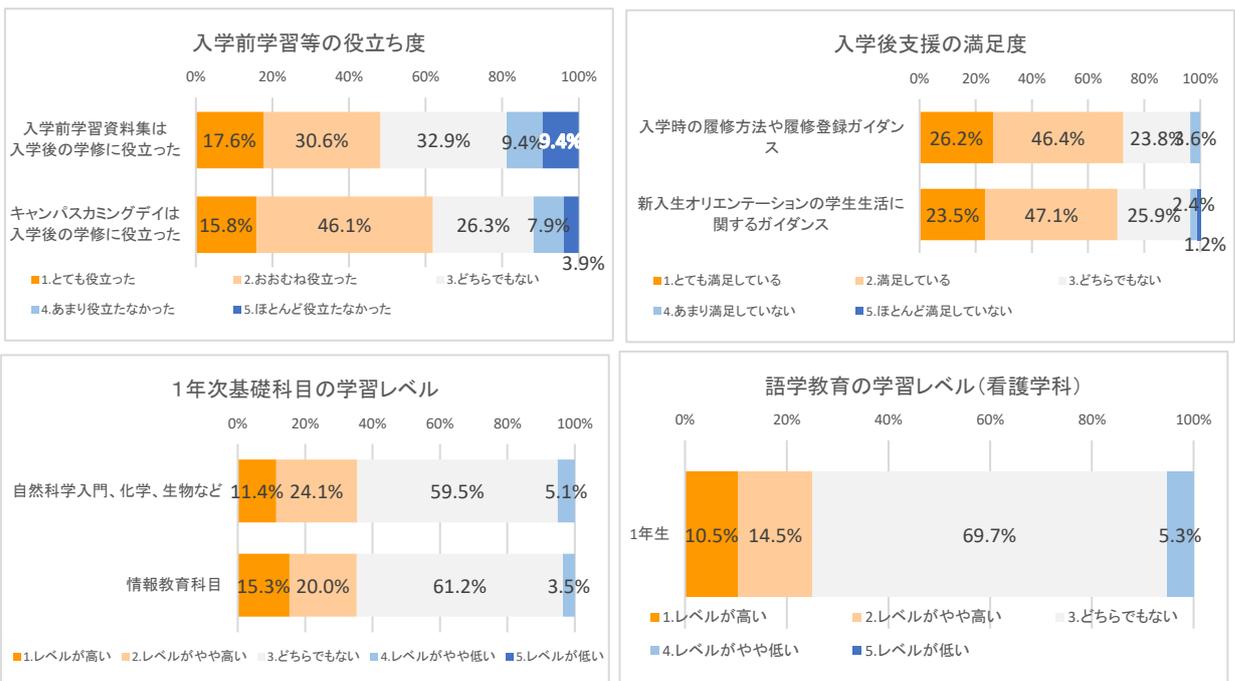


2) 入学前及び入学後の教育支援（1年次生のみ）（資料2-1e）

本学は入試合格者に対して入学前からの学習支援として、入学前学習・キャンパスカミングデイを実施している。1年次終了時にこれらの役立ち度を振り返ってみると、入学前学習資料集は約4割、キャンパスカミングデイは約6割の学生が役立ったと感じているのにとどまった。入学前学習はWeb上の学習もあるため、入学前学習資料集という名称ではなく、入学前学習全体を通しての役立ち度を調査する必要がある。また入学後の教育支援の満足度も、[とても満足している][おおむね満足している]が約7割であった。

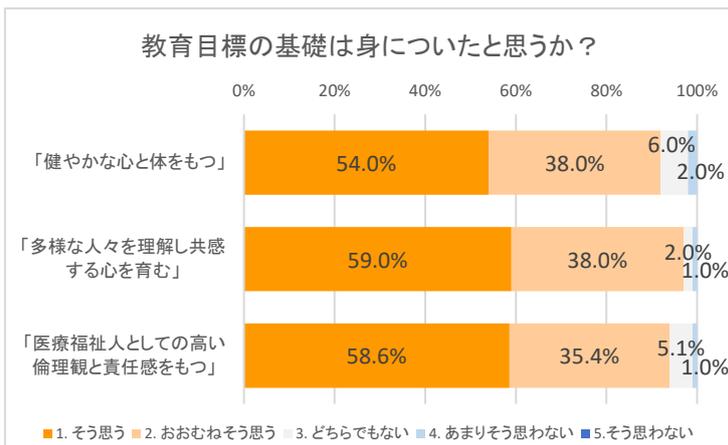
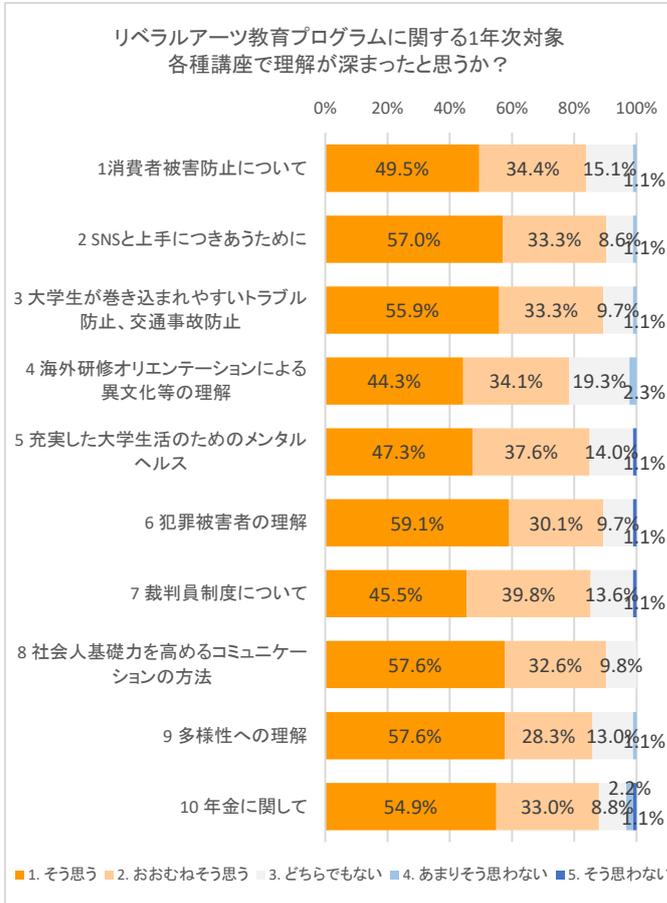
1年次基礎科目のうち、高等学校教育の学習内容が基盤となる「自然科学入門、化学、生物などの科目」「情報教育科目」「語学教育科目」が自分の学習レベルに合っていると答えたのは6～7割の学生であったが、[レベルが高い]、[ややレベルが高い]と答えた学生も2～3割程度いるため、学生間での差が大きいことが予想された。

1年次に履修する専門基礎や専門分野の科目は、前述した学科・学年別評価の図で明らかのように、学科によって差はあるものの、[レベルが高い][レベルがやや高い]と答えた学生が看護学科で約5割と多かった。



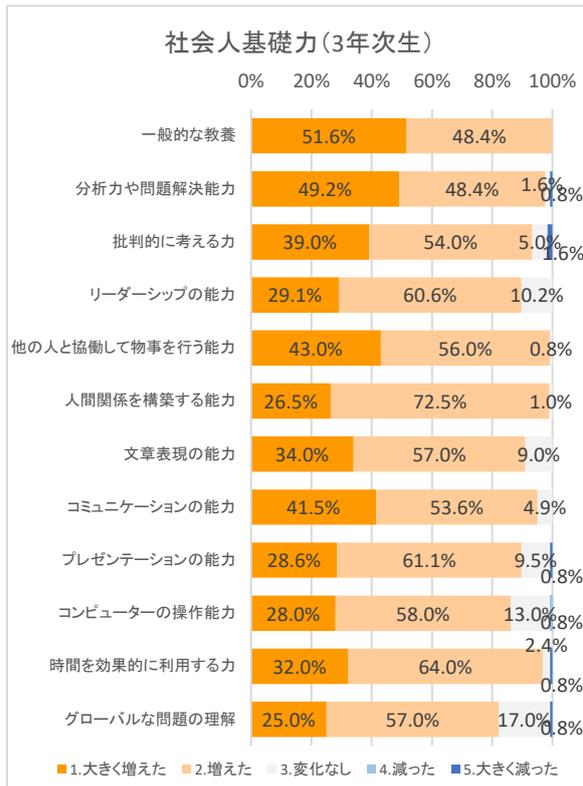
3) リベラルアーツ教育プログラム（1年次生のみ）（資料2-1f）

調査対象者は、看護学科 88 人及び医療介護福祉学科 7 人、計 95 人中 93 人（欠席 2 人）であり、回収率は 100%である。



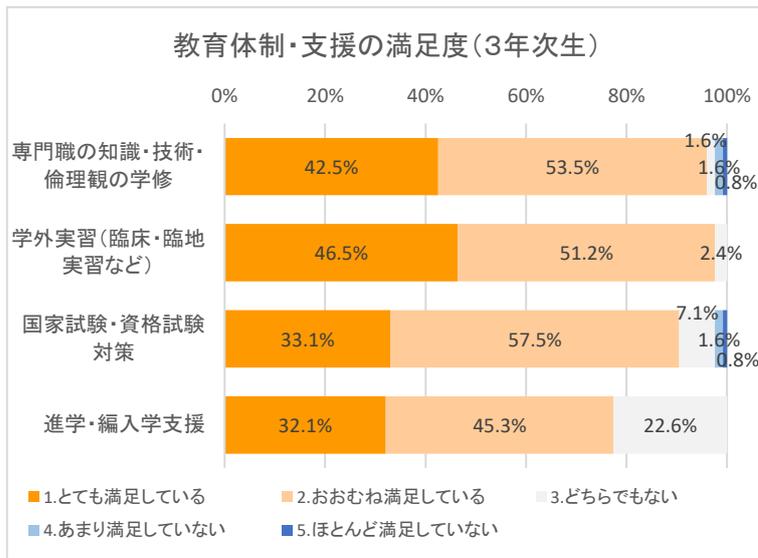
3. 社会人基礎力（3年次生のみ）（資料2－1g）

令和6年（2024）年度は、社会人基礎力を14項目から12項目に減らして調査した。自己評価では、12項目中「一般的な教養」「分析力や問題解決能力」「他の人と協働して物事を行う能力」「人間関係を構築する能力」「コミュニケーションの能力」「時間を効果的に利用する力」の6項目で95%以上の学生が、「大きく増えた」「増えた」と答えた。昨年度60～70%であった「グローバルな問題の理解」「コンピューターの操作能力」も80%を超えた。



4. 教育体制・支援の満足度（3年次生のみ）（資料2－1h）

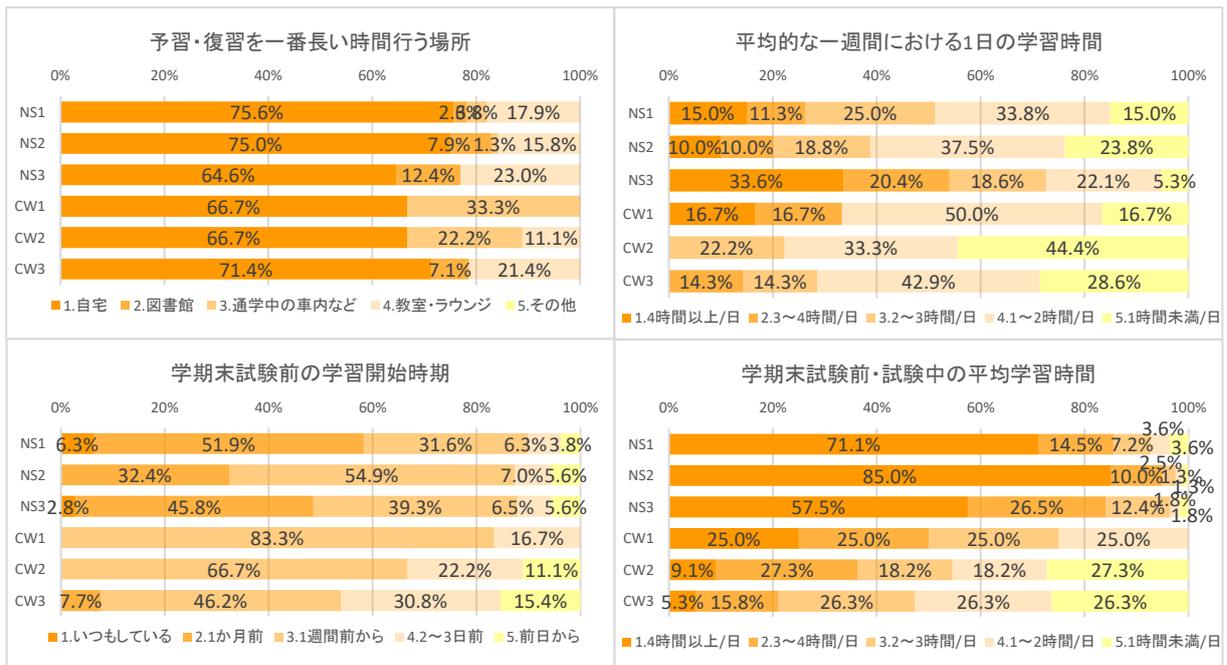
「専門職の知識・技術・倫理観の学修に関する教育体制」「学外実習（臨床・臨地実習など）の教育体制」に対して、「とても満足している」「おおむね満足している」と答えた学生が95%を超えていた。進学・編入学支援の満足度に関しては昨年の37%より高くなっているが77%と他の教育体制より低かった。

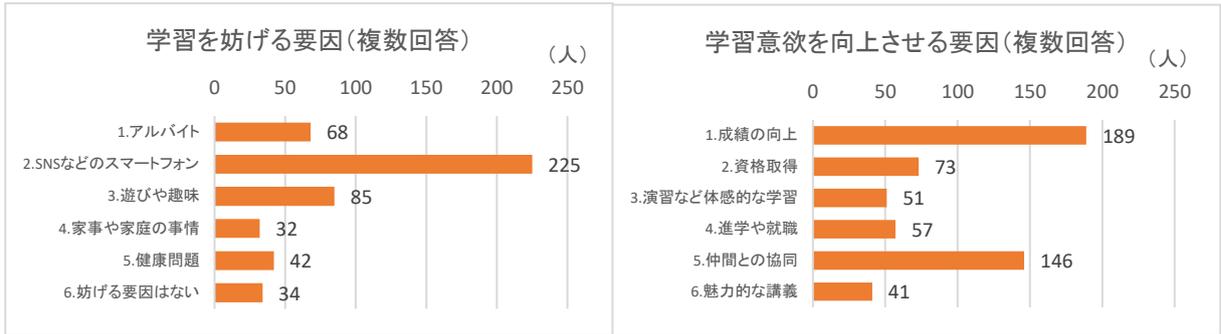


5. 学習時間調査 (資料2-1i)

学習場所の調査では、自宅が最も多いが、図書館と教室・ラウンジを合わせると3年次生では2～3割いるため、学校を学習場所として活用している学生がいた。また、学習時間調査では、平均的な1日の学習時間が1～2時間が最も多く学年により差があることも変わらない。学期末定期試験前1週間から1か月前から学習を開始し、1日に4時間以上学習している学生も学科によっては多く存在する。

学習意欲を向上させる要因は、「成績の向上」「仲間との協同」が最も多かった。また、学習意欲を妨げる要因としては「SNSなどのスマートフォン」が最も多く、次に「遊びや趣味」「アルバイト」が多かった。妨げとなる要因に対して生活習慣を見直す支援等が必要である。





資料 2 - 2 授業科目分野別 GPCA

| | 令和 3 (2021) 年度 | 令和 4 (2022) 年度 | 令和 5 (2023) 年度 | 令和 6 (2024) 年度 |
|--------------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 基礎分野 (基礎科目全体) | 2.97 | 3.12 | 3.02 | 3.07 |
| 看護学科 専門基礎分野 | 2.63 | 2.69 | 2.29 | 2.52 |
| 看護学科 専門分野 | 1.91 | 1.87 | 2.05 | 2.13 |
| 医療介護福祉学科 専門基礎分野 | 2.83 | 2.64 | 2.39 | 2.66 |
| 医療介護福祉学科 専門分野 | 2.68 | 2.64 | 2.57 | 2.67 |
| 医療介護福祉学科 医療系分野 | | | 2.71 | 2.41 |

資料 2 - 3 学生による授業評価結果 (令和 6 (2024) 年度)

| 大項目 | 質問項目 | | 前期 | 後期 |
|-----------------|------|---|-----|-----|
| I 学生の自己評価 | 1) | 私は、シラバスの内容 (到達目標、授業内容、評価方法) を理解している。 | 4.5 | 4.5 |
| | 2) | 私は、この授業中、マナー (携帯電話、私語、いねむり、遅刻、早退をしない) を守った。 | 4.6 | 4.6 |
| | 3) | 私は、授業に意欲的に取り組んだ。 | 4.6 | 4.6 |
| | 4) | 私は、授業外学習 (予習、復習を含む) をした。 | 4.1 | 4.0 |
| II 授業の基礎的な事項 | 5) | この授業は、テーマや到達目標、内容、評価方法等を予め明確に示された。 | 4.6 | 4.5 |
| | 6) | この授業は、シラバス (到達目標、授業内容) に基づいて行われた。 | 4.6 | 4.5 |
| | 7) | この授業は、時間割に沿って授業を行われた (休講、変更をあまりしない)。 | 4.6 | 4.5 |
| | 8) | この授業は、学生が授業に集中できる環境を整える努力をしていた。 | 4.6 | 4.5 |
| III 学習の推進に関する事項 | 9) | この授業は、学生が興味を持てるよう授業内容や方法を工夫されていた。 | 4.6 | 4.5 |
| | 10) | この授業は、板書や配付資料、視聴覚機器等の教育器材の使用によって理解が深まった。 | 4.6 | 4.5 |
| | 11) | この授業は、適切な進度で行われた。 | 4.6 | 4.5 |
| IV 総合評価 | 12) | 私は、シラバスで求められた到達目標をほぼ達成できた。 | 4.4 | 4.4 |
| | 13) | 私は、総合的にこの授業に満足している。 | 4.6 | 4.5 |

資料2-4 令和6(2024)年度 国家試験結果

| | 受験者数 | | 合格者数 | 合格率 (%) | 全国合格率 (%) |
|---------------------|------|-----|------|---------|-----------|
| | 新卒者 | 既卒者 | | | |
| 看護学科 (看護師) | 新卒者 | 117 | 114 | 97.4 | 90.1 |
| | 既卒者 | 10 | 9 | 90.0 | |
| | 計 | 127 | 123 | 96.9 | |
| 医療介護福祉学科 (介護福祉士) | 新卒者 | 13 | 13 | 100 | 78.3 |
| | 既卒者 | 1 | 1 | 100 | |
| | 計 | 14 | 14 | 100 | |

資料3-1 令和6(2024)年度 学生在籍状況

| | 入学定員 | 収容定員 | 入学者数 | 在籍者数 | 留学生数 (内数) | 留年者数 (内数) | 収容定員 充足率 | 退学・ 除籍者数 | 中退率 |
|----------|------|------|------|------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------|
| 看護学科 | 120 | 360 | 90 | 310 | 0 | 21 | 86.11% | 8 | 2.58% |
| 医療介護福祉学科 | 50 | 150 | 7 | 31 | 0 | 2 | 20.67% | 1 | 3.23% |
| 合計 | 170 | 510 | 97 | 341 | 0 | 23 | 66.86% | 9 | 2.64% |

※在籍者数、留学生数、留年者数、収容定員充足率は令和6年5月1日現在

※中退率は令和6年5月1日現在の在籍者数で算出

資料3-2 在籍者内訳(令和6(2024)年5月1日現在)

| | | 1年 | | | 2年 | | | 3年 | | | 計 | | |
|---------------------------------|------|----|----|----|----|----|-----|----|-----|-----|----|-----|-----|
| | | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 看護学科 入学定員 120 収容定員 360 | 在籍者 | 11 | 79 | 90 | 7 | 83 | 90 | 5 | 125 | 130 | 23 | 287 | 310 |
| | (休学) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 3 | 0 | 3 | 3 |
| 医療介護福祉学科 入学定員 50 収容定員 150 | 在籍者 | 0 | 7 | 7 | 2 | 8 | 10 | 2 | 12 | 14 | 4 | 27 | 31 |
| | (休学) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 1 | 1 |
| 合計 入学定員 170 収容定員 510 | 在籍者 | 11 | 86 | 97 | 9 | 91 | 100 | 7 | 137 | 144 | 27 | 314 | 341 |
| | (休学) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 4 | 0 | 4 | 4 |

資料3-3 令和7(2025)年度 学科別入学試験結果概要

| | 区分 | 看護学科 | | | | 医療介護福祉学科 | | | | 合計 | | | |
|-----------|--------|------|-----|-------------|-----------|----------|-----|-------------|-----------|-----|-----|-------------|-----------|
| | | 公募 | 有資格 | 探究学習 利用型 | 大学 体験型 | 公募 | 有資格 | 探究学習 利用型 | 大学 体験型 | 公募 | 有資格 | 探究学習 利用型 | 大学 体験型 |
| 総合型選抜 | 募集人員 | 53 | | | | 25 | | | | 78 | | | |
| | 志願者数 | 8 | 0 | 0 | 35 | 1 | 0 | 0 | 1 | 9 | 0 | 0 | 36 |
| | 合格者数 | 8 | 0 | 0 | 34 | 1 | 0 | 0 | 1 | 9 | 0 | 0 | 35 |
| | 入学予定者数 | 8 | 0 | 0 | 34 | 1 | 0 | 0 | 1 | 9 | 0 | 0 | 35 |
| | 入学予定者数 | 8 | 0 | 0 | 34 | 1 | 0 | 0 | 1 | 9 | 0 | 0 | 35 |
| 学校推薦型選抜前期 | 区分 | 公募 | 指定校 | 大学体験型 | | 公募 | 指定校 | 大学体験型 | | 公募 | 指定校 | 大学体験型 | |
| | 募集人員 | 30 | | | | 15 | | | | 45 | | | |
| | 志願者数 | 0 | 13 | 3 | | 0 | 2 | 0 | | 0 | 15 | 3 | |
| | 合格者数 | 0 | 13 | 3 | | 0 | 2 | 0 | | 0 | 15 | 3 | |
| | 入学予定者数 | 0 | 13 | 3 | | 0 | 2 | 0 | | 0 | 15 | 3 | |
| 学校推薦型選抜後期 | 区分 | A日程 | | B日程 | | A日程 | | B日程 | | A日程 | | B日程 | |
| | 募集人員 | 8 | | 7 | | 2 | | 2 | | 10 | | 9 | |
| | 志願者数 | 30 | | 24 | | 0 | | 0 | | 30 | | 24 | |
| | 合格者数 | 29 | | 21 | | 0 | | 0 | | 29 | | 21 | |
| | 入学予定者数 | 8 | | 2 | | 0 | | 0 | | 8 | | 2 | |
| 一般選抜前期 | 区分 | A日程 | | B日程 | | A日程 | | B日程 | | A日程 | | B日程 | |
| | 募集人員 | 11 | | 9 | | 2 | | 2 | | 13 | | 11 | |
| | 志願者数 | 33 | | 27 | | 0 | | 0 | | 33 | | 27 | |
| | 合格者数 | 31 | | 26 | | 0 | | 0 | | 31 | | 26 | |
| | 入学予定者数 | 9 | | 1 | | 0 | | 0 | | 9 | | 1 | |
| 一般選抜後期 | 募集人員 | 2 | | | | 2 | | | | 4 | | | |
| | 志願者数 | 9 | | | | 0 | | | | 9 | | | |
| | 合格者数 | 9 | | | | 0 | | | | 9 | | | |
| | 入学予定者数 | 2 | | | | 0 | | | | 2 | | | |
| 入学定員 | | 120 | | | | 50 | | | | 170 | | | |
| 入学予定者数 | | 80 | | | | 4 | | | | 84 | | | |

資料3-4 出身都道府県別在籍者数及び入学者数（令和6（2024）年5月1日現在）

| 出身高校県名 | 在籍者数 | 内入学者数 | | |
|--------|-------------|------------|-----------|------------|
| | | 看護学科 | 医療介護福祉学科 | 合計 |
| 東京都 | 1 | 1 | | 1 |
| 兵庫県 | 13 | 1 | | 1 |
| 鳥取県 | 7 | 2 | | 2 |
| 島根県 | 8 | 1 | 1 | 2 |
| 岡山県 | 212 (62.2%) | 53 (58.9%) | 3 (42.9%) | 56 (57.7%) |
| 広島県 | 56 | 12 | 2 | 14 |
| 山口県 | 12 | 5 | 1 | 6 |
| 徳島県 | 1 | 1 | | 1 |
| 香川県 | 12 | 9 | | 9 |
| 愛媛県 | 12 | 3 | | 3 |
| 高知県 | 2 | | | |
| 福岡県 | 1 | 1 | | 1 |
| 宮崎県 | 1 | 1 | | 1 |
| 鹿児島県 | 2 | | | |
| 沖縄県 | 1 | | | |
| 合計 | 341 | 90 | 7 | 97 |

資料3-5 令和6（2024）年度 オープンキャンパス等開催日

| | 開催日 |
|-----------------------|---|
| 本学単独オープンキャンパス | 5月11日（土）、8月17日（土） |
| 3校合同オープンキャンパス | 6月16日（日）、7月21日（日）、3月23日（日） |
| 医療福祉大学合同キャンパスショーケース | 10月19日（土）・20日（日） |
| いってみよ！ 放課後キャンパスツアー | 4月17日（水）・19日（金）・24日（水）・26日（金） 5月1日（水）・20日（月）・24日（金）・29日（水）・ 31日（金） 6月5日（水）・7日（金）・10日（月）・28日（金） 7月10日（水）・17日（水） 8月21日（水）・28日（水） 9月11日（水）・25日（水） 10月9日（水）・30日（水） 11月13日（水）・20日（水） |

資料4-1 卒業生の進路状況（令和7（2025）年5月1日現在）

| 区分 学科 | 卒業生数 | 就職（昨年同期） | | | 学園関係 就職者数 | 求人 件数 | 進学 | | その他 |
|--------------|------|----------|------|--------------|--------------|----------|------|------|-----|
| | | 希望者数 | 就職者数 | 就職率 | | | 希望者数 | 進学者数 | |
| 看護学科 | 117 | 115 | 115 | 100 (100) | 53 | 357 | 0 | 0 | 2 |
| 医療介護 福祉学科 | 13 | 13 | 13 | 100 (100) | 3 | 223 | 0 | 0 | 0 |

備考 『その他』は就職・進学とも希望のない者、契約社員等一時的な仕事に就いた者等の数を含む。

資料5-1 専任教員数（令和6（2024）年5月1日現在）

| 区 分 学 科 | 基幹教員 | | | | | その他 の教員 | 設置基準で定める 基幹教員数 | |
|------------|------|-----|-----|-----|----|------------|-------------------|---|
| | 教 授 | 准教授 | 講 師 | 助 教 | 計 | | イ | ロ |
| 看 護 学 科 | 7 | 7 | 8 | 9 | 31 | 1 | 12 | 4 |
| 医療介護福祉学科 | 4 | 0 | 2 | 4 | 10 | 0 | 10 | |
| 合 計 | 11 | 7 | 10 | 13 | 41 | 1 | 26 | |

イ 学科の種類及び規模に応じ定める基幹教員数

ロ 短期大学全体の入学定員に応じ定める基幹教員数

資料5-2 公的研究費（競争的資金等）の獲得件数（令和6（2024）年度）

| 区 分 学 科 | 科学研究費 （代表） | | | 科学研究費 （分担） | その他 | | |
|------------|---------------|----|----|---------------|-----|----|----|
| | 新規 | | 継続 | | 新規 | | 継続 |
| | 申請 | 採択 | | 新規・継続 | 申請 | 採択 | |
| 看 護 学 科 | 1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 医療介護福祉学科 | 1 | 0 | 1 | 4 | 0 | 0 | 0 |
| 合 計 | 2 | 0 | 2 | 6 | 0 | 0 | 0 |

資料5-3 教員研究費及び学会旅費の執行状況（令和6（2024）年度）

（単位：円）

| 区 分 学 科 | 教員数 （人） | 教員研究費 | 教員研究費内訳 | | | 学会旅費 | 合計 |
|------------|------------|-----------|---------|--------|-----------|-----------|-----------|
| | | | 機器・備品等 | 図書費 | 消耗品他 | | |
| 看 護 学 科 | 32 | 1,446,123 | 0 | 41,184 | 1,404,939 | 1,854,997 | 3,301,120 |
| 医療介護福祉学科 | 10 | 61,292 | 0 | 8,712 | 52,580 | 1,192,520 | 1,253,812 |
| 合 計 | 42 | 1,507,415 | 0 | 49,896 | 1,457,519 | 3,047,517 | 4,554,932 |

*図書費は、資産としての図書購入費のみ計上

資料7-1 令和6年度(2024)年度FD・SD研修会実施結果

1. 本学開催のFD・SD研修会

| 研修会名 | 開催日 | 研修内容 | 講師 |
|----------|-----------|---------------------------------|--------------------------|
| FD・SD研修会 | 5月10日(金) | e-テキストの使い方 | 医学書院 藤巻 克彰 |
| FD・SD研修会 | 5月30日(木) | 高等学校への広報についての研修会 | 教務部長 松本 明美 事務長 田中 尚 |
| FD・SD研修会 | 9月27日(金) | 第1回データ管理の基本 | 看護学科 重田 崇之 |
| FD・SD研修会 | 12月25日(水) | 2025年度シラバス作成について 第2回データ管理の基本 | 教務部長 松本 明美 看護学科 重田 崇之 |

2. 医療福祉大学主催 (*医療福祉大学・医療短期大学共催)

| 研修会名 | 開催日 | 研修内容 | 講師 |
|----------------------------|-------------------|---|---|
| SD研修会 (教職員の資質向上に関する研修会) | 5月17日(金) | 学生募集におけるブランディングの重要性 | リクルート進学総研所 長 カレッジマネジメント編集長 小林 浩 |
| FD研修会 (教育研究に関する研修会) | 8月20日(火)～ 動画視聴 | ①「発達障害学生の理解と支援－TEACCHから学ぶ－」 ②「修学に関する合理的配慮の理解」 | ①医療福祉学科 准教授 諏訪 利明 ②診療放射線技術学科 教授 矢納 陽 |
| SD研修会 | 9月6日(金)～ 動画視聴 | ハラスメント防止に向けての研修会「職場におけるハラスメントの実態とその防止について」 | 森脇法律事務所 弁護士 森脇 正 |
| *授業研究カンファレンス | 2月26日(水) | ①「自由進度学習を取り入れた英語指導」 ②WebClassとMicrosoft Accessの活用による構造的ライティングのトレーニング－医療秘書学科での日々の講義とイベント時の活用をもとに－ | ①総合教育センター 講師 佐藤 大介 ②医療秘書学科 講師 筑後 一郎 |

3. 新任教員SD研修会

| | 開催日 | 内 容 | 講師他 |
|---|--------------------|--|--|
| 1 | 4月1日(月) | 大学の理念・教育理念 学生支援と評価 学則および履修規程 事務手続き他 | 副学長 新見 明子 教務部長 松本 明美 事務室係長 大戸 知子 |
| 2 | 5月13日(月) | 教員活動評価(目標管理)に関して | 副学長 新見 明子 |
| 3 | 6月13日(木) | FD・SD研修に関して 授業参観の必要性とその方法 | 教務部長 松本 明美 教務部副部長 梶本 朋子 |
| 4 | 7月4日(木) | 実習指導の困りごと | 看護学科学科長 岡田 みどり 看護学科 三宅 映子 |
| 5 | 9月24日(火) | 学生面接時のポイント 困った学生の対応の仕方 | 学生部副部長 黒田 裕子 |
| 6 | 9月1日(日) ～30日(火) | 障がい者に対する合理的配慮の理解 | 副学長 新見 明子 DVD視聴 |

| | | | |
|---|----------|--|-----------------------|
| 7 | 1月10日(金) | 教員評価に関して 学生の成績評価と授業評価に関して | 医療介護福祉学科 学科長 山田 順子 |
| 8 | 3月14日(金) | 1年間の教育研究活動についての総括 ティーチングポートフォリオについて | 教務部長 松本 明美 |

資料7-2 令和5(2023)年度 教員活動評価結果(二次評価結果)

| 評価 | 教員数 |
|----|-----|
| S | 1 |
| A | 17 |
| B | 15 |
| C | 0 |
| D | 0 |

特任教員及び長期休暇教員等は除く

S: 極めて高い活動状況である

A: 高い活動状況である

B: 普通の活動状況である

C: 期待水準を下回る活動状況である

D: 期待水準を大幅に下回る活動状況である

資料7-3 令和6（2024）年度学生生活満足度調査及び生活実態調査結果

I. 調査時期、対象者数

1. 実施期間：令和7年1月～2月（WebClassでのアンケート）
2. 対象者数・回答者数及び回答率

対象者：令和6年度在学学生（休学者を除く令和7年1月1日に在学している者）

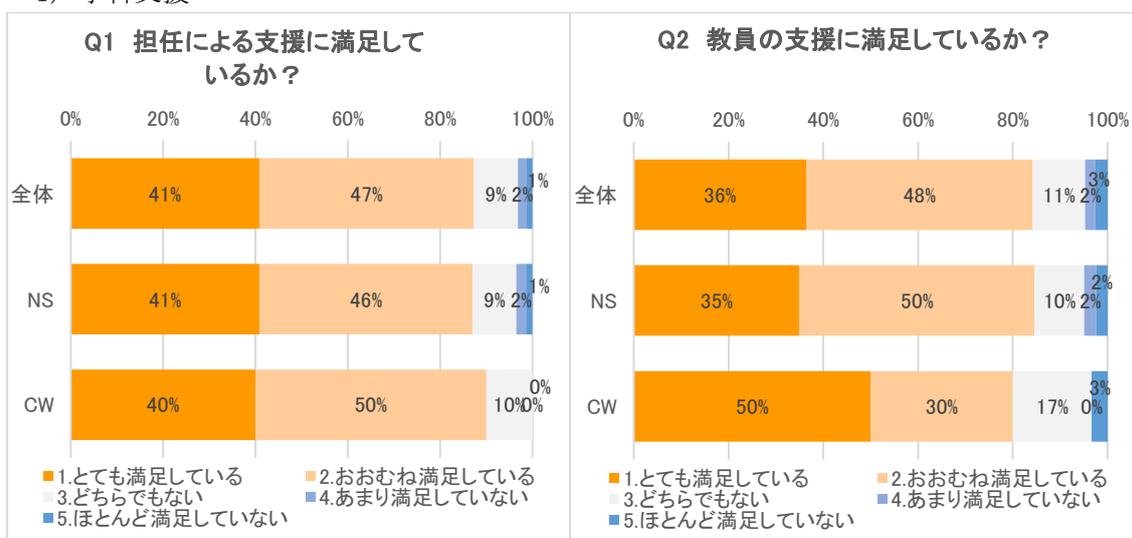
表中の略称について
 NS：看護学科
 CW：医療介護福祉学科

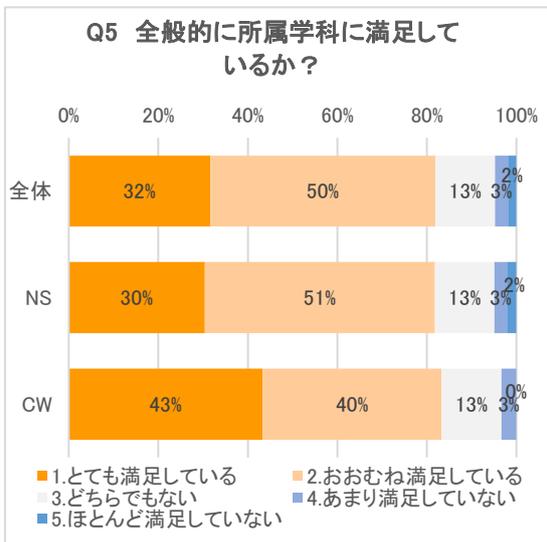
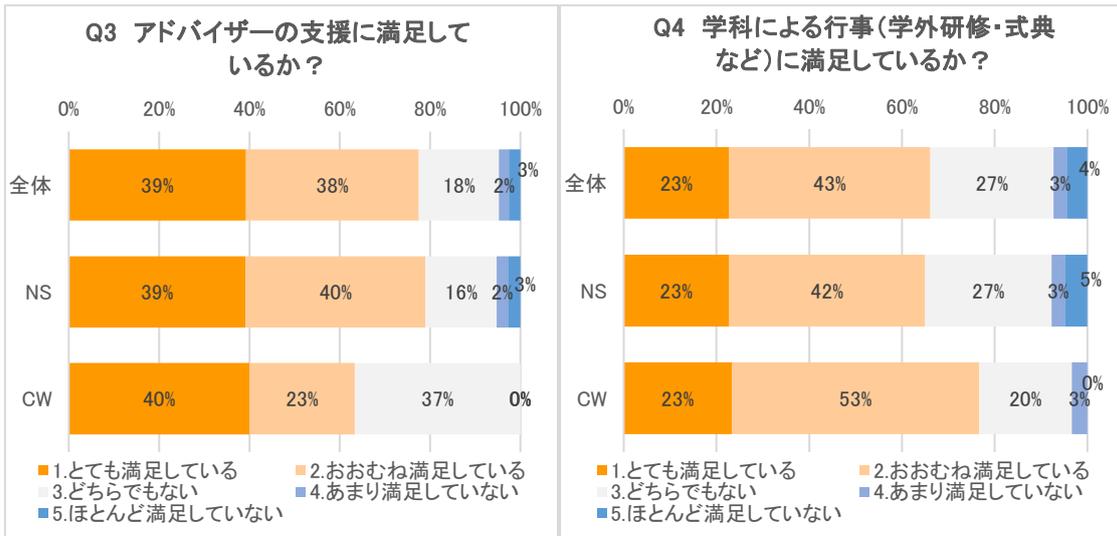
| | 看護学科 | | | | 医療介護福祉学科 | | | | 合計 (内卒業予定者) |
|------------|------|------|------------------|------|----------|------|------------------|-----|----------------|
| | 1年次生 | 2年次生 | 3年次生 (内卒業予定者) | 学科計 | 1年次生 | 2年次生 | 3年次生 (内卒業予定者) | 学科計 | |
| 対象者数： 人 | 88 | 85 | 124 (117) | 297 | 7 | 9 | 14 (13) | 30 | 327 (130) |
| 回答者数： 人 | 88 | 83 | 115 (115) | 286 | 7 | 9 | 14 (13) | 30 | 316 (128) |
| 回答率： % | 100 | 97.6 | 92.7 (98.3) | 96.3 | 100 | 100 | 100 (100) | 100 | 96.6 (98.5) |

II. アンケート結果

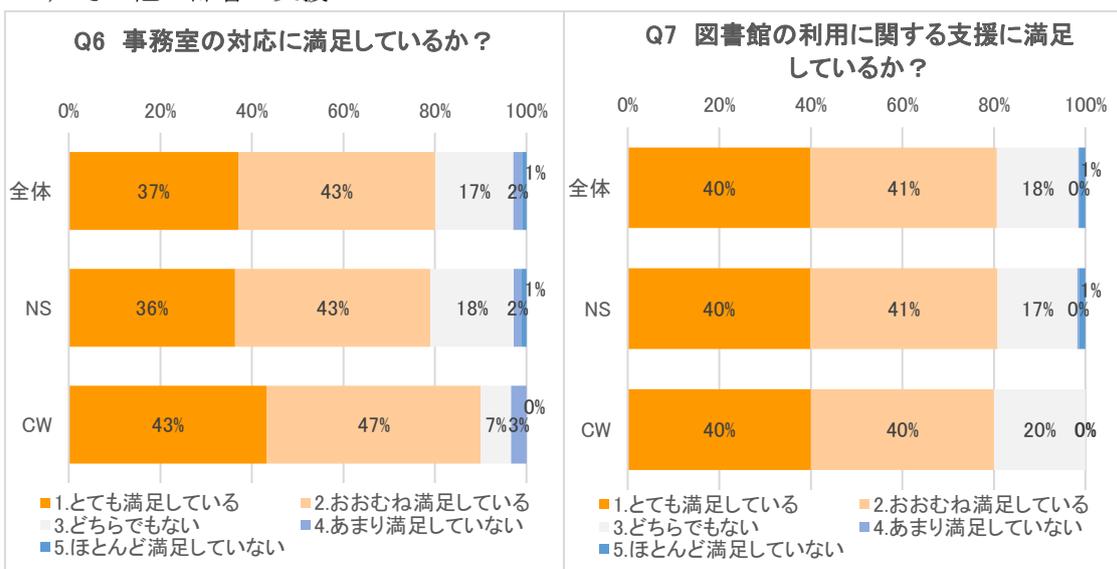
1. 大学生生活満足度（有効回答者数 NS282～286 CW30）

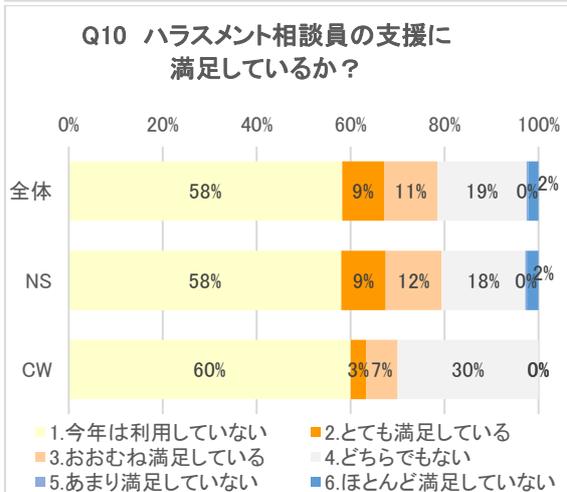
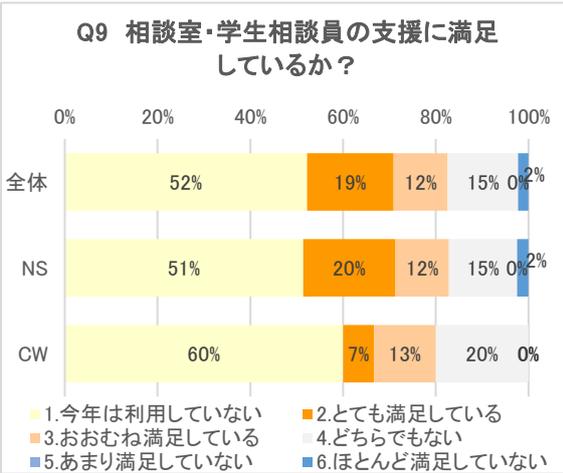
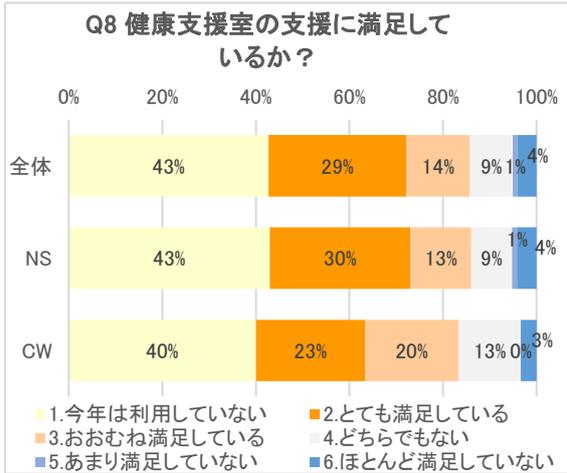
1) 学科支援



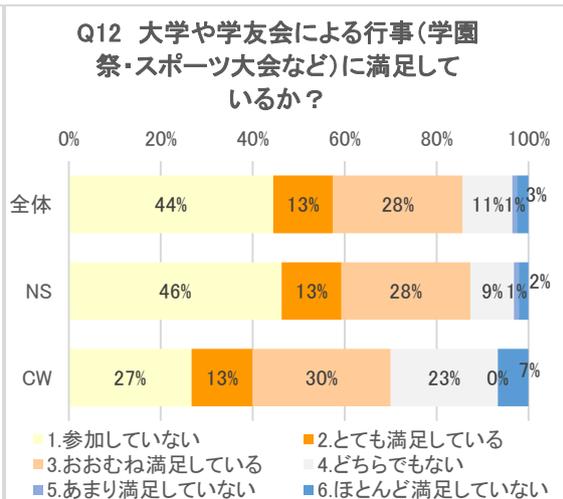
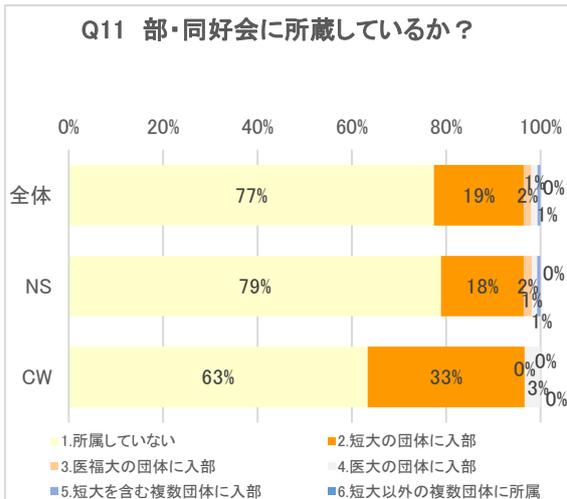


2) その他の部署の支援

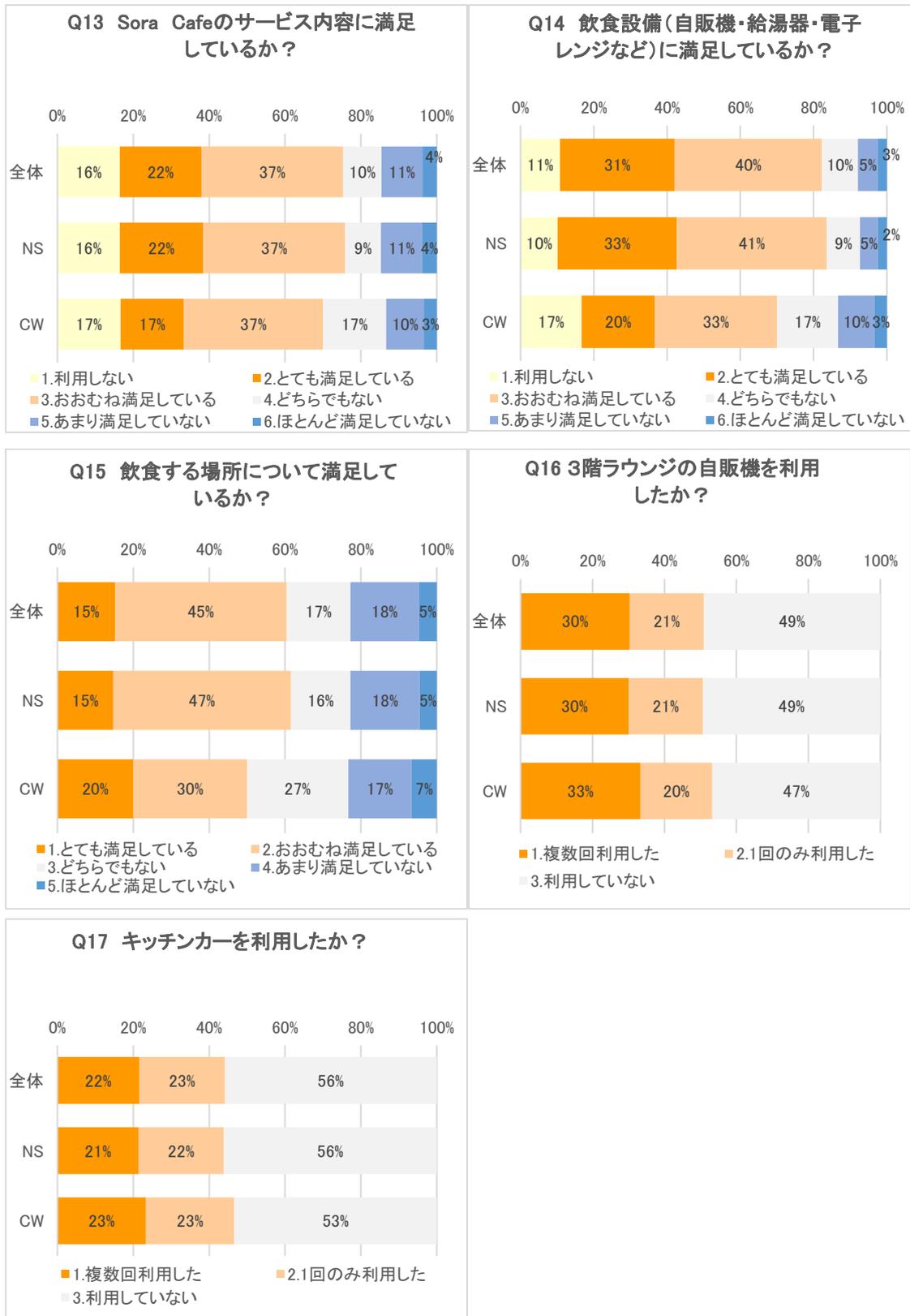




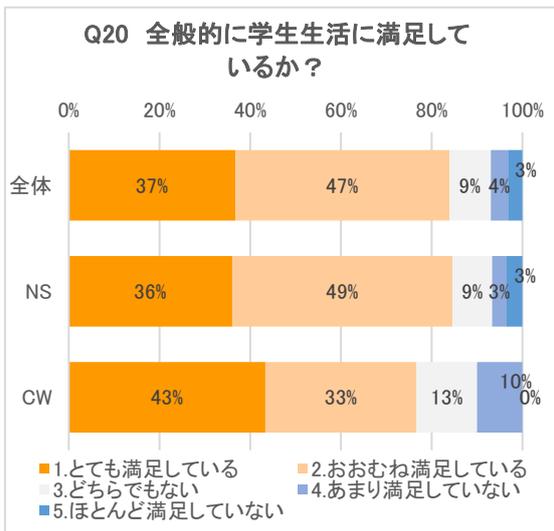
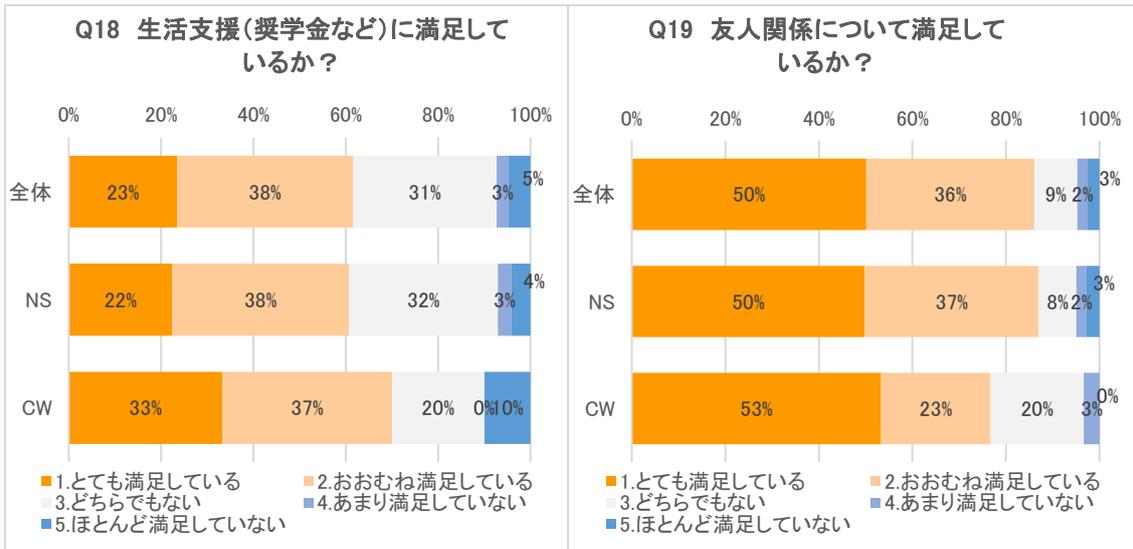
3) 学友会（部・同好会）の活動について



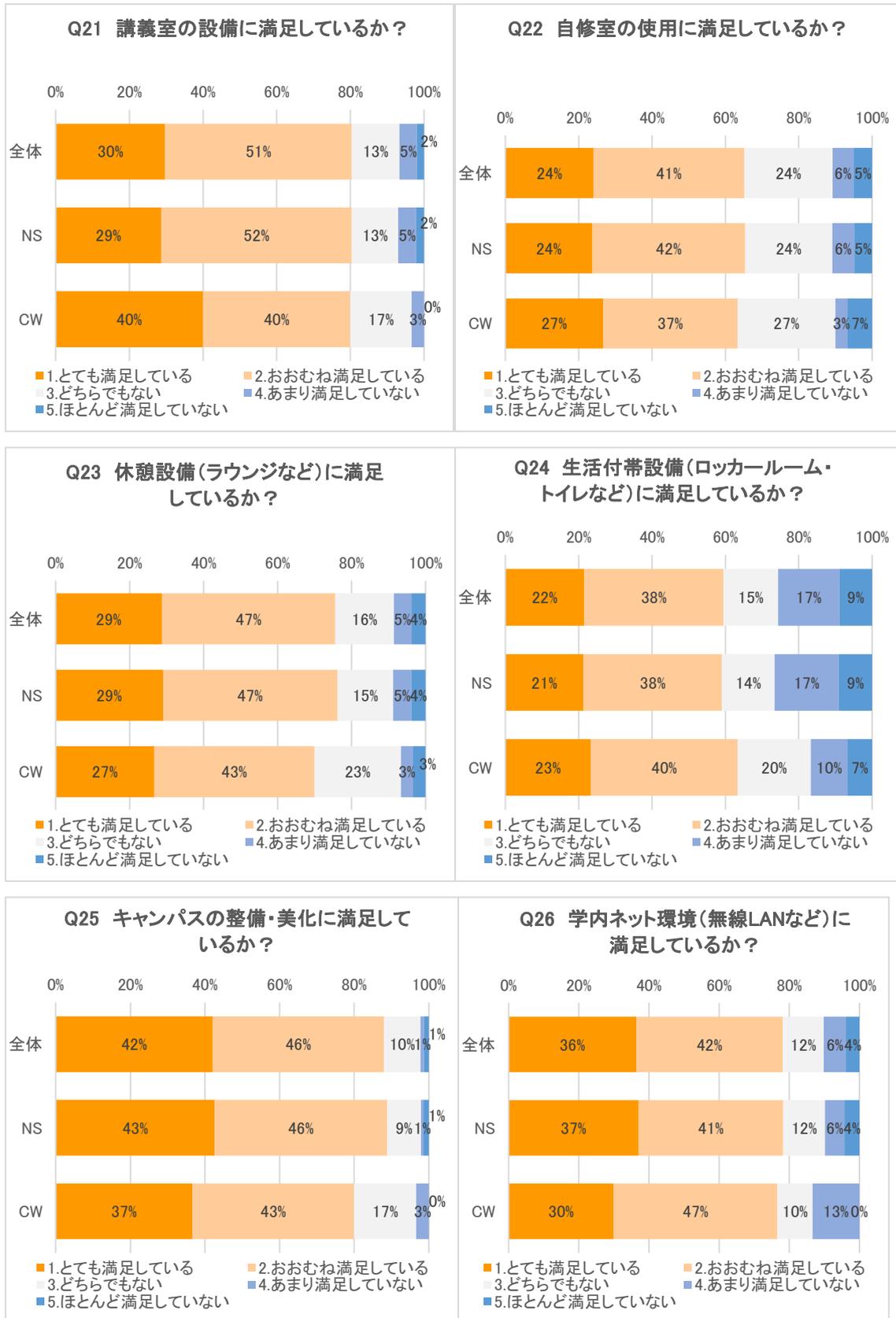
4) 飲食施設について

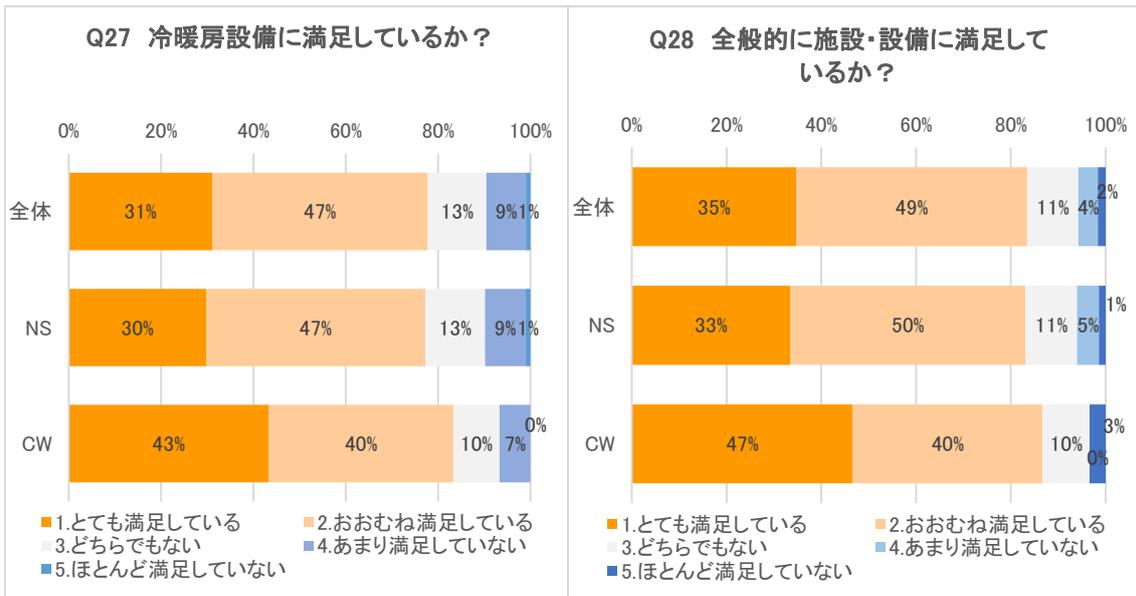


5) その他

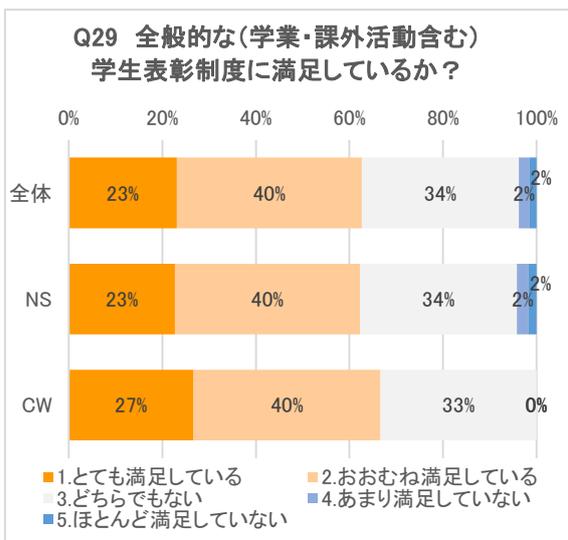


6) 施設・設備について





7) その他



8) 自由記述 (Q30～32)

①岡山キャンパスでの学生生活についての要望・意見

- ・ 個人ロッカーを広くしてほしい
- ・ 学食の種類を増やしてほしい
- ・ 自動販売機等の値段を下げてほしい
- ・ Sora Cafe と自動販売機で現金が使用できるようにしてほしい
- ・ Sora Cafe の営業時間を延長してほしい
- ・ 場所によって冷暖房の調整が必要
- ・ 制服をやめてほしい
- ・ 食堂のご飯の種類の追加と学校に居る間利用可能なコンビニが欲しい

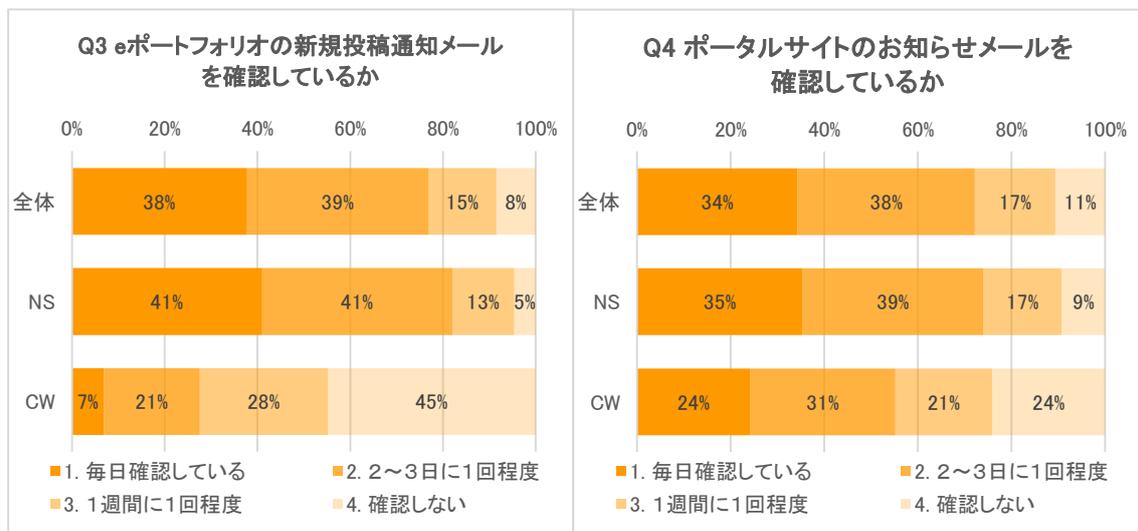
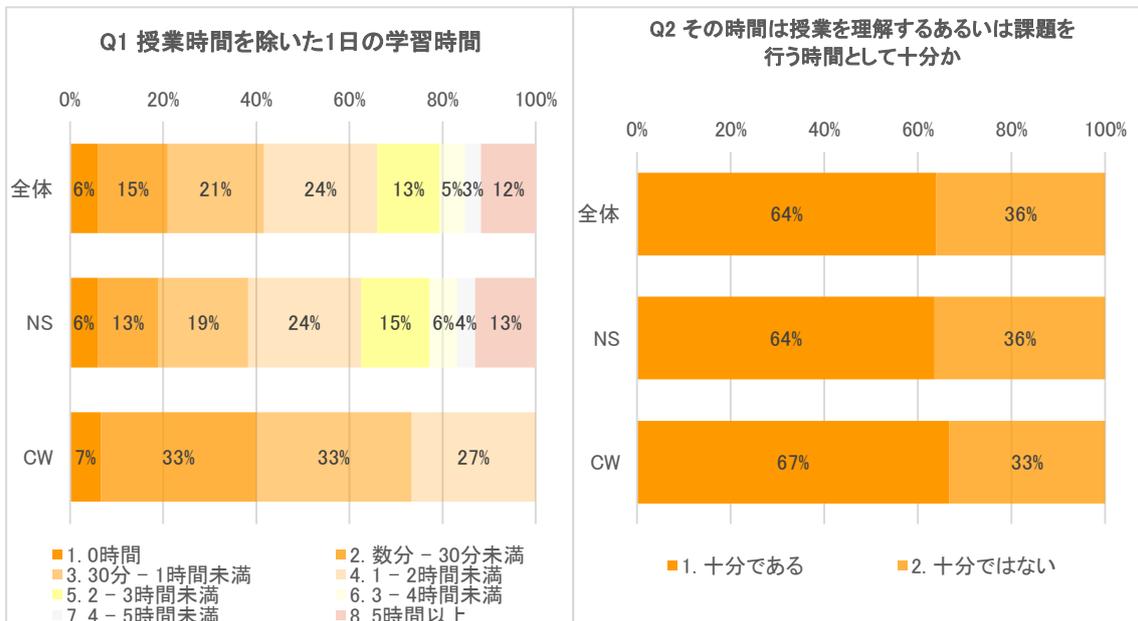
②松島キャンパスでの学生生活についての要望・意見

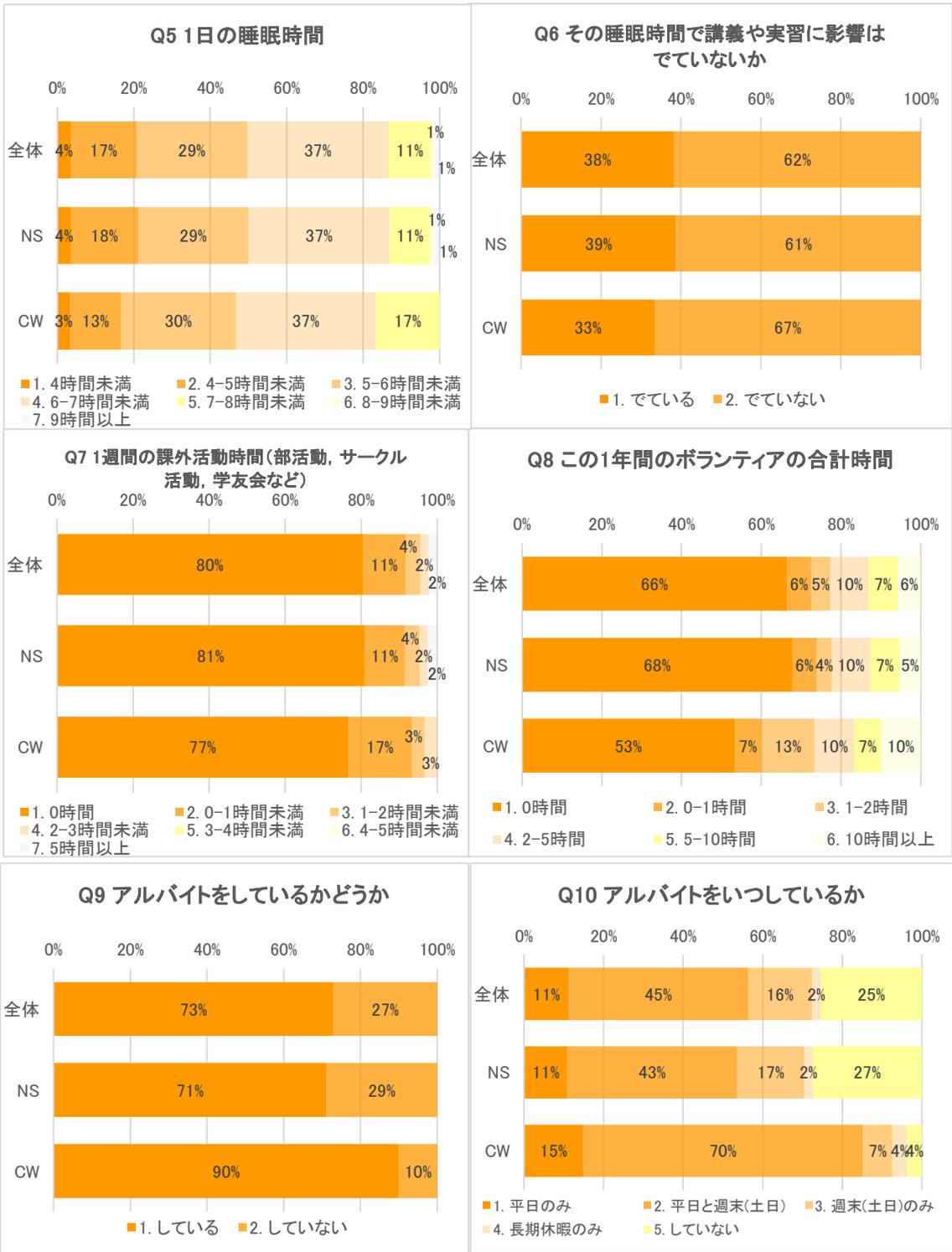
- ・冷暖房の調整をしてほしい
- ・移動に時間がかかる
- ・空きコマに待機できる場所がない

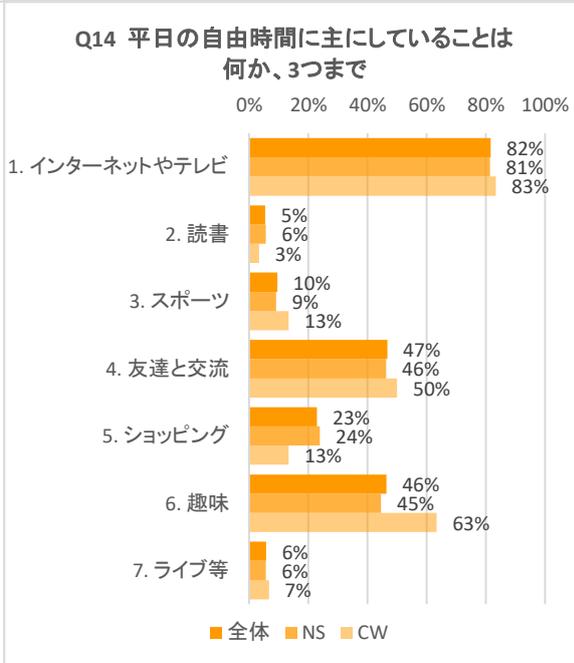
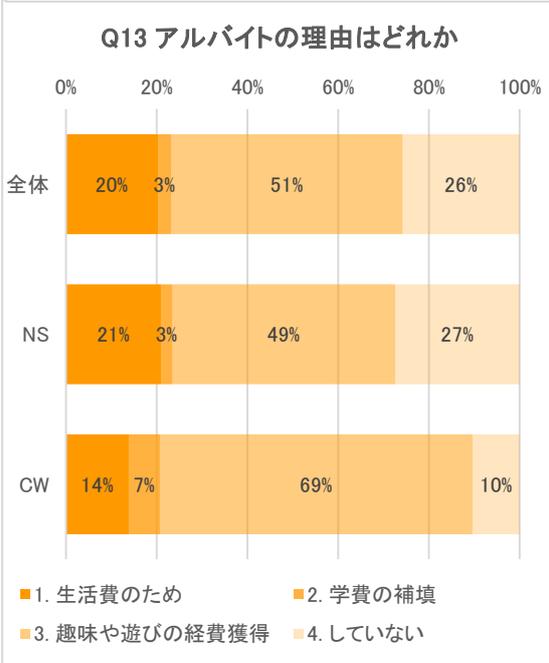
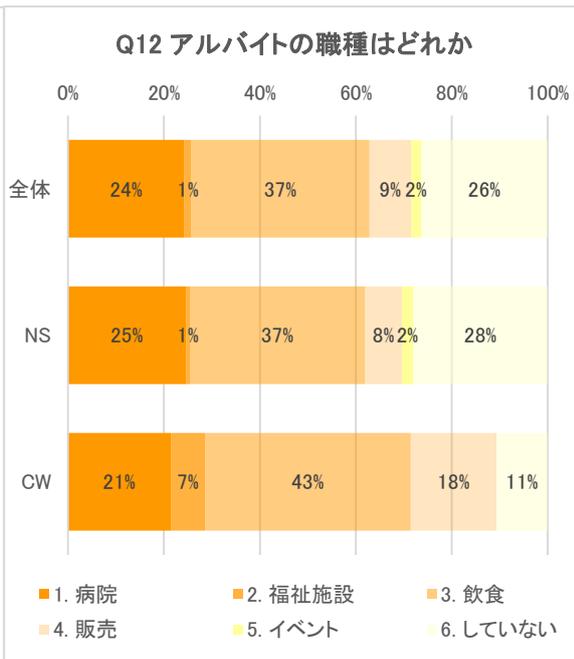
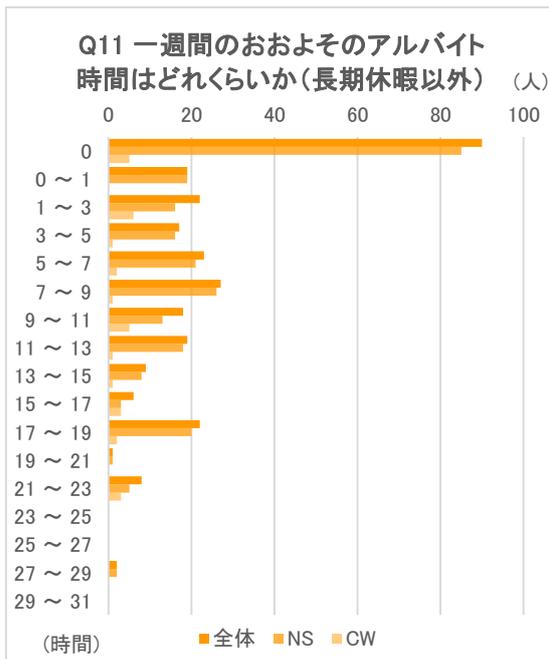
③岡山キャンパスでの講義室の設備・環境について

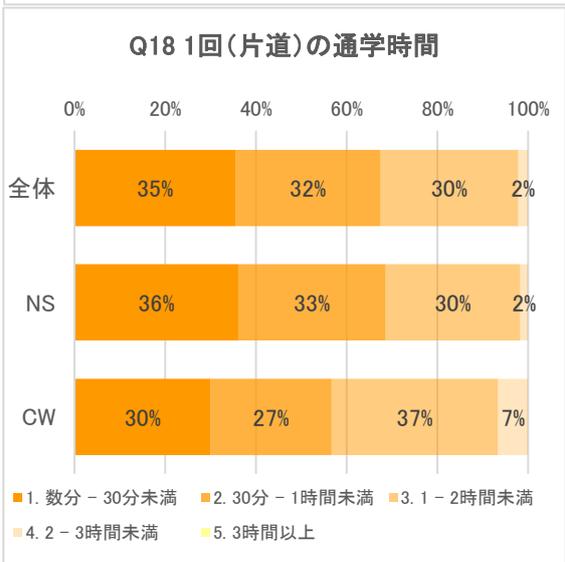
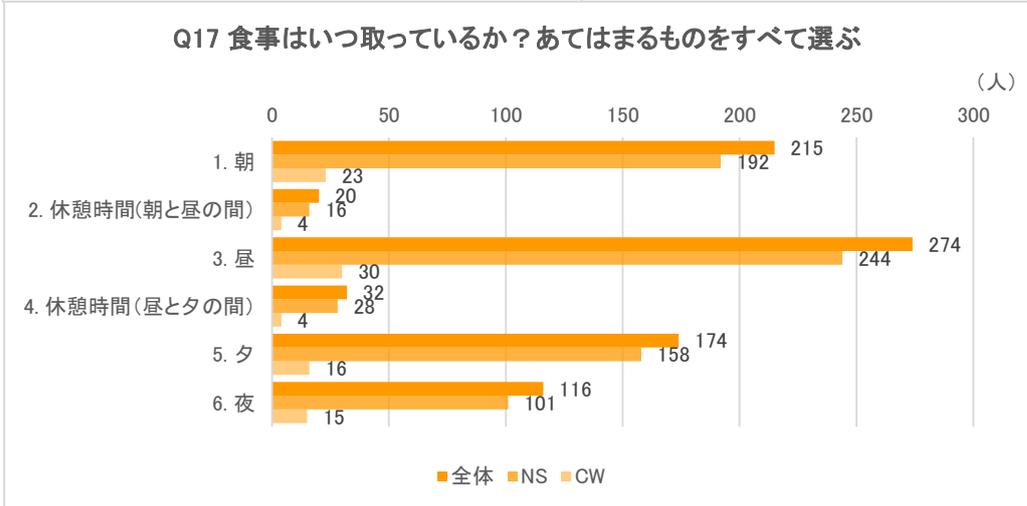
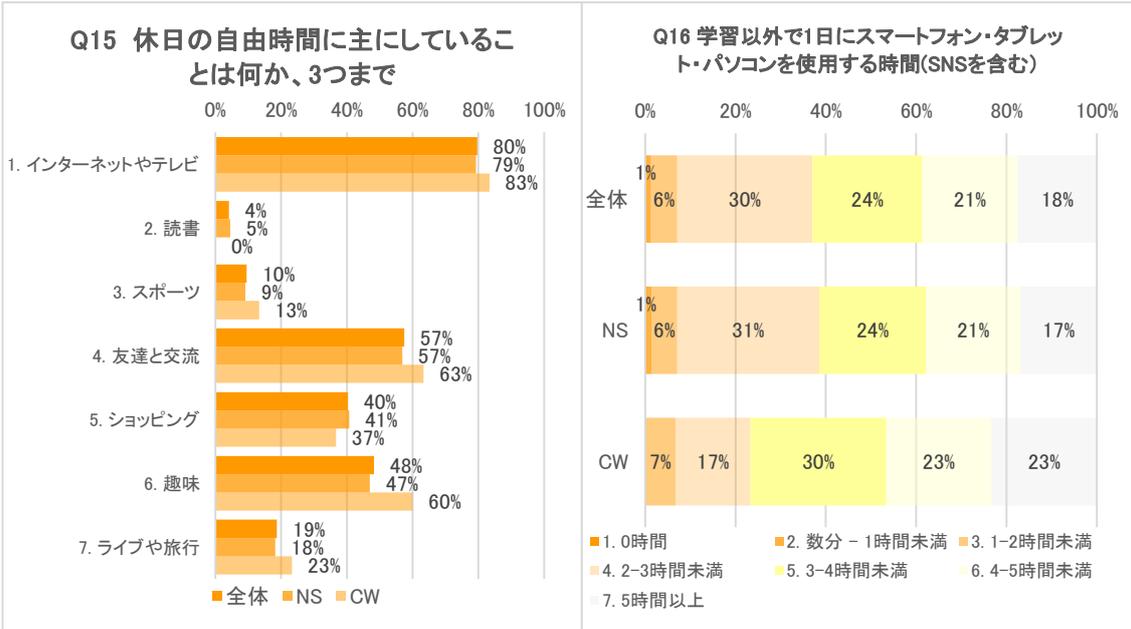
- ・他の学生が設定温度を変えているときがある
- ・温度調節が上手くいっていないときがある
- ・スクリーンを使う時は前の電気を消して欲しい
- ・席が一番前だとスクリーンが近すぎて首が痛い

2. 生活実態調査（有効回答者数 NS278～280 CW30）









Ⅲ. 分析まとめ

1. 看護学科

1) 学生生活満足度調査

学科支援について、担任・教員支援に〔とても満足している・おおむね満足している〕（以後〔満足している〕とする）は85%以上であり、〔あまり・ほとんど満足していない〕（以後〔満足していない〕とする）は3%であった。〔満足していない〕が5%を超えている学年もあるが、いずれの学年も10%未満であった。アドバイザー支援については看護学科全体では〔満足している〕は79%であるが、本年度直接アドバイザーと関わった1年次生は99%が満足していた。学科教員が学生にしっかりと関わった成果であると考ええる。しかし、満足していない学生もいる。無記名でのアンケートのため満足していない学生の特定はできないが、学生の表情や態度等をしっかりと観察をして、気になることがあれば早めに対応する等の対処をしていく必要がある。学科行事では〔満足している〕は昨年同様に65%であった。〔満足していない〕は7.7%であり、昨年度の7.8%と大差はなかった。学外研修等の行事が増えたことが学生の満足度維持につながっていると考ええる。全般的に所属学科に満足しているのは81%であることから、学生支援は充実させていると考える。

部・同好会について、約8割の学生は所属していないが、2割弱の学生は本学の団体に入部しているため今後も活動が継続できるような支援が求められる。大学や学友会行事については半数を超える学生が参加している。参加した学生の7割強の学生は満足しており、参加した学生の満足度は高い。今後はより多くの学生が参加できるよう、学友会執行部以外の学生にもわかりやすい案内の工夫、学友会からだけでなく教員からの声掛けも引き続き必要である。

友人関係には87%、全般的な学生生活には85%の学生が満足しており、高い満足度である。

本年度から松島キャンパスでの講義日は制服着用を求めないことにした結果、松島キャンパスについての意見・要望等は減った。

奨学金などの生活支援に〔満足している〕が約60%（昨年度70%）、〔満足していない〕が8%（昨年度3.2%）と昨年より満足度が下がっている。

講義室・ラウンジ等に〔満足している〕が約8割、〔満足していない〕は1割未満であり、昨年と大差はなかった。昨年度の調査で302講義室では前が見えにくい席がある等の意見があった。横に広い講義室では同じ学生に学習環境が不利になることがないように、本年度は約1か月ごとに席替えをして学習環境を整えた。本年度は「席が一番前だとスクリーンが近すぎて首が痛い」の1件の記述のみで、プロジェクターが見えにくいといった記述はなかった。今後は一番前の机を除去する等の工夫をして学習環境をより整備していく。

自修室の使用について本年度、放課後は学生が自由に使用できるようにしたが、〔満足している〕は66%（昨年度63%）、〔満足していない〕は11%（10%）であり大きな変化はなかった。学内ネット環境、冷暖房設備、設備全般に〔満足している〕は80%前後で、〔満足していない〕は10%未満であった。ロッカールームに関しては昨年度28%が満足していなかったため、令和6（2024）年度から混雑を避けるため同じ学年が近くの場合に

ならないよう考慮した配置に変更した。しかし本年度も 26%が満足していない結果となった。自由記述にもロッカーが狭い等の意見は多数あった。昨年度同様 3 年次生は学内で白衣等に替える機会が少なく、満足していない学生は 10%未満であったが、1 年次生は 43%が、2 年次生は 36%が満足していないと回答していた。学年が重ならないよう配置等を変更しても結果は変わらなかった。令和 7 (2026) 年度入学生から電子教科書が導入され、教科書等をロッカーに入れることが少なくなる。これにより不満が解消されていくことを期待している。

学生表彰制度では [満足している] が 63% (昨年度 57%)、[満足していない] が 4% (昨年度 6%) と昨年よりやや満足している学生が増えている。年間キラリ賞等の説明をしっかりとすることを継続する。

事務室対応は 79%、図書館利用は 81%が満足しており、[満足していない] はいずれも 3%未満であった。事務室対応の満足度は昨年度の 75%より上がっている。事務室での証明書セルフ発行導入に学生が慣れてきたことで、満足度が上がったと考えられる。

健康支援室は約 6 割が利用していると回答している。そのうち 7 割強が支援に満足しており、満足していない学生は 5%であった。相談室は約半数が [利用していない] と回答している。一方、半数の学生が [利用している] と回答し、そのうち 65%の学生が満足し、[満足していない] は 3%未満であった。アンケート作成時に検討はしたものの学生には正確に質問内容が伝わっていないため、実際に利用した学生の満足度がわかるような質問の仕方の検討が再度必要である。

Sora Cafe のサービス内容については、利用している学生が 8 割強であり、そのうち約 7 割は満足していた。自由記述では「営業時間を長くしてほしい」、「量が少ない」等の記述があった。飲食場所に [満足している] は 62%で昨年度の 65%と同程度であった。昨年度の自由記述にも「座れない時がある」、「座席を増やしてほしい」等の意見があり、昼食時には教室や自修室を開放する等工夫をした。飲食設備に関しては満足が 82%、不満足が 7%で昨年と大差はなかった。飲食する場所については不満を感じているが電子レンジの数を増やしたことで飲食設備の満足度の維持につながったと考える。

昨年度「お菓子や長期保存できるパンの自動販売機が設置された場合利用すると思うか？」の質問に対し、利用すると思うが 87%であった。パンなどの自動販売機を設置してほしいとの自由記述もあり、本年度は 3 階にお菓子等の自動販売機を設置した。約半数の学生が利用をしていたが、値段についての自由記述もあった。

本年度からキッチンカー導入を始め、43%の学生が一度は利用していた。今後も継続を検討する。

2) 生活実態調査のまとめと対応

授業時間を除いた 1 日の学習時間で最も多いのは 1～2 時間未満の 24%であった。3 時間以上は 23%で、5 時間以上学習をしている学生が 13%いる中、1 時間未満は 38%、0 時間が 6%であり、学生により学習時間の差が大きい。「その時間は授業を理解するあるいは課題を行う時間として十分か」に対して、[十分でない] と回答している学生は 36%であった。一方、学習以外で 1 日にスマートフォン・タブレット・パソコンを使用する時間では、3 時間以上が 62%、4 時間以上が 38%であった。また、アルバイトについては 71%がしていると回答し、平日もアルバイトをしているのは 54%であった。職種は飲食、

病院の順に多く、アルバイトの理由は生活費や学費の補填等が 24%であり、趣味や遊びの経費獲得は 49%であった。睡眠時間については 6 時間未満が 51%であり、その睡眠時間で講義や実習に影響が出ていないかに対して、影響が出ていると回答したのは 39%であった。SNS に費やす時間が長く、アルバイトをしていることが、学習時間の減少や睡眠不足の要因になっていると考えられる。学生個々の学業成績との関連も考慮しながら、学習時間や睡眠不足の原因を把握したうえで学生に合わせた生活指導を行う必要がある。

e ポートフォリオの新規投稿通知メールを確認しているかでは[毎日している]は 41%、[1 週間に 1 回程度]が 13%、[確認しない]は 5%であった。ポータルサイトのお知らせメールを確認しているかでは[毎日確認している]が 35%、[確認しない]は 9%であった。入学時には何度も毎日確認するよう、また担任からも随時指導は行っているが、毎日確認することが定着していない。そのため全体への指導だけではなく、確認ができていない学生に対しては個別の指導が求められる。

2. 医療介護福祉学科

1) 学生生活満足度調査

学生満足度調査について、対象学生数 30 人、回答率は 100%であった。

担任の支援内容に満足しているかの問いに対して、[とても満足している][おおむね満足している]との意見が 90%であり、また、教員の支援に満足しているかの問いに対して[満足している][おおむね満足している]が 80%であった。このことから、学生の担任、教員からの支援への満足度が高いことが伺えた。そして、全般的に所属学科に満足しているかの問いに対しても、[とても満足している][おおむね満足している]が 83%であり、所属学科に対しての満足度も高かった。しかし、[どちらでもない]が 13%、[あまり満足していない]が 3%あり、その内容を明らかにするためにも、学生個々の様子を観察し普段から学生の想いを聴いて、学生生活の様子を教員間で共通認識していく必要がある。

学科による行事(学外研修・式典など)に満足しているかの問いに対しては、[とても満足している][おおむね満足している]と答えている学生が 76%を超えていた。しかし、[どちらでもない]が 20%、[あまり満足していない]が 3%程度いた。また、大学や学友会による行事(学園祭・スポーツ大会)に満足しているかの問いに対して、[参加していない]と答えた学生が 27%いた。参加した学生のうち約 60%は[とても満足している][おおむね満足している]と答えている。また、学友会(部・同好会)の活動について、[所属していない]が 63%いたが、本学の団体に入部している学生が 33%いた。このことから、大学や学友会の行事に参加することで楽しい学生生活を共有することができることを、行事への参加に躊躇する学生にも伝え、学科の枠を超えて参加できるような環境づくりと、積極的な声掛けが必要であると考えられる。

事務室対応に満足しているかの問いに対して[とても満足している][おおむね満足している]が 90%であった。学生が手続きしやすいシステムを導入し、利用しやすくなったことや、学生へのきめ細やかな日々の対応が満足度に繋がっている。

図書館の利用に関する支援に満足しているかの問いに対して、[とても満足している][おおむね満足している]が 80%であった。今後は、図書館の利用者数を増加させるた

めにも、図書館の積極的な利用を学生に声を掛けていく。

健康支援室は40%が「利用していない」と答えている。しかし、利用している学生のうち72%程度の学生が「とても満足している」「おおむね満足している」と答えている。また、相談室は、60%が「利用していない」と答えているが、利用した学生のうち「とても満足している」「おおむね満足している」と答えた学生は50%であった。健康支援室や相談室の学生相談員による支援が、必要時には利用できる体制であることを今後も周知していき、利用しやすい環境作りや学生相談員等と連携を図る必要がある。

Sora Cafe のサービス内容に対しては、「利用しない」と答えた学生が17%程度いた。しかし、利用している学生では「とても満足している」「おおむね満足している」と65%が答えている。半面、「あまり満足していない」「ほとんど満足していない」と答えた学生が15%いた。自由記述で、「座席を増やしてほしい、電子レンジを増やしてほしい」等の意見があったため、昼食時の教室や自修室の開放、お菓子や長期保存できるパンなどが購入できる自動販売機を設置し、電子レンジも増設した。また、この自動販売機を1回でも利用した学生は、53%を超えていた。キッチンカーの利用を含め、今後も、学生の要望に答えていける部分は、改善を進め、利用しやすい環境になるよう調整していく。

友人関係に対して満足しているかの問いに対して「とても満足している」「おおむね満足している」と答えた学生は、76%を超えていた。「どちらでもない」が20%、「あまり満足していない」が3%であった。個々の学生を観察し、普段の様子を見守っていくことも必要と考える。

講義室の設備に満足しているかの問いに対しては「とても満足している」「おおむね満足している」と答えた学生が80%であった。

休憩施設（ラウンジ）に満足しているかの問いに対しては、「とても満足している」「おおむね満足している」が70%であった。

生活付帯設備（ロッカールーム・トイレなど）に満足しているかの問いに対して「とても満足している」「おおむね満足している」と答えた学生は63%で、「あまり満足していない」「ほとんど満足していない」と答えている学生が17%いた。自由記述で、「便座が冷たい」「ロッカーが狭い」などの意見があったが、ロッカーを広くすることは設備上難しい点やエコの観点から便座はこのままで様子を見ることを学生に周知しておく必要がある。

キャンパスの整備・美化に満足しているかの問いに対して「とても満足している」「おおむね満足している」と答えた学生は80%いた。学生も日頃からごみの分別にも心がけている様子があり、各自で美しく保つ意識付けを今後も継続していけるよう見守っていく。

全般的な学生表彰制度に満足しているかの問いに対して「満足している」「おおむね満足している」と答えた学生は67%を超えていた。「どちらでもない」が33%であり、キラリ賞や学長賞などの受賞に向けて、興味もてるよう普段からの声かけを行う必要がある。

このような結果から、相対的に昨年度の満足度と同様または、やや向上している傾向にあり、継続して学生の声を聴き、環境の調整、改善に努めていく必要があると考える。

2) 生活実態調査のまとめと対応

学生実態調査では、授業時間を除いた1日の学習時間が0時間が7%、数分～30分未満が33.3%、30分～1時間未満が33%、1～2時間が27%で、73%の学生は1時間未満の学習時間であった。また、「その時間は授業を理解するあるいは課題を行う時間とした十分か」との問いに対して、[十分である]と答えた学生は67%で、[十分ではない]と答えた学生が33%いた。1日の学習時間が[十分ではない]と答えた学生は、なぜ十分に学習時間が確保できないのか、その原因を把握する必要がある。座学での学びが実習で役に立つことや3年次の国家試験合格につながることなど、自己学習の時間の必要性を学生に伝えることで学生の学習意欲の向上につながると考える。

「eポートフォリオの新規投稿通知メールを確認しているか」の問いに対しては、[確認しない]が45%であった。また、「ポータルサイトのお知らせメールを確認しているか」の問いに対しては、[確認しない]が24%であった。医療介護福祉学科では、教員から学生への連絡はTeamsで行い、必要時には学生に直接声をかけて、伝達の漏れがないよう努めている。しかし、学生自らが情報を知ろうと努めることができるように、学内メールやポータルサイトを確認する習慣付けできるよう指導する必要がある。

1日の睡眠時間については、6～7時間未満が37%、次いで5～6時間未満が30%、7～8時間未満が17%であり、4～5時間未満が13%、4時間未満が3%であった。そして、「その睡眠時間で講義や実習に影響は出ていないか」の問いに対し、影響が[出ている]と答えた学生が33%、[出ていない]と答えた学生が67%であった。このことから、睡眠時間が講義や実習に影響が出ている学生には、面談を行い、睡眠時間を確保することが出来ていない理由を把握したうえで生活リズムが整うように個々に合わせた指導を行う。

「アルバイトをしているか」の問いに対して、[している]と答えた学生が90%おり、ほとんどの学生がアルバイトをしている。また、「いつしているか」の問いに対しては、[平日のみ]と[平日と週末(土日)]を合わせて85%であった。そして、職種は飲食が43%、病院が21%であった。アルバイトの理由は、[趣味や遊びの経費獲得]のためが69%で[生活費のため]も14%あった。今回の調査結果を理解したうえでアルバイトが学習時間や睡眠など学生生活に影響が出ていないかを把握する必要がある。学科内の教員と情報を共有して、学生指導を行っていく。

「この1年間のボランティアの合計時間」は、0時間が53%で、ついで1～2時間が13%、2～5時間が10%であった。また、10時間以上も10%おり、コロナ禍が明けて、学生のボランティア活動への意識も徐々に高まってきていることが伺える。さらに参加できる機会を逃さず伝えていきたい。

3. 今回の調査の問題点と改善点

昨年の調査結果をふまえて設問の表現を再検討したが、こちらの意図と異なる回答をする学生がいた。特に、相談室利用に関する設問では、昨年同様に利用実態がないにも関わらず、約半数の学生が利用しているものとして満足度を回答するなど、実際の数字とはかなり乖離した回答結果が出た。そのため、再度学生にわかりやすい表現で誤認を防ぎ、回答に負担の少ない設問文を検討する。

今回の調査結果を次年度からの生活指導に活かして、学生生活の改善を図っていき

い。

資料7-4 令和6（2024）年度「川崎医療短期大学の教育・学生生活に関するアンケート（卒業後アンケート）」調査結果

I. 調査時期、対象者、調査方法、回収結果

調査時期：令和6年8月

対象者：平成30年度看護科・医療介護福祉科卒業生、
令和5年度看護学科・医療介護福祉学科卒業生

調査方法：Google フォームを用いたオンラインアンケート調査。対象者に URL と二次元コードを印刷したはがきを送付

回収結果：

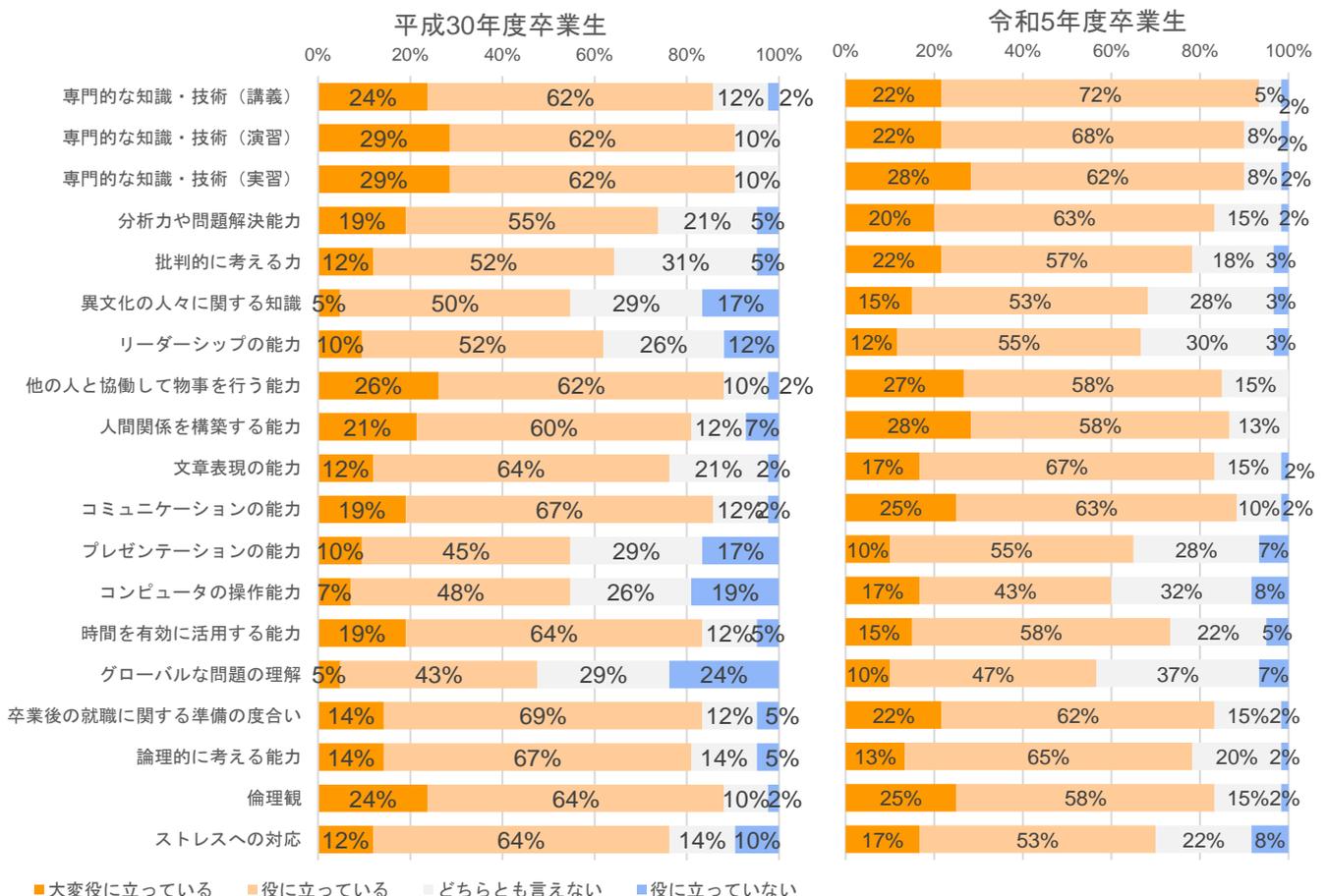
| | | 対象者数 | | 回収数 | | 回収率 | | 回収者の卒業した年の4月時点進路 | | | | | | | |
|----|--------|----------|--|-----|-----|-------|----|------------------|-------|----|----|-----|---|---|---|
| | | | | | | | | 就職 | | 進学 | | その他 | | | |
| 総計 | | 264 | | 104 | | 39.4% | | 97 | | 7 | | 0 | | | |
| 内訳 | 平成30年度 | 看護科 | | 135 | 131 | 42 | 39 | 31.1% | 29.8% | 38 | 36 | 4 | 3 | 0 | 0 |
| | | 医療介護福祉科 | | | 4 | | 3 | | 75.0% | | 2 | | 1 | | 0 |
| | 令和5年度 | 看護学科 | | 129 | 118 | 62 | 53 | 48.1% | 44.9% | 59 | 50 | 3 | 3 | 0 | 0 |
| | | 医療介護福祉学科 | | | 11 | | 9 | | 81.8% | | 9 | | 0 | | 0 |

II. 調査結果

平成30年度卒業生と令和5年度卒業生に分けて集計した。

自由記述に関しては、医療介護福祉科（医療介護福祉学科）のもののみ学科名を示す。回答の後ろの（）は件数、（）がないものはすべて1件

1. 在学中の教育について（次に示す能力について、在学中の教育は役に立っているか）



在学中の教育に対する意見（自由記述）

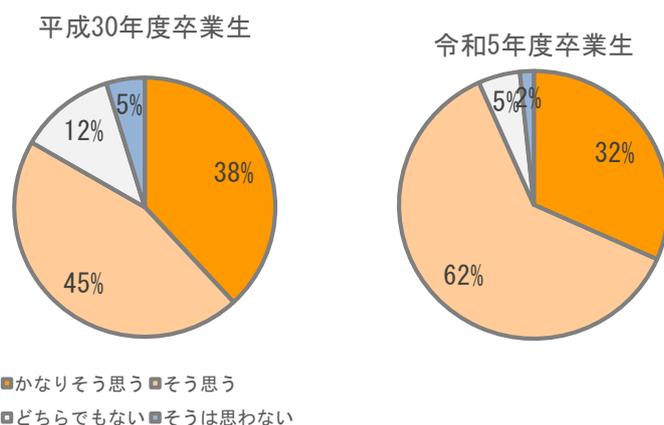
平成30年度卒業生

- ・ 解剖生理学の授業がとても分かりやすかった。レジュメもたまに見返している。
- ・ 基礎看護技術の質は高く根拠に基づいており、実践でも役に立っている。
- ・ 先生方が親身になって授業や指導をしてくださったおかげで多くの知識が身についた。質問等もしやすかった。
- ・ 先生方は講義内容をとても大切にされており、熱意が感じられた。病態生理や臨床場面での話を含めた講義だったので非常に興味深かった。現場でその疾患を学ぶときには、先生方が話されていたことを思い出すほどである。志望していた大学ではなかったが、学生思いの先生方ばかりで在籍できたことを幸せに思う。

令和5年度卒業生

- ・ 同期と比べると、大学時代の教育が役に立っていると感じる場面が多い。

2-1. 本学での学びに対する評価（本学で学んでよかったと思うか）



本学での学びに対する評価について、そのように思う理由（自由記述）

平成30年度卒業生

- ・ 先生方が学生のことを第一に考え、支援してくださる体制であった。(6)
- ・ 臨床で働かされていた先生から指導を受けることができ、知識だけでなく技術も身につけることができ、就職してからとても役に立った。
- ・ 授業がわかりやすく、理解しやすかった。
- ・ 3年間でたくさんの学びがあった。
- ・ 看護師になるために勉強することは多く大変な時もあったが、周りの方々のサポートや友人との交流により楽しく過ごせた。実習施設である附属病院の様々な病棟のことを把握でき多くのことを学べたのがよい。そこに就職できたのもよかった。
- ・ 実習、勉強、生活が一つの場所で完結していてよかった。
- ・ 実習場所が主に附属病院だったので通いやすかった。
- ・ 学生寮に入っていたため、友人と支え合いながら勉強することができた。学生寮に自習スペースがあり、勉強する環境がまずまず整っていた。3年間かなりハイペースな勉強

ではあったが、質問等に行けば快く返答していただけるなど先生方は親身になって教えてくださった。

令和5年度卒業生

- ・ 講義や実習で学んだことが臨床現場でも活かされている。(6)
- ・ 実習が川崎学園の病院で行える。(2)
- ・ 実習先の病院に就職できたため、雰囲気も分かっているし同期も沢山いてとてもやりやすい。(2)
- ・ 勉強は大変だったが、知識はしっかり身についた。
- ・ 学業で困ったことなどもサポートしてもらえた。
- ・ 経験豊富な先生方の下で現場に近い指導を受けることができた。
- ・ 短期間で勉強するため常に時間に追われる。
- ・ 就職支援や国家試験対策などが手厚かった。
- ・ 楽しかった。
- ・ (医療介護福祉学科) 基礎知識、技術だけでなく、利用者とのかかわり方などを学ぶことができた。

2-2. 本学でほかに学びたかったこと (自由記述)

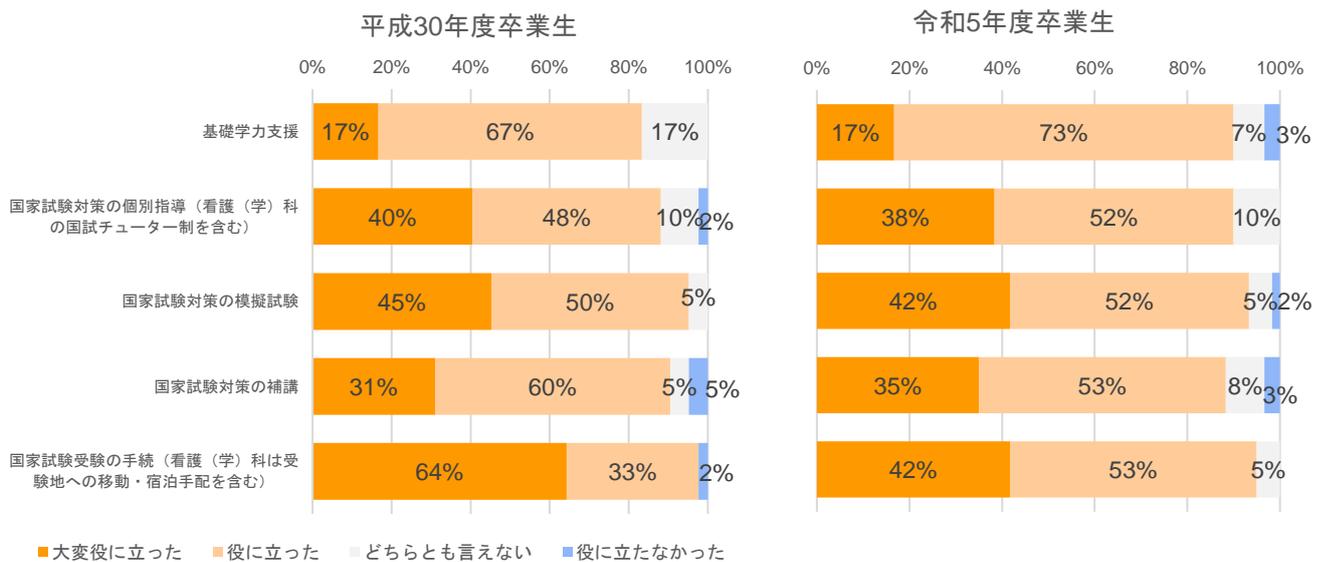
平成30年度卒業生

- ・ 看護研究をもう少し詳しく学びたかった。(2)
- ・ 点滴のミキシングの方法や包帯の巻き方

令和5年度卒業生

- ・ 自分には知識よりも技術をもう少し教えてほしかった。

3. 在学中の教育支援について (次に示す教育支援は役に立ったか)



在学中の教育支援に対する意見（自由記述）

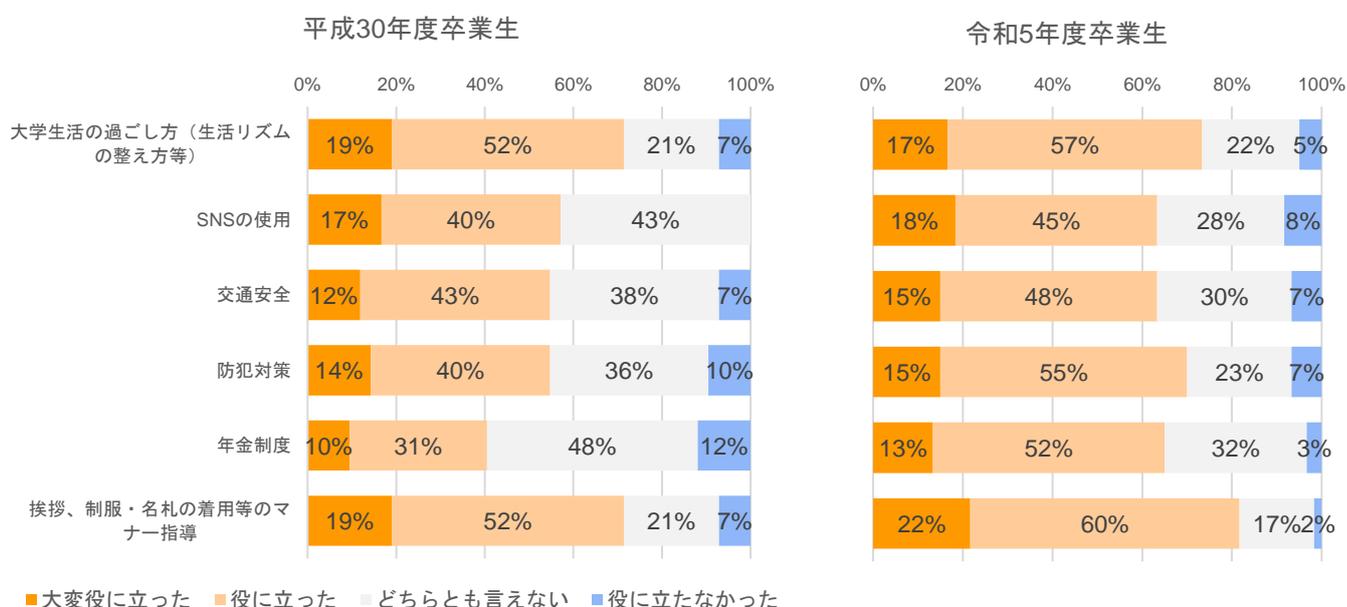
平成 30 年度卒業生

- ・ 相談できる担当の先生がいてくださり、アドバイスをもらえる環境はとてもよかった。
(2)
- ・ チューター制度があつてとても助かった。
- ・ 進学対象者に対しても講座を設けていただいたり、専門の先生から指導を受ける機会をいただけたら、手厚い支援を得ることができた。

令和 5 年度卒業生

- ・ 模試の回数が多い。
- ・ 模試はもう少し最後のほうまであつてほしかった。
- ・ 1 年生のうちから国家試験の模試などを行い、意識を高めるとよい。

4-1. 在学中の学生生活支援について（次に示す学生生活に関する指導は役に立ったか）



4-2. 在学中の学生生活に関する指導で、就職・進学（編入学）後、役に立ったこと（自由記述）

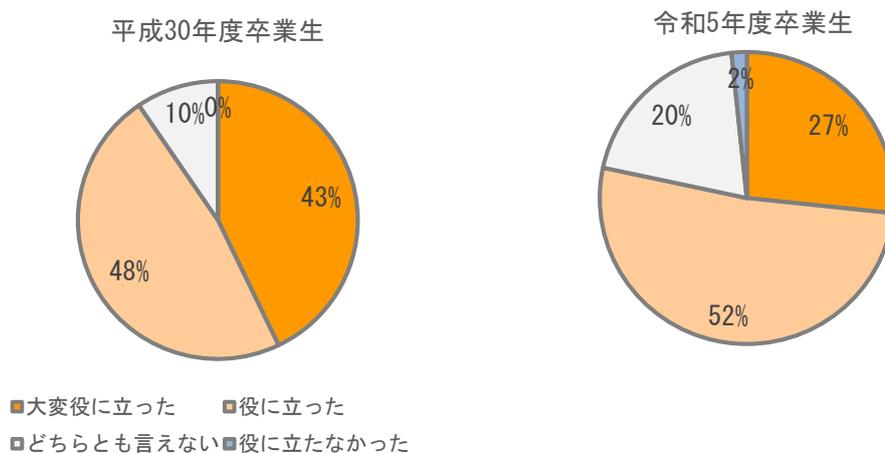
平成 30 年度卒業生

- ・ 外部講師によるマナー講座

令和 5 年度卒業生

- ・ 身だしなみは他人のためにするという事

5. 担任制度について（担任による支援は役に立ったか）

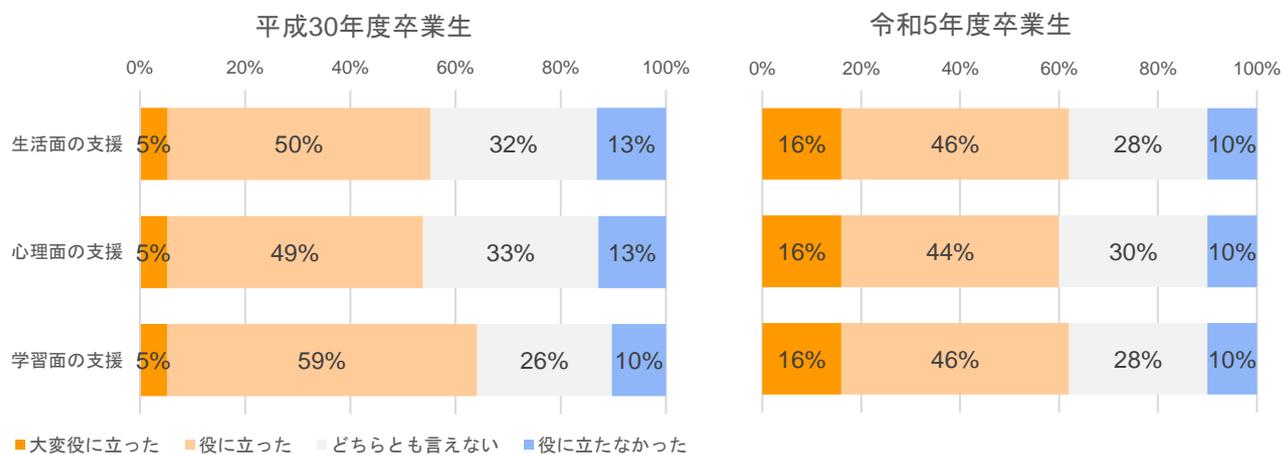


担任による支援に対する意見（自由記述）

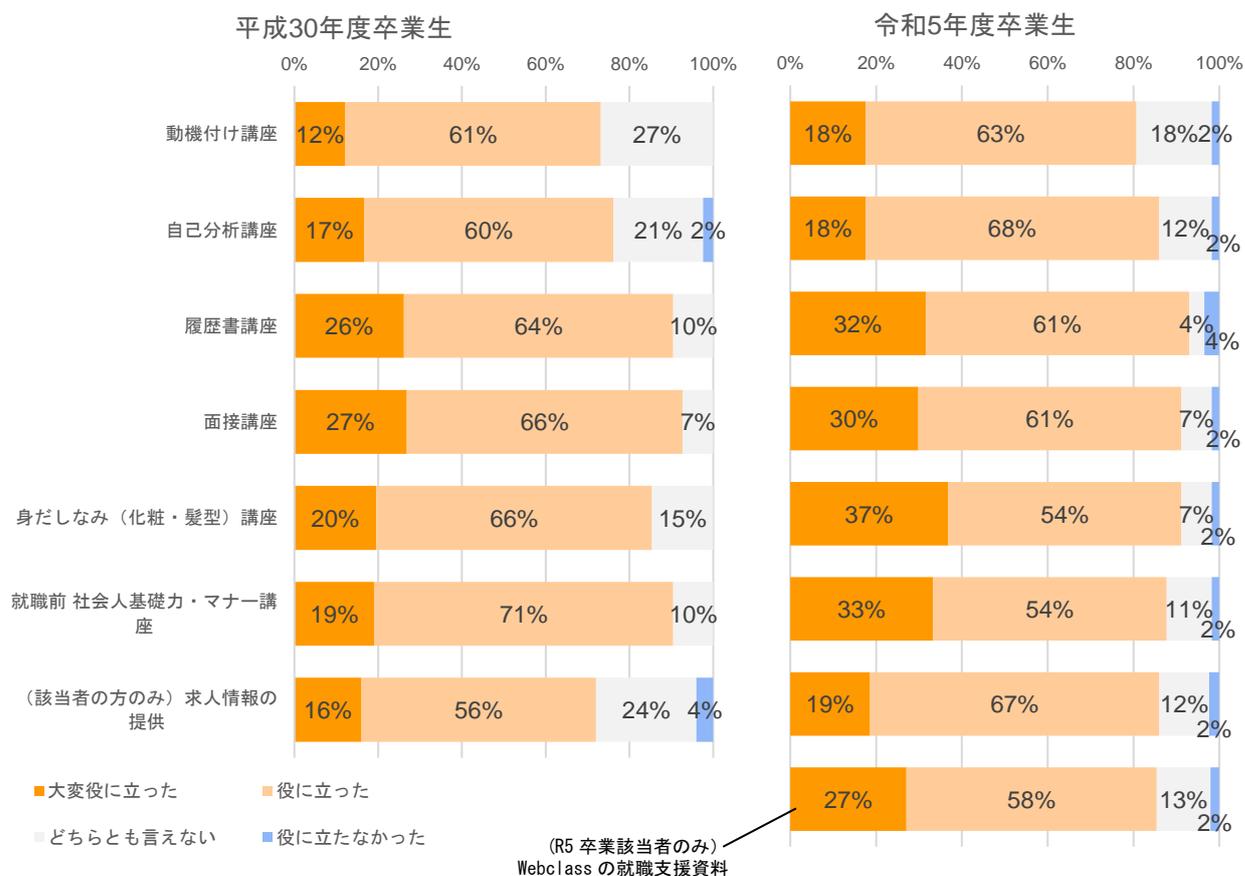
平成30年度卒業生

- ・ 親身になって学生に寄り添ってくださった。(3)
- ・ 担任にすすめていただいた病院で今も救急をがんばっている。
- ・ とても熱心に進学相談に乗ってくださり感謝している。

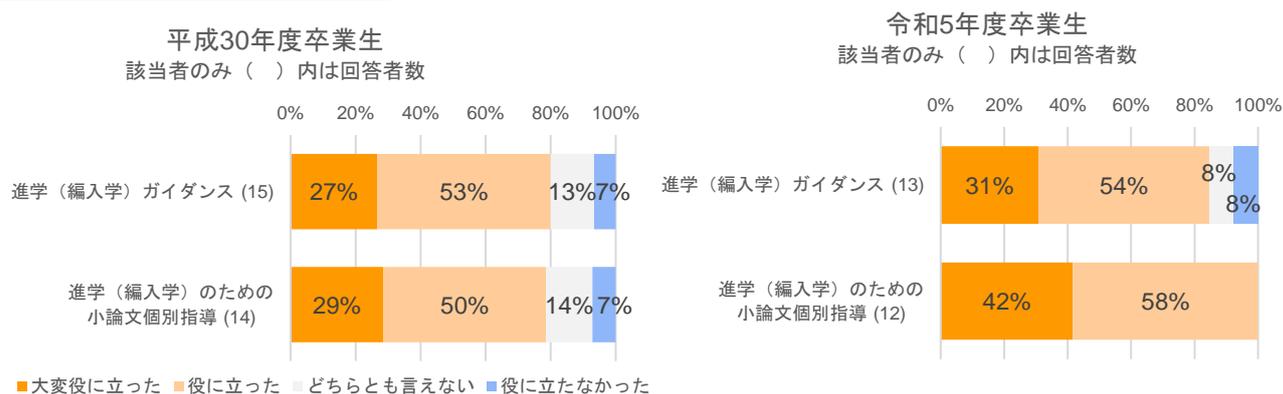
6. 1年生のアドバイザー制度（看護科・看護学科のみ）について（アドバイザーによる支援は役に立ったか）



7. 就職支援について（次に示す支援は役に立ったか）



8. 進学（編入学）支援について（次に示す支援は役に立ったか）



9. 就職、進学（編入学）支援で、ほかに役に立ったこと（自由記述）

平成 30 年度卒業生

- ・ 英語、小論文指導(2)
- ・ 過去の面接の報告書
- ・ 個別指導
- ・ 進学した卒業生との交流

10. 在学中にできなかったことで、学生時代にしてみたかったこと（自由記述）

平成 30 年度卒業生

- ・ アルバイト(2)
- ・ 海外旅行

令和 5 年度卒業生

- ・ 就職先の病棟見学
- ・ コミュニケーションの練習
- ・ 留学
- ・ 課外活動
- ・ クラス旅行
- ・ (医療介護福祉学科) 短大での部活動・同好会活動

11. 在学中になかったことで、あればよかったと感じている支援（自由記述）

平成 30 年度卒業生：

- ・ 自律性を伸ばす教育。社会常識を教える講義

令和 5 年度卒業生

- ・ 大学のほうが勉強できるため、平日は 21 時くらいまで、土日も夜まで開放してほしい。
- ・ 申し送りのコツ、練習

まとめ

看護科（看護学科）・医療介護福祉科（医療介護福祉学科）の平成 30 年度卒業生と令和 5 年度卒業生を対象に、本学の教育並びに学生生活支援の有用性についてアンケート調査を行い、それぞれの調査項目につき卒業年度ごとに集計した。

在学中の教育・教育支援について

在学中の教育：平成 30 年度卒業生は、「専門的な知識・技術」について 86～91%の卒業生が「(大変)役に立っている」と評価していた。「一般的な教養や教育活動全般を通して涵養される能力」では、「他者との協働」「コミュニケーション」「倫理観」を 86%以上の卒業生

が「(大変)役に立った」と高く評価していた。その他ほとんどの項目でも74%以上が「(大変)役に立った」と高く評価していた。一方、「批判的に考える力」「異文化の人々に関する知識」「リーダーシップ」「プレゼンテーション」「コンピュータ操作」「グローバルな問題理解」については「(大変)役に立った」と答えた卒業生は48~64%と低かった。令和5年度卒業生は、84~90%の卒業生が「専門的な知識・技術」を「(大変)役に立っている」と評価していた。それ以外の能力については、平成30年度卒業生と同様に「異文化の人々に関する知識」「リーダーシップ」「プレゼンテーション」「コンピュータの操作」「グローバルな問題理解」が低かったが、「批判的に考える力」については79%が高く評価していた。一方、「時間の有効活用」「ストレス対応」を高く評価する割合は平成30年度卒業生より低くなった。「他者との協働」「人間関係の構築」「コミュニケーション」は85%以上の卒業生が高く評価していた。全体的に令和5年度卒業生のほうが評価が高くなっていることから、本学の教育改善が奏功していることがうかがえた。今後の課題として、専門教育に加えて、幅広い視点とデジタルテクノロジーの力やプレゼンテーション技術を養い、様々な課題に挑戦する力を育むことが挙げられる。

学びに対する評価：「本学で学んでよかった」と答えた卒業生の割合は、平成30年度卒業生が83%、令和5年度卒業生が94%といずれも高い評価であったが、昨年度の97~98%よりやや低下した。自由記述の意見には川崎学園内の実習施設の充実ぶりや卒業後にも有益な学びが挙げられていた。このような学びが評価されていることから、教育内容・教員の指導方法の向上が図られていることが推察される。

教育支援：両年度共に、「基礎学力支援」の有用性に対する評価は高く、「国家試験対策」に関しては40%前後の卒業生が「大変役に立った」と答え、約90%以上の卒業生がその有用性を実感していた。国家資格が得られて仕事に従事できたことを非常に満足しているものと思われる。

学生生活支援（含就職・進学支援）について

在学中の学生生活支援：平成30年度卒業生では「大学生生活の過ごし方」「マナー指導」を高く評価した卒業生が多かったものの、それ以外は「(大変)役に立った」と答えた卒業生の割合は半数程度にとどまった。令和5年度卒業生では「大学生生活の過ごし方」「マナー指導」に加えて「防犯対策」が高く、それ以外は60%強であった。学生生活に関する指導のうち、対人援助職者としての自立につながる指導は学生も切実に受け止めたものと思われるが、「SNS」「交通安全」のように学生自身が日常生活の中で身につけていく常識的な事柄や、「年金制度」のように学生にとって切実とは言い難い内容については在学中に受けた指導やその内容を忘れていく可能性もある。

担任制度・アドバイザー制度：両年度共に「担任制度」は約80%以上の卒業生が評価していたが、令和5年度卒業生のほうが低い評価であった。「看護(学)科1年生のアドバイザー制度」は約50~60%の卒業生が高く評価している。令和5年度卒業生はコロナ禍2年目の令和3年に入学し、1年次のみ松島キャンパスで過ごした。高校3年生の時から様々な制約を受けてきたことが学生の対人関係に与えた影響は少なくない。キャンパス移転という環境の変化も加わって教員との関係構築にこれまで以上に時間がかかったのかもしれない。

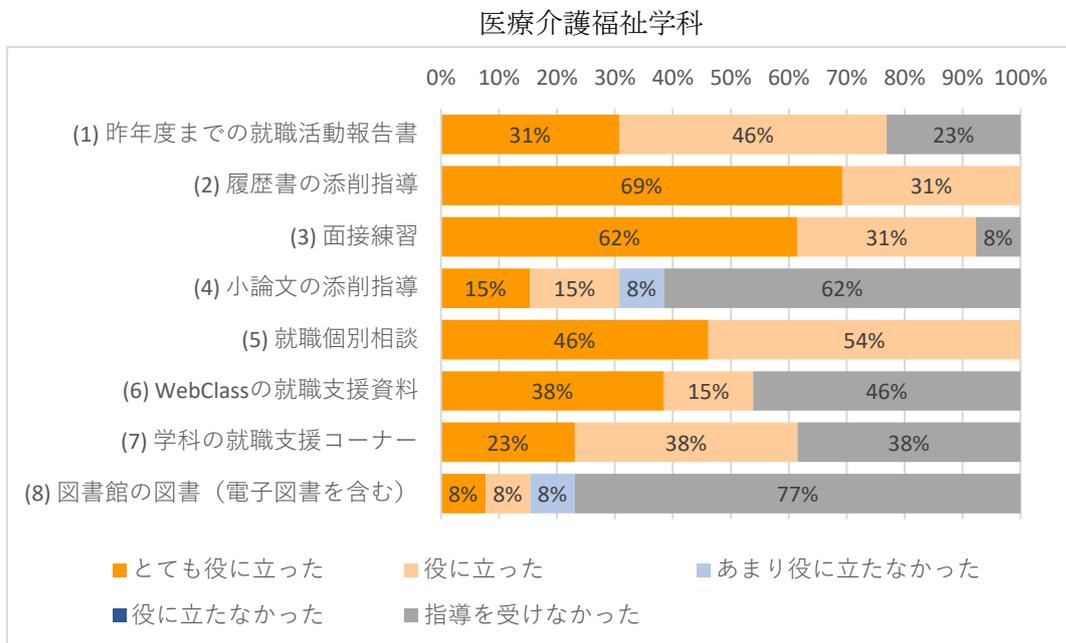
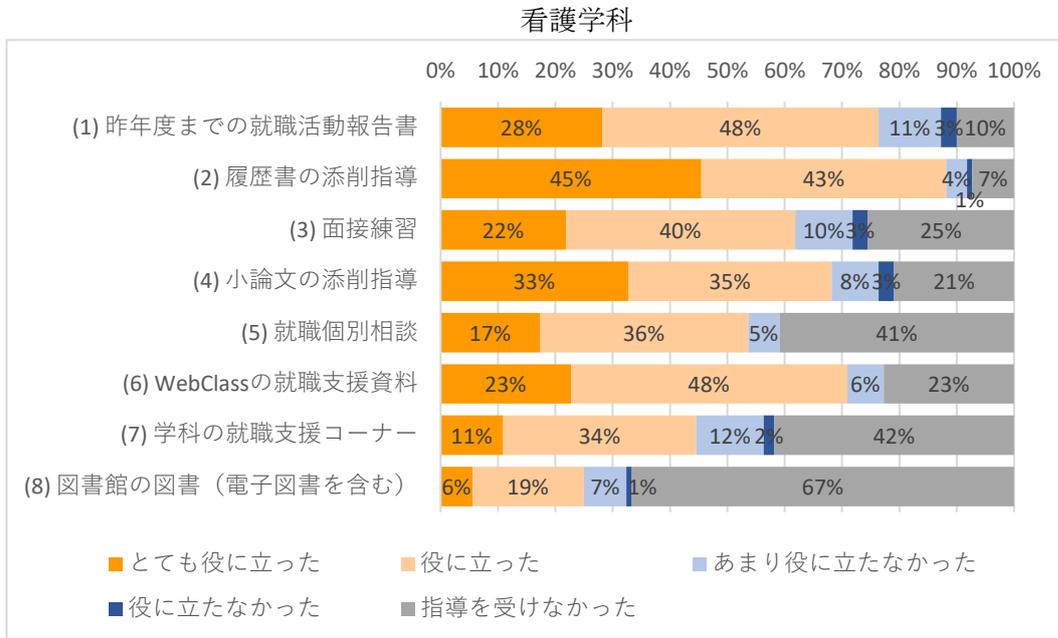
就職支援：本学で開催している6つの就職活動支援講座について、両年度とも約70～90%の卒業生が、その有用性を高く評価していた。とりわけ、「履歴書講座」「面接講座」「マナー講座」など就職活動や就職の軸となる講座への評価が非常に高かった。令和5年度から始めた「WebClassでの就職活動支援資料の提供」に対する評価も高かった。

進学（編入学）支援：両年度とも、「進学（編入学）ガイダンス」「小論文個別指導」共にほぼ80%以上の卒業生が高く評価していた。ただし、全学年対象に開催しているガイダンスには興味のある学生が毎年10～20人程度参加しているが、小論文指導は進学（編入学）を希望する最終学年の学生のみを対象としているため人数は限られている。回答している10人超の卒業生がすべて該当者とは考え難く、就職支援の小論文個別指導と間違えて回答した可能性がある。

以上のように、今回対象となった卒業生は、本学での学びの有用性を実感し、卒業後の就職や進学にも満足しているものと推察される。また、「他者との協働」「人間関係の構築」「コミュニケーション」「倫理観」に対する評価が高いことから、本学の教育は医療福祉の専門職者としての能力の涵養にも役立っていることがうかがえる。上述した通り、例年に比べて令和5年度卒業生の学生生活に対する評価が若干低かったのは、コロナ禍とキャンパス移転という環境の変化に起因するものと思われる。今年度から開始した1年次生対象の「リベラルアーツ教育」を継続し、グローバル化や社会の多様化に対応できる学生を育てる教育が今後ますます重要性となるであろう。

資料 7-5 令和 6（2024）年度「就職支援に関するアンケート調査」結果概要

a. 一本学の個別支援の就職活動への役立ち度の割合



b. 一就職活動支援講座の就職活動への役立ち度の平均一

| 学科別回答者数 | | 看護学科 113人 | 医療介護福祉学科 13人 |
|---|----------------|---|---|
| 座 自 就 己 活 分 準 析 備 講 & | 役立ち度 | 7.6 | 7.3 |
| | 特に役に 立った項目 | 電話・メール・お礼状のマナー、就職活動の基本、自分について知る | 自分について知る、電話・メール・お礼状のマナー、就職活動の基本 |
| 方 の 履 講 書 歴 座 書 書 | 役立ち度 | 7.7 | 7.7 |
| | 特に役に 立った項目 | 自己PR・志望動機の書き方、履歴書の基本ルール | 自己PR・志望動機の書き方、履歴書の基本ルール |
| 講 面 座 接 対 策 | 役立ち度 | 7.5 | 7.5 |
| | 特に役に 立った項目 | 面接の基本ポイント、面接時のマナー、受け答えのポイント | 受け答えのポイント、面接の基本ポイント、面接時のマナー |
| ナ 社 ー 会 講 人 座 基 礎 力 ・ マ | 学んだこと への期待度 | 7.5 | 6.2 |
| | 期待する 項目 | 社会人基礎力、電話・メールのマナー、挨拶・言葉遣い、コミュニケーション・報連相、身だしなみ | 身だしなみ、挨拶・言葉遣い、コミュニケーション・報連相、社会人基礎力、電話・メールのマナー、個人情報・SNSの取り扱い |
| り 識 し 社 度 の て 会 高 の 人 ま の 意 意 と | 意識の 高まり度 | 7.7 | 7.4 |

役立ち度：1 全く役に立たなかった～10 大いに役に立った

学んだことへの期待度：1 全く役に立ちそうにない～10 大いに役に立つ

意識の高まり度：1 全く高まらなかった～10 大いに高まった

今後の課題

1 大学としての課題と対策

本学の就職支援の改善に生かすことを目的として、令和6年度卒業予定者を対象に Web Class を用いた就職支援に関するアンケート調査を実施した。回収率は97%であった。学生の評価は概ね良好であり、就職活動全般に効果があったことがうかがえた。

昨年度は、就活支援企業が提供するキャリアデザインツールの適性診断を受検し、その結果に基づく自己分析、自己PR・志望動機・履歴書の作成、面接・小論文練習という積み上げ方式の対策が成果を上げた。一方で、本年度は適性診断を「生かせなかった」と答えた学生が少なからずおり、診断結果よりも自分の考えを優先したというコメントや、「生かし方が分からなかった」との回答が見受けられた。これを踏まえ、結果の活用方法を丁寧に説明するなど、個別支援にも役立てていく必要がある。

今後も支援講座を通して就職活動の基礎知識や態度を身につけさせ、学科の個別支援を通して長く働き続けられるよう学生に合った病院・施設選びを促し、確実に内定を勝ち取らせたい。なお、学生の就職活動支援講座への出席率はほぼ100%であった。

2 学科としての課題と対策

看護学科

看護学科の個別支援の就職活動への役立ち度は、昨年度よりも低下した項目が多かったが、「履歴書の添削指導」は昨年度と同様、9割近い学生が好意的評価を示した。「学科の就職支援コーナー」は「利用しなかった」の割合が昨年度の約2倍となり、「WebClassの就職支援資料」がその役割を担うようになってきているものと思われた。「小論文の添削指導」は、昨年度に比べて学生の評価がやや低下した。看護学科では、本年度から就職支援を受ける学生全員に、川崎学園の看護師採用試験を想定した小論文を課し、ルーブリック評価表を用いて評価・添削、個別指導を実施している。本年度の評価がやや低下したのは、採用試験の早期化や川崎学園の小論文の文字数変更が一因と考えられる。次年度は指導時期、指導体制、ルーブリック評価表を見直す。また、1年次後期「基礎看護学実習Ⅰ」終了後、2年次後期「基礎看護学実習Ⅱ」終了後に小論文を課すことを検討する。

就活支援企業による就職活動支援講座の役立ち度は昨年度より低い、概ね良好であった。「履歴書の書き方講座」のうち「自己PR・志望動機の書き方」が役立ったと回答した学生の割合は上昇した。適性診断で自己の強みや弱みを知ることで自己PRに生かすことができたためである。川崎学園看護師採用試験の履歴書が盛り込まれていたことも良い評価につながったと思われる。適性診断の活用については学科内で共有し、個別指導に役立てたい。

医療介護福祉学科

医療介護福祉学科の個別支援の就職活動への役立ち度は、「履歴書の添削指導」「面接練習」「就職個別指導」は50～70%の学生が「とても役に立った」と答え、昨年度よりも増加した。就職活動前の不安を尋ねた設問で、6人の学生が「履歴書・面接・小論文への不安」を抱いていたことから、それぞれの個別指導が役に立ったものと考えられる。

就職支援企業による就職活動支援講座の開催時期は、多くの学生がどの講座も「適切であった」と答えた。「就活準備&自己分析講座」と「履歴書の書き方講座」は「早い」と回答した学生が3人おり、希望時期は「3年前期」であった。本学科の学生の就職先である病院と施設では採用時期が異なるため、志望先によって講座の希望時期も異なるものと考えられる。本年度から「履歴書・面接講座」受講後に履歴書作成を課すことで、病院志望の学生は履歴書講座での学びを就職活動に生かすことができた。一方、時期の遅い施設志望の学生には、就職活動直前に再度履歴書の個別指導が必要であった。今後も、「履歴書・面接講座」受講後に履歴書作成を行うとともに、活動時期に応じた指導を行いたい。

「社会人基礎力・マナー講座」の期待度や、社会人としての意識は高まり度のポイントが低下していることから、講座を活用しながら社会人としてのマナーや常識を身につけられるよう、意識づけや指導を行っていききたい。

資料 7-6 令和 6（2024）年度「卒業生採用に関するアンケート調査」結果概要

I. 調査時期、対象施設、回収結果

調査時期：令和 7（2025）年 1 月

対象施設：令和 5（2023）年度看護学科・医療介護福祉学科卒業生就職先

調査方法：Google フォームを用いたオンラインアンケート

回収結果

| | 対象施設 | | 回収数 | 回収率 |
|----------|------|----|-----|------|
| | 施設数 | 件数 | | |
| 看護学科 | 43 | 68 | 45 | 66% |
| 医療介護福祉学科 | 10 | | 10 | 100% |

- ・対象施設：看護学科では 1 施設あたり複数部署に送る場合があるため、施設数と件数を示している
- ・回収数：看護学科は件数、医療介護福祉学科は施設数を示す。回収率も件数による

II. アンケート結果および分析

1 施設基本事項

1) 地方・都府県別回収数

| 地方 | 都府県 | 看護学科 | | 医療介護福祉学科 | |
|------|------|------|-------|----------|-------|
| | | 地方別 | 都道府県別 | 地方別 | 都道府県別 |
| 関東地方 | 東京都 | 2 | 1 | | |
| | 神奈川県 | | 1 | | |
| 近畿地方 | 兵庫県 | 1 | 1 | | |
| 中国地方 | 岡山県 | 40 | 32 | 9 | 8 |
| | 広島県 | | 6 | | |
| | 山口県 | | 1 | | 1 |
| | 島根県 | | 1 | | |
| 四国地方 | 香川県 | 2 | 1 | | |
| | 愛媛県 | | 1 | | |
| 未回答 | | 0 | | 1 | |

2 調査項目

A 採用について

1) 採用で重視する資質・能力

それぞれの項目について、5段階（5：重視している、4：やや重視している、3：どちらともいえない、2：あまり重視していない、1：重視していない）の中から当てはまる数字を選択する質問。平均値を示した。

| 項目 | 看護学科 | 医療介護福祉学科 |
|----------|------|----------|
| 共感力 | 4.4 | 4.1 |
| 誠実性 | 4.7 | 4.7 |
| 一般常識・マナー | 4.6 | 4.4 |
| 対人関係構築力 | 4.6 | 4.5 |
| 情報伝達力 | 4.3 | 4.2 |

| | | |
|-------------|-----|-----|
| 傾聴力 | 4.4 | 4.0 |
| 柔軟性 | 4.5 | 3.9 |
| 基礎学力 | 4.2 | 3.6 |
| 専門的知識・技能 | 3.9 | 3.9 |
| 論理的思考力 | 3.9 | 3.3 |
| 役割遂行力 | 4.1 | 3.9 |
| 責任感 | 4.6 | 4.3 |
| 倫理観 | 4.7 | 4.3 |
| 主体性 | 4.3 | 4.0 |
| 探究心 | 4.1 | 3.5 |
| 課題解決力 | 3.9 | 3.6 |
| ストレスコントロール力 | 4.3 | 3.7 |
| 自己管理能力 | 4.3 | 3.9 |

その他重視している事項（自由記述）

看護学科：回答数5件、()は件数、それ以外は1件

- ・コミュニケーション力(2)
- ・語彙力・共感性・社会人基礎力
- ・自己認識力・リフレクションを学びにする力
- ・協調性・組織コミットメント

医療介護福祉学科：回答数1件

- ・体調管理

【分析】

採用時に重視する能力は、看護学科ではいずれの項目も3.9～4.7、医療介護福祉学科では「論理的思考力」が3.3であったほかは3.5～4.7であった。両学科共に「誠実性」「対人関係構築力」が4.5～4.7と極めて高く、看護学科では「倫理観」「一般常識・マナー」「責任感」「柔軟性」も4.5以上で非常に高かった。一方、両学科共に他に比べて比較的低かった(4.0未満)のは「専門的知識・技能」「論理的思考力」「課題解決力」で、医療介護福祉学科では「基礎学力」「探究心」「ストレスコントロール力」も低かった。全体的な傾向としては、「専門的知識・技能」「論理的思考力」などの知識や汎用的技能を有していること以上に、態度や人柄、対人援助職としての資質を身につけた人材が望まれていることがわかる。

2) 面接で重視する事項（自由記述）

看護学科 15件

- ・第一印象
- ・コミュニケーション力
- ・素直さ・コミュニケーション力
- ・柔軟性、ストレス対応力、健康面、コミュニケーション力、倫理観
- ・誠実、忍耐力、協調性
- ・態度、姿勢、清潔感
- ・人間性、社会人基礎力
- ・質問に対する答え方
- ・コミュニケーション力、今までの学生生活等の経験の中で培われた能力
- ・当院の理念を理解し共感しているかどうか（多機能病院であり高齢者が多いことを理解しているかどうか）
- ・当院で看護師として働くイメージがどの程度あるか
- ・どんな看護師になりたいかなど自身の考えを伝えることができるかどうか
- ・看護に対する自己の考え方や実践力

- ・医療人になる覚悟があるかどうか
- ・転職している場合その職歴

医療介護福祉学科 4 件

- ・第一印象
- ・表情、姿勢、キャリアビジョン
- ・話を聞く姿勢、考えを伝える力
- ・チームでの連携が図れるどうか

【分析】

昨年度までは面接時の態度に関する多肢選択式であったが、選択される回答が固定されてきたことから本年度は記述式で回答していただいた。

記述式であるため回答は多岐にわたっていたが、両学科とも、コミュニケーション力、情報伝達力（「自身の考えを伝えることができるか」「考えを伝える力」）、質問に対する答え方といった言語コミュニケーション、第一印象、態度、姿勢、表情、清潔感などの非言語コミュニケーションを重視する意見が多くを占めた。また、職場への理解（「当院の理念を理解し共感」「当院で働くイメージがあるか」）や目指す職種に対する考え方（「どんな看護師になりたいかを伝える」「キャリアビジョン」）など、職場への適合性や対人援助職者としての将来設計を重視する回答も見られた。

B 採用した本学の卒業生について

1) 本学卒業生の印象

それぞれの項目について、5段階（5：優れている、4：やや優れている、3：普通、2：やや劣る、1：劣る）の中から当てはまる数字を選択する質問。平均値を示した。

| 項 目 | 看護学科 | 医療介護福祉学科 |
|-------------|------|----------|
| 共感力 | 3.4 | 3.1 |
| 誠実性 | 3.7 | 3.8 |
| 一般常識・マナー | 3.4 | 3.3 |
| 対人関係構築力 | 3.2 | 2.8 |
| 情報伝達力 | 3.1 | 2.7 |
| 傾聴力 | 3.4 | 3.2 |
| 柔軟性 | 3.2 | 3.0 |
| 基礎学力 | 3.3 | 3.7 |
| 専門的知識・技能 | 3.1 | 3.4 |
| 論理的思考力 | 3.1 | 3.1 |
| 役割遂行力 | 3.3 | 3.2 |
| 責任感 | 3.6 | 3.4 |
| 倫理観 | 3.3 | 3.3 |
| 主体性 | 3.1 | 2.8 |
| 探究心 | 3.1 | 3.0 |
| 課題解決力 | 3.0 | 3.0 |
| ストレスコントロール力 | 3.2 | 2.8 |
| 自己管理力 | 3.2 | 3.0 |

その他の印象（自由記述）

看護学科：9件

- ・前向きに意欲的に働いており、周囲の評判も良い
- ・誠実な対応ができる。責任感がある
- ・常に自分事として関心をもち、情報収集力が素晴らしく、キャッチした情報を活かし仕事ができている
- ・真面目な印象
- ・自分から少しずつ発信できるようになった
- ・自信がなく内向的ではあるが、素直で前向き。感受性が豊か。楽観的ではなく、一つ一つの出来事に真剣に向き合い、自身の課題を見つけて、自己学習や努力ができる
- ・ラウンド時の様子であるが、緊張からか表情が硬い時期がしばらく続いていた。夜勤に入る目途が立った頃から笑顔が見られるようになり安心している
- ・協調性や協力体制が弱い
- ・個人差が大きく回答が難しい。貴校だけではなく、入職1年未満という点からも適応段階であるため、努力する姿勢を大切にしながら経験を通して成長できるよう支援している

医療介護福祉学科1件

- ・とても素直で言われたことはきちんとできる。メンタルコントロールや体調管理には不安がある

【分析】

本学の卒業生の印象として、平均値が4.0を超えた項目はいずれの学科にもなく、従来以上に厳しい評価となった。その中でも3.6以上の比較的高い評価を得た項目は、看護学科では「誠実性」「責任感」、医療介護福祉学科では「誠実性」「基礎学力」であった。一方、3.1以下と比較的評価が低かった項目は、看護学科では「情報伝達力」「専門的知識・技能」「論理的思考力」「主体性」「探究心」「課題解決力」、医療介護福祉学科では、「共感力」「対人関係構築力」「情報伝達力」「柔軟性」「論理的思考力」「主体性」「探究心」「課題解決力」「ストレスコントロール力」「自己管理力」であった。これらの項目では、いずれも「やや劣る」「劣る」の割合が高かった。「劣る」という評価のあった項目は、看護学科では「対人関係構築力」「柔軟性」「主体性」「探究心」「課題解決力」「ストレスコントロール力」、医療介護福祉学科では「対人関係構築力」「情報伝達力」「主体性」「ストレスコントロール力」「自己管理力」であった。多くの卒業生は「普通」以上の評価を得ているものと思われるが、わずかな人数でも「劣る」「やや劣る」の評価を受ける卒業生がいると、そのことが本学に対する評価を下げる可能性がある。個人の資質・能力によるところもあると思われるが、今回評価の低かった項目は後述するディプロマ・ポリシーの能力（学生が卒業時に身につけておくべき資質や能力）とも関連することから、大学全体で学生のこれらの能力を伸ばす工夫が必要である。「その他の印象」として自由記述に回答くださった評価は良いものが多かった。

2)-1 ディプロマ・ポリシー（学生が卒業時に身につけておくべき資質や能力）に対する看護学科卒業生が身につけている能力の割合

それぞれの項目について、5段階（5：優れている、4：やや優れている、3：普通、2：やや劣る、1：劣る）の中から当てはまる数字を選択する質問。平均値を示した（小数点第2位で四捨五入）

| 項 目 | |
|------------------------------|-----|
| ①看護の現場で必要とされる看護技術の水準に到達している。 | 3.3 |
| ②根拠に基づいた看護を提供できる実践能力を修得している。 | 3.1 |
| ③主体的に看護を探究する態度を身につけている。 | 3.0 |
| ④他職種と連携・協働する能力を有している。 | 3.1 |

| | |
|-----------------------------|-----|
| ⑤医療人としての豊かな人間性と高い倫理観を備えている。 | 3.3 |
|-----------------------------|-----|

【分析】

ディプロマ・ポリシーの①～⑤のいずれについても、評価点は3.0～3.3であり、卒業生はいずれの能力もおおむね修得できているものと思われる。ただし、「劣る」「やや劣る」の割合をみると、ディプロマ・ポリシーの①と⑤は10%未満であったのに対し、③は26.2%であり、「看護を探究する態度」に関する修得状況が低いと評価されていた。上述の「本学卒業生の印象」においても、このディプロマ・ポリシーと関連すると思われる「探究心」や「主体性」「課題解決力」などの評価が低かった。探究心や主体性、課題解決能力の涵養につながるような能動的学修を、今一層充実させる必要がある。

2)-2 ディプロマ・ポリシー（学生が卒業時に身につけておくべき資質や能力）に対する医療介護福祉学科卒業生が身につけている能力の割合

それぞれの項目について、5段階（5：優れている、4：やや優れている、3：普通、2：やや劣る、1：劣る）の中から当てはまる数字を選択する質問。平均値を示した（小数点第2位で四捨五入）

| 項 目 | |
|--|-----|
| ①生活支援が必要な人への介護実践能力を身につけている。 | 3.4 |
| ②医療介護福祉の専門知識を持ち根拠を明確にした介護ができる。 | 3.2 |
| ③豊かな感性と高いコミュニケーション能力を身につけ、他職者と連携してチームケアができる。 | 2.9 |
| ④医療介護福祉の意義を理解し、人権擁護意識と職業倫理観を身につけている。 | 3.4 |

【分析】

ディプロマ・ポリシー①②④に対する評価点は3.2～3.4であり、「劣る」「やや劣る」という回答はなかったことから、卒業生はこれらの能力を修得できているものと思われる。一方、ディプロマ・ポリシー③に対する評価点は2.9であり、「劣る」「やや劣る」という回答が33.3%であったことから、「豊かな感性と高いコミュニケーション能力を身につけ、他職者と連携してチームケアができる」という能力に関しては、十分に身につけていない卒業生がいるものと考えられる。上述の「本学卒業生の印象」においても、このディプロマ・ポリシーと関連すると思われる「対人関係構築力」「情報伝達力」「主体性」「ストレスコントロール力」がいずれも2点台の評価であった。これらの能力を涵養することで、ディプロマ・ポリシーに掲げた能力を身につけることにつながるものと思われる。

3) 本学卒業生を採用したことの総合的満足度

5段階（5：満足、4：やや満足、3：どちらともいえない、2：やや不満、1：不満）の中から当てはまる数字を選択する質問。平均値を示した（小数点第2位で四捨五入）

| | | |
|------------------------|------|----------|
| 本学卒業生を採用したことに対する総合的満足度 | 看護学科 | 医療介護福祉学科 |
| | 4.2 | 4.1 |

4) 採用した学生について気づいた点（自由記述）

看護学科：11件

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・優しく患者に接している。一生懸命頑張っている ・病院にもなじみ、地域包括ケア病棟で楽しそうに働いている。これからも丁寧に育成していくので、病院への要望があればご遠慮なくおっしゃってほしい ・他校の卒業生の中で、コミュニケーション能力も高く協調性がある ・素直な子ばかりである |
|---|

- ・真摯な態度で責任感を持って看護が実践できている
- ・2024年度の入職者が特別優れているということはないが、2023年度入職者に比べると、人間性や倫理観など姿勢や態度面がずいぶん優れているように感じる
- ・これから協調性や協力体制の必要性がわかるような関わりをしていこうと思う
- ・就職した4名に期待したが、適応が難しい人が多く、途中退職者も出た。早めの異動も考慮できればよかったのかもしれない
- ・学習に向き合う姿勢がもう少しほしい。課題などについていけない傾向がある
- ・自主性が乏しく受け身の姿勢
- ・特にない

医療介護福祉学科 3件

- ・勤務実績も良く、教育の場で学んだ専門的知識を活用して、現場で力を発揮してくれている
- ・前向きに頑張ろうとする姿勢は好感が持てる。指導していく上で精神面に配慮した関わり方を意識している
- ・研鑽、経験を重ね知識技術の習得ができています。担当利用者の想いに寄り添ったケアができています

【3)4)の分析】

本学の卒業生を採用したことに対する総合的満足度は、看護学科では4.2で、「満足」と「やや満足」を合わせた割合は86%であった。医療介護福祉学科は4.1で、「満足」と「やや満足」を合わせた割合は77.7%であった。

採用した卒業生について気づいた点には、本学の指導に対する良い評価につながるものが多かった一方で、学習に向き合う姿勢や主体性などに関する意見、個人の資質に関する指摘などもあった。問題を抱える卒業生に関して、「状況などが分かっていたらと思った」という意見もあった。個人情報の保護という観点から、学生の情報を就職先に事前提供することには限界がある。問題を抱える学生に対しては、就活支援などを通じて、適性を考えた施設選びを指導する必要があるだろう。

5) 本学学生に充実を求める能力など本学に対する意見、要望（自由記述、()内は件数)

看護学科：11件

- ・引き続き当院への入職をお願いしたい(2)
- ・情報交換会などもさせていただけると有難い
- ・優れた教育環境で丁寧な基礎教育がなされている
- ・他職種と連携し物事を進めていけている。協調性を持ち主体的に考え行動できている
- ・当院でも多くの卒業生にご活躍いただいている。近年は、院内でも看護師としての倫理観や接遇の強化についてよく指摘される。学生の中にそういった部分に触れる機会があれば良いと思う
- ・看護師の仕事は、決して楽しいだけでは終わらないため、様々な出来事に対して諦めず頑張れる人材を期待したい。また、専門職として生涯学ぶ姿勢が大切で、働き始める最初の施設が看護師人生を左右するため、一人一人を大切に育成していきたい。関東方面に就職を考えている学生がおられたら、当院をご紹介いただきたい
- ・学生の育成は難しいことだと思う。看護の現場は他者と協力して物事を行うことが必要なので、それが少しでも理解できる学生を育ててほしい
- ・アセスメント力に不足があり学習する力がやや弱いので、本人も行いたい看護ができてないという思いが強くなっている
- ・実習で習得することは難しいと思うが、時間管理能力を構築できていると就職してから困らないと思う
- ・人に伝える力（できること、無理なことを含めて）や振り返る力を身につけられるような教育・指導をしてほしい

医療介護福祉学科：3件

- ・介護福祉士を目指す学生が減少していく中で、一人一人を大切に育成される教育を継続していただきたい
- ・対人関係能力
- ・医療的ケアの充実や多職種での医療連携などは施設での取り組みと大学での学びがつながるところであるため、今後も当施設への就職を勧めていただきたい

【分析】

昨年度までは、本学の学生に充実を求める能力として3項目を選んでいただいたが、本年度は自由記述によるアンケートとした。多様な意見が寄せられたが、本学の教育を評価する意見（「優れた教育環境で丁寧な基礎教育がなされている」「一人一人を大切に育成する教育」）、大学に対する期待（「諦めず頑張れる人材の養成」）、受け入れた卒業生への期待（「自分でしっかり考えられる人に育ってほしい」）があった。一方、本学の教育に対する要望（「時間管理能力の構築」「人に伝える力や振り返る力を身につけられるような教育・指導をしてほしい」「倫理観、接遇強化に触れる機会を学生の間を持たせてほしい」「対人関係能力」）も寄せられていた。また、一部の卒業生に対する非常に厳しい意見が書かれていた。限られた例であろうと思われるが、今後とも個別指導を徹底するとともに、本人の適性にあった就職先の選択ができるよう指導していく必要がある。

今後の課題

1 大学としての課題と対策

令和5（2023）年度卒業生の就職先（病院・介護施設）の人事担当者もしくは上司に依頼して、本学の教育がそれぞれの専門職組織が求めている人材育成になり得ているかどうかについて、評価とご意見をいただいた。採用先からの評価やご意見を本学の教育改善に反映させることが目的である。

アンケートの質問内容は、昨年度までの社会人基礎力を中心にしたものから、対人援助職者に求められる資質・能力を中心にしたものに変更し、ディプロマ・ポリシー（学生が卒業時に身につけておくべき資質や能力）の達成度も評価していただいた。アンケートの回収率は看護学科66%、医療介護福祉学科100%であった。

その結果、総合的満足度（1～5の5段階評価）の平均値は看護学科4.2、医療介護福祉学科4.1で、おおむね満足という評価をいただいた。アンケート結果の分析を通して、誠実で責任感が強いという特長を伸ばすとともに、主体性、探究心、コミュニケーション力や協調性といった対人関係構築力の涵養を目指した能動的学修の充実に努める必要があることが示唆された。また、一部ではあるが、本人の適性に合った就職先の選択ができていなかった卒業生がいることが明らかになった。

今回の調査結果を受け、就職活動支援講座を低学年から行うとともに、大学と学科が連携し、入学時のオリエンテーション、講義や演習・実習、ホームルームでの担任の集団指導・個別指導などにおいて、対人関係構築力を育成する教育を繰り返し行っていく必要がある。特に臨地実習は、コミュニケーション力や協調性、探究心を伸ばさせる重要な機会となり得る。入学時から3年間の学生生活を通じて、将来の職場が病院や介護施設であるということ認識させ、学びと社会性に対する動機づけを図りながら、専門職に対する自身の考えを構築できる学生を育てていきたい。また、学生が自身の性格や特性に合った病院選びができるよう個別支援対策を強化していきたい。

2 学科の課題と対策

看護学科

本学卒業生の印象のうち、看護学科の卒業生は「探究心」「主体性」「課題解決力」の評価が低かった。5つのディプロマ・ポリシーのそれぞれの能力をどの程度身につけているかを尋ねた質問では、③「主体的に看護を探究する態度を身につけている」は5点満点中3.0点であった。看護師は、常に向上心をもって新しい知識や技術を身につけ、自ら考え、他者と協力して患者や家族に最善の看護を提供することが求められる。そのため、令和4（2022）年度から始まった新カリキュラムには「看護フィールドワーク論」や「看護研究」を組み入れ、「探究心」や「主体性」を向上させる教育を行っている。本年度は新カリキュラムにより教育を受けた学生が卒業する年に当たることから、次年度のアンケート調査によってその教育効果を検証したい。「課題解決力」を強化するために、課題解決型学習（PBL）を授業に取り入れるとともに拡充していきたい。

本学卒業生の印象の中では「情報伝達力」も低かった。情報伝達力は、患者に関する重要な情報を医療チームに的確に伝達し共有するために必要な能力である。伝達力を向上させることは容易ではないが、低学年からの演習や臨地実習を通して、情報整理の仕方や伝えるべきポイントを意識化する方法、また、相手の理解度に合わせたコミュニケーションの取り方などを指導することが必要である。「誠実性」と「責任感」については高い評価を得ており、本学科卒業生の強みになっている。

医療介護福祉学科

今回は、医療介護福祉学科が3年制課程になって初めて送り出した卒業生が評価対象であった。「卒業生の印象」のうち「誠実性」「基礎学力」は高く評価されていたものの、「対人関係構築力」「情報伝達力」「主体性」「ストレスコントロール力」に対する評価は低かった。4つのディプロマ・ポリシーの能力に対する評価でも、①②④は概ね修得できているとの評価であったが、③「豊かな感性と高いコミュニケーション能力を身につけ、他職者と連携してチームケアができる」の評価は低かった。この結果と「対人関係構築力」「情報伝達力」「主体性」「ストレスコントロール力」の評価の低さは関連していると考えられ、これらの能力を身につけさせることが今後の課題である。すなわち、能動的学修を取り入れた教育を強化し、「傾聴力」や「共感力」、「情報伝達力」「主体性」を養いたい。傾聴力や共感力を高めることで「対人関係構築力」も強化したい。「ストレスコントロール力」は、心理学などの座学の講義で学修するだけでなく、実習指導などの機会を通じて個別に対応する必要がある。

今回、卒業生を採用した施設からのアンケートの回収率は100%であった。本学では就職先が実習先であることが多いため、就職先と日頃から密に連絡を行っていることも、その理由と考えられる。今後も就職先と連携して卒業生のサポート行うとともに、一人ひとりの学生に寄り添った就職支援を行いたい。

令和6（2024）年度主要行事

※ 学内会議（運営委員会・教授会・教職員会、各種委員会会議）は省略

| | |
|---------|------------------|
| 令和6.4.1 | 辞令交付式 |
| 1 | 新入生オリエンテーション（～6） |
| 3 | 入学式 |
| 〃 | 協会総会 |
| 4 | 新入生健康診断（～5） |
| 13 | 川崎学園入学時合同研修 |
| 5.11 | オープンキャンパス |
| 18 | スポーツ大会 |
| 6.1 | 学園創立記念日 |
| 8 | 医療介護福祉学科 実習開始式 |
| 16 | 3校合同オープンキャンパス |
| 7.6 | 七夕健康まつり |
| 〃 | 第1回公開講座 |
| 21 | 3校合同オープンキャンパス |
| 8.17 | オープンキャンパス |
| 9.20 | 防災訓練 |
| 10.5 | 総合型選抜入試 |
| 19 | 学園祭（～20） |
| 〃 | キャンパスショーケース（～20） |
| 〃 | 第2回公開講座 |
| 26 | 看護学科継灯式 |
| 11.1 | 総合型選抜入試合格発表 |
| 16 | 学校推薦型選抜前期入試 |
| 12.2 | 学校推薦型選抜前期入試合格発表 |
| 13 | 学校推薦型選抜後期入試A日程 |
| 14 | 学校推薦型選抜後期入試B日程 |
| 19 | 学校推薦型選抜後期入試合格発表 |
| 21 | 第1回キャンパスカミングデイ |
| 令和7.1.4 | 仕事始め |
| 20 | 川崎学園防災の日 |
| 26 | 第37回介護福祉士国家試験 |
| 2.1 | 一般選抜前期入試A日程 |
| 2 | 一般選抜前期入試B日程 |
| 6 | 一般選抜前期入試合格発表 |
| 16 | 第114回看護師国家試験 |
| 18 | 在学生健康診断（～19） |
| 3.5 | 第2回キャンパスカミングデイ |

| | |
|----|-------------------|
| 8 | 一般選抜後期入試 |
| 12 | 一般選抜後期入試合格発表 |
| 15 | 卒業証書・学位記授与式 |
| 〃 | 協定会評議員会 |
| 23 | 3校合同オープンキャンパス |
| 24 | 第114回看護師国家試験合格発表 |
| 〃 | 第37回介護福祉士国家試験合格発表 |
| 27 | 在学生健康診断（～28） |

あ と が き

平成 30（2018）年に「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（中央教育審議会）は高等教育が目指すべき方向性として、「学修者本位の教育への転換」や「多様性と柔軟性の確保した教育研究体制の整備」「教育の質の保証と情報公開」等 6 つの視点を示しました。この答申以降本学においても、学修者本位の教育への転換を進めていくために、教学マネジメントと自律的な内部質保証を機能させることに注視してきました。

学生自身が何を学び、身につけることができたのかがわかる学修成果の設定や授業科目間の相互関係、履修順序性を整えた学位プログラムへの改善を進め、教育の質保証として、様々なデータを用いて多元的な学修成果・教育成果の可視化と情報公開を積極的に行うなど、毎年、点検評価を重ねながら高等教育機関としての役割を果たす努力を継続しています。

近年、環境問題や世界のさまざまな情勢の変化に加え、国内においては急速な少子化や高齢化の進展による労働供給不足など社会的ニーズに対応した人材育成の課題が挙げられています。そのような背景を踏まえ、本年、今後の高等教育の目指すべき姿として、「我が国の「知の総和」の向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」（令和 7 年 2 月中央教育審議会）が示されました。答申では、「知の総和」とは、人の数と人の能力の掛け合わせで決まり、その向上のためには、教育研究の質を上げ、一人ひとりの能力を最大限に高める必要を述べています。これまでの学修者本位の教育の更なる推進が期待され、出口における質保証や新たな質保証・向上システムの構築も示唆されました。また、高等教育全体の規模の適正化や地理的・社会経済的な観点から高等教育へ機会均等の確保等の実現も求められています。この新たな答申では、短期大学教育の充実には厳しい視点も盛り込まれていますが、学生の資質や能力を引き出し時代の変化に対応すべく人材育成に努めて、学生が社会に出た後に評価される教育機関となれるように引き続き内部質保証に務めたいと考えます。

岡山の中心地にキャンパス移転して 3 年が経過し、公開講座や七夕健康まつり、認知症関連の行事など様々な形で地域交流を進め、学生たちは、医療福祉人となる姿勢を身につける貴重な体験をさせていただいております。これからも地域の医療福祉ニーズをキャッチしながら、地域連携活動を推進して参ります。

最後になりますが、本報告書の作成に携わっていただいた教職員並びに関係者の方々に感謝申し上げます。

令和 7（2025）年 8 月 1 日

川崎医療短期大学
副学長 新 見 明 子

自己点検・評価報告書

令和6（2024）年度

発行日 令和7（2025）年8月
編集 川崎医療短期大学点検評価委員会
発行 川崎医療短期大学
〒700-0821 岡山県岡山市北区中山下二丁目1番70号
TEL 086-201-5333 FAX 086-201-5676
ホームページ <https://j.kawasaki-m.ac.jp>